

ナルシズムと作品の読本

二〇二五年 九月

九折空也

魂を呼び込めないのは（ ）だからだ	1
あなたは、強烈にわかることに啓けているのではなく、	
（ ） いるのだ	7
ナルシズムは世界への（ ）・（ ）を本意にする	12
「キューン」というのは、（ ）が	
充足するときに鳴る音だ	
ナルシストは、ずっとずっと「（ ）」を重ねてきている	17
ナルシズムは（ ）にはあまり露出しない	22
道理が（ ）わかっていない	28
ナルシズムの克服は「（ ）」なので、ナルシストは	32
そちらの方向には進まない	
（ ）の発見	36
感情に振り回されている自分こそが、やっぱり「（ ）」人	
なのだ、ナルシストは確信する	56
自分が（ ）だなんて、許せない	63
ナルシズム、（ ）！	70
理解はできるけれども（ ）が勝つ	76
創作において、意識を（ ）させない、（ ）もさせない	83
あなたにとって「本気」とは、ナルシズムの（ ）のことだ	89

魂を呼び込めないのは（ ）だからだ

とてもきわどい話になってしまう。

まず、おれは、魂を呼びこむ営為ができてしまう。

このことは、一般の知識においては、どうしてもわからない。

現象についても、やり方についても、さっぱりわからない。

たとえば、プラスチックの風呂桶は、蛍光イエロー、街角のお菓子屋

さんが作るプリンは、カラメルが苦くて甘い。

宇宙ロケットは銀河を夢見て、地球の上空をぐるぐる。

こんな文章をぶちこんで、文脈がどう成り立つかなんて、一般の人に

はどうしてもぜったいにわからない。

おれには、それがわかってしまう。

おれの恐ろしいところは、それが、自分としてわかるというだけでは

なく、なぜそれがわかるのか、原理さえも解き明かしてしまっているところだ。

ここに示している文体・文脈は、なかなかエグいので、一般の人がこ

れを解き明かそうとすると、たぶんガチで体調が悪くなる。

内臓に直接来る感じだ。

フツーに読んでいるぶんにはそれでいいが、なまじ、文学等に興味が

あり、「この文体は……」みたいな解析的読み取りをしようとすると、本

当に体調が悪くなる。

さらには体調だけでは済まず、心身が、ひよっとするとしばらくのあ

いだ、具合悪くなるかもしれない。

そして、さらに、不調のみならず、その先につづく方向づけにも悪影

響があり、あなたは誤った方向へ進んでいってしまうかもしれない。

それぐらい、一般には危険な事象を取り扱っているのだ。

風呂桶がどうこうとか、プリンがどうこうとか、宇宙ロケットがどうこうとか、どうでもいいようなことがだ。

ピカソの絵だって、「ふーん」と観ているぶんには何でもないが、なまじ芸術にあこがれて、本気で読み取ろうとしたりすると、精神がアレな感じになる可能性があるじゃないか。

それと同じだ。

ヤベー文体、ヤベー文脈、ヤバい芸術、ヤバい声というのは、存在するのだ。

多くの人がそれを知らないのは、心身へのリスクとして、しゃれにならず危ないからだ。

多くの人は、過去の詩人や文豪と呼ばれる人たちが、早死したり自死したりする、その理由がけつきよくよくわからないだろう。

わからなくていいのだ。

わかるようになったらあなたまで早死してしまう。

もっと、稽古とか師匠とか、学門とか鍛錬とか、そういうことをがちり蓄えてから、そうした次元のことがわかるようにならないと、本当に危ない。

健全な人の多くは、

「そんな、芸術で精神がどうこうとか、ぜったいならないっすよ」

と余裕をもって笑っているだろうが、念のために知っておくとよいのは、わたしが言っているリスクというのは初め、精神的ではない「体調的」なものとしてやってくるということだ。体調的なものだから対抗できないし、体調的なものだから無視できない。

何とはわからないが、内臓がでんぐり返っていて、苦しい。

横になっても休まらない、視界が歪んで吐きそう。

わけのわからない不安が湧き、わけのわからない怒りが湧いてくる。

われながら意味不明だ。

けれども直後には、わけのわからない悲嘆と絶望が湧いてくる。

取り立てて、具体的に何かがあるわけじゃない。そんなことは言われなくてもわかっている。

何かが「気になって」、眠れない。

何が気になっているのかはわからない。

気になっているものが何なのか、気になるけれど、何かそれを直接視たら、もう何もかもが終わってしまうという気もする。

そうして、最悪の体調が半日もつづき、二日間もまったく眠れないということがつづいたら、それだけで多くの人はそのとき、

「いっそ、もう楽になりたい」

と思いはじめる。

だって、もう元には戻らないもの、と（そのときは）思う。

それぐらい、本当に危ないことなのだ。

おれが書いている文章は、でたらしめに見えるが、じつは子供の落書きではない。

でたらしめに見える文章まで、組み入れて、包含して、魂を呼びこむということが出来てしまうのだ。

しかも文章に限ったことではない。

おれがあなたの食べるピザに、タバスコを振ったとする。

あなたがそれを食べると、そのピザは旨かったとする。

それであなたは涙を流し始める。

「どうしたの、何に泣いているの」

「わからないです」

こんなの危ないに決まっているだろう。

ピザがおいしくて、うれしくて、タバスコを振ってもらえて、あなたはよろこんで、泣いているのだ。

けれども、それで「泣く」ということは一般の文脈にはありえない。

じゃあ、いったいどういう文脈でそうなっているんだ、ということになるのだが、そのことはやはり一般の人は解き明かそうとしないほうがいい。

危険だ。

本職の外科医が、患者に執刀するならば、それは崇高な医療行為になるだろうが、そうではない一般の人が、人の腹部にメスを入れるならば、そこに現れるのはただのグロテスクなもので、ただの無意味な流血と解剖だ。

そりゃ、「吐きそう」にもなるだろうし、その後「眠れない」にもなるだろう。

本当に何かが出来るというのは、魂を呼び込める、ということなのだ。

そしてそれは、大人の出来ることであって、幼児の出来ることではない。

何かを主張する文章というのは、誰にだって書ける。何であれば、人工知能でも書ける。

自分の主張を、文章化するとして、AIに代筆を頼むということが有効なのだと、ちょうど人類は思い知った今日このごろだ。

人工知能にそれが出来るということは、幼児にもそれは出来るということだ。

一般には、幼児は知能が未発達なので、「性能不足」ということが多いが、知能のバックアップさえ足りれば、幼児でも何かしらの主張の文章は書ける。

幼稚園の赤組のうちに、ツイッター(X)で何かを主張する、それにについて白組の子がレスバトルを仕掛けてくるということは、すでにこんなに絵空事ではない。

AIにバックアップさせれば、赤組の子と白組の子が「レスバ」をや

ることは可能だ。

そしてこのことは、こんにち、実年齢としての大人が「レスバ」をやっていることと、本質において差がない。

実年齢が大人であっても、心理的成長の度合いとしては幼児のまま、「レスバ」をしているのだ。

レスバだけではなく、多くのことがそうだ。

だから困っているんじゃないか。

どれだけAIにバックアップさせても、おれの書いている文章を、一般の人が書くことは不可能だ。

おれの書いている文章は、何かを主張しているのではなく、魂を呼びこんでいるのだから。

そして、何度も言うが、魂を呼びこめるということが、本当に何かが出来ることであって、そのことは、大人だけが出来ることだ。幼児に出来ることではない。

ここでおれは、何を言っているかというところ、つまり、すでに現在「一般の人」で想起される人々は、実年齢は大人だけど、心理的成長の度合いとしては幼児の人だ、と言っていることになる。

おれはそれを「一般の人」と呼んでいるのだ。

もうそのようにしか文章を組み立てられないのでしょうがない。

あなたの苦悩を、おれはわかっているし、人々の苦悩についてだって、おれはわかってる。

あなたの苦悩をわかっているのはあなた自身のほうだ。

おれはあたらしい方策に、打って出ることにした。

ここ数年、いやここすでに十年近くか、おれはこの状況に対し、融和策を採ってきたけれど、それにもどうやら限界が来たらしい。

あなたの苦悩の解決のために、あたらしい時代のあたらしいやり方が必要だ。

それで苦悩が解決するとも限らないが、少なくとも整理はされるので、苦悩が暴走するということはなくなるだろう。

あなたの苦悩は何なのか、あなたは何に苦悩していて、なぜ苦悩しているのか。その仕組みのすべては本当はシンプルなのだが、あなたの側からは、そのシンプルな仕組みを読み解くことはできない。

あなたの苦悩は、たとえば、あなたが文章を書いたとしても、そこに魂を呼びこめない、ということにある。

あなたが唄っても踊っても、ピザにタバスコを振っても、そこに魂を呼びこめない。

あなたの苦悩は、ただそれだけが原因だ。

誰かとデートしても、セックスしても、結婚しても、なぜかそこに魂を呼びこめない。

職場で上司が、それっぽいカタカナ語を言い、それっぽいリーダーシップを演じ、それっぽいファシリテーターを務めてみるが、まったくそこに魂は呼びこめない。

これがいま、ぎゃあああ、阿鼻叫喚、となっているのだ。

なぜいま、一般の人々がやることのすべては、魂を呼びこめないのだろうか。

理由は簡単だ。

それは一般の人々が幼児だからだ。

魂を呼びこむというのが、本当に何かを出来るということだが、それは大人が出来ることであって、幼児の出来ることではない。

現代人は、一般が幼児なので、魂を呼びこむということは、一般に出来ない。

そのことを知らされないまま、それっぽいことをやらされているので、いま人々はぎゃあああ、阿鼻叫喚の中にいるのだ。

いま、多くの人が示す文章なんて、読めたものじゃないし、多くの人

が語る何かなんて、聞いたものじゃない。

読めたものじゃないマンガが流行し、聴けたものじゃない歌曲が流行し、観れたものじゃないドラマが放映され、見るに堪えないツイートとコメント欄が横行している。

人々は、バカではないが、幼児なのだ。

人々は、バカではないので、ここで魂に求められているものが、おれの言っていることへの反論ではないということが、うつすらわかつてはいる。

人々は、バカではないので、ここで魂に求められているものは、武装した反論ではなく、おれが唱えているところをくつがえす実作だ、ということがうつすらわかっている。

ただ、その「実作」というやつが、どうしても不可能だ。

幼児には、魂を呼びこむ宮為が出来ない。

だから、幼児は、とりあえず反論はするのだが、その反論を証する実作を提示することは出来ないのだ。

人々は、バカではないので、この悲惨な状況を、なんとかできるものならなんとかしたい、と真剣に思っている。

人々は、バカではないので、この悲惨な状況のまま進むと、全体のことより自分のこととして、たぶん悲惨なことに行き着くということを見ている、さすがにそれはマズい、と予感している。

自分限りであっても、なんとかなるならなんとかしたいし、それで率直なところ、自分と自分の大切な人だけは救われない、と思っている。

それでいいじゃないか。

全体のことなんて、われわれ小さな個人がなんとかできるようなことではない。

おれがここに書いている文章は、何であれ、おれの「こころのまま」ということは、直覚的に認めてもらえるだろう。

齒に衣を着せていないし、冗長にもなっていない。

言いたい放題に言っているだけで、隠蔽されている作為があるとも思えないだろう。

語り口は、まさか慇懃ではないし、一般に晒す文章としては、むしろ碎けすぎている。

そして、おれの書き話を愛好する人にとっては、いつもどおり「この人らしい」声が聞こえているだろう。

そのあたり、一言でいうなら、「自由に、のびのび、自分らしく、あるがまま」に、おれは書き話しているわけだ。

ただ、それによって、なぜかはわからないが、やはり文学の・文章作品の、魂は呼びこまれている。

書き手の魂と、読み手の魂は、緋い交ぜになってここに呼びこまれている。

だから、内容が気に入ろうが気に入らなろうが、少なくとも「読めて」しまう。

少なくとも、言っていることが「聞こえて」しまう。
書き手の「声」が聞こえてしまう。

それが、魂が呼び込まれているという現象だ。
あなたも「自由に、のびのび、自分らしく、あるがまま」に、書き話してみたらい。

あなたがそれをやると、あなたの書き話しに、魂は呼びこまれない。
あなたがやっても魂は呼び込まれないのだ。

それがあなたの苦悩だ。

あなたの苦悩なんてその一点にしかない。
どうして、同じように、自由にのびのび、自分らしくあるがままに、や

っているのに、自分の場合は魂が呼び込まれないのか。
「まだ慣れていないし、練習もしていないから」

誰だってそう考える。

そこから数年間、そのことへの練習と研究を積んだとしよう。

あなたがその練習と研究で知ることとは、あなたのその営為には、やはり魂が呼び込まれない、ということだ。

あなたが真剣に研究するなら、あなたはその研究で、自分のする営為のすべてには、魂が呼び込まれないということを、強固かつ実証的に知るのだ。

なんとこの研究結果だろうか。

そうして研究結果として得られた知見は「正しい」だけに困ってしまった。

正しい知見を得させてくれる研究レポートには、値打ちがあるに決まっているので、困ってしまう。

これではまるで、自分に生きる値打ちがないというような説を、自ら提唱してレポートしているようではないか。

だからこのことは危険なのだ。

過去の、文豪と呼ばれた人たちなども、けっきょくこの単純なことで早死・自死等に至っている。

一般に、音楽指揮者は長生きするということが知られているが、あなたが立场上その音楽指揮者だったとして、自分がコンダクトするその演奏に、

「まったく魂が呼び込まれない」

ということが確認されるばかりなら、あなたは何年間、そのことに耐えられるだろうか。

魂が呼び込まれない演奏は、たとえ五分間のことであったとしても、指揮者の膝をうつつら折る力がある。

音楽指揮者は、魂を呼びこむことが出来るという場合には長生きするのであって、そうでない場合はものすごい勢いで早死するだろう。

おれはいまこのように、よくわからない文章作品を書き話しているが、ここに魂を呼びこむことができるからこそ、おれは書きながら満たされているのだ。

多くの人は、魂が呼び込まれない文章を、原稿用紙の五枚も書いたら、それだけで膝を折られ、ずいぶん厭（いや）な思いをさせられるだろう。

そんなことが、三日も四日も連続でつづいたりしたら。

われわれの精神はそんなに頑健ではないシタフでもない。

だから、つづけてはいけないし、つづけていくべきでもない。

かといって、辞めたからといって、別の道が拓けるわけでもないが：

：

単純に言って、けっこうな挫折を味わう。

挫折、英語で言えばフラストレーションだ。

挫折がレコードされ、精神にフラストレーションの痛苦を味わう。

あなたが五年も十年も、フラストレーションの痛苦の中、練習して研究して、仮に文章を書きつづけたとしても、おれがいまここに書き話しているテキトリーな文体のやつのように、魂を呼びこむことは出来ない。

あなたの苦悩は、どこまでもこの一点にのみ発生している。

バリエーションなんか表面的なものだ。

表面的にはさまざまであっても、一点、「魂が呼び込めない」という、その挫折とフラストレーションの痛み、みじめさに苦しんでいる。

なぜ魂が呼び込めないのか。

その理由もきわめて単純だ。

幼児だからだ。

魂を呼びこむというのは、大人が出来ることであって、幼児の出来ることではない。

実年齢は大人でも、心理的成長の度合いとしては幼児のままというところがいくらかもある。

何をどうやっても、幼稚園の赤組・白組からは、おれの文章は出て来ないのだ。

おれはここ十年近く、人々が幼児なのはさておき、魂を呼びこむという実作・実物・実演ばかりを示してきた。

そのことがなければ話の始まりようがないと思ったからだ。

町中には、幼稚園があるが、幼稚園の役割は、「幼児たちに幼児性を指摘すること」ではあるまい。

幼児たちは、幼稚園でも保育園でも、「大人」というものがいて、魂が呼び込まれるものがあるということを、直接の体験として得ていくしかないはずだ。

原則としていまでも、何よりも先に魂の呼び込まれる実作・実体験のようなものが必要だとは思いますが、そのことのボーナス期間はもう過ぎたのだと思う。

おれはやり方を変える。

おれの目論見には、

「魂が呼び込まれる、その実作、実物、実体験が与えられれば、人はおのずと幼児性を脱却していくはずだ」

という期待が多く含まれていた。

そしてその期待は、十年前には、きつと妥当で正しかったのだと思う。けれども時代は変わり、その期待に懸ける手法は、もう現代では正しくない。

そして人々は、この時代の変化というものに対し、ほぼ百パーセントというほどに従順だ。

時代的に、カラスが白くなったら、きのうまでのことはすべて忘れて、カラスは白い、ということに、人々はなってしまう。

そのようにして、思想に連続性がないというのもまた、幼児性のひとつの現れだ。

おれはやり方を変える。

おれのする営為は、魂を呼びこむが、あなたのする営為は、魂を呼びこまない。

あなたの苦悩なんてその一点に尽きている。

そしておれが満たされているのもその一点に尽きている。

なぜおれの営為は魂を呼びこみ、あなたの営為は魂を呼びこまないのか。

それはおれが大人で、あなたが幼児だからだ。

実年齢ではなく、心理的成長の度合いとして。

魂を呼びこむということは、大人のすること、大人の取り扱う魂魄、靈魂と魂魄の営為だ。

あなたがする営為は、大人のするそれではなく、幼児のする営為だ。

大人のする営為は魂魄のそれと呼んだとして、幼児のする営為は何のそれと呼べばいいのだろうか。

幼児のする営為は「ナルシズム」のそれだ。

おれのする営為は魂魄のそれだから、魂を呼びこむ。

あなたのする営為はナルシズムのそれだから、魂を呼びこまない。

あなたが苦悩する理由はこの一点にある。

あなたは実年齢としては幼児ではないので、自分のする営為が魂魄のそれではなくナルシズムのそれだということに、恥と罪を覚えている。

(日本人はそれを恥と感じ、西洋人はそれを罪[sin, guilt]と感ずることが多い)

あなたは、強烈にわかることに啓けているのでは

なく、() いるのだ

魂を呼びこめりや何でもいいし、魂を呼びこむしかない。

おれがかつて、地べたを這っていたのはこれが理由だ。

おれは何も、自己卑下していたわけではなくて、魂を呼びこむその受け皿は、大地なのだ。

だから地べたを這っていただけだ。

受け皿が逆さまになっていたら、何も受けられないし、何も呼び込めない。

受け皿は地べたでいいのだ。

別にテーブルの上でもかまわないが、そのときはテーブルの天板が「地べた」だ。

ナルシストはここがあべこべになっているのかもしれない。

おれとあなたはあべこべなのだ。

おれは、おれの魂魄が、地べたに受け皿を為すということを、高貴で高潔なことだと思っている。

馬鹿げているが、それは高貴なことなのだ。

地べたにまで、高いところの魂が注がれてくるということなのだから。

ナルシストはこの観念があべこべだ。

ナルシストは、ひっくり返った皿だ。

おれの魂魄は、地べたに受け皿を為し、そこに高い魂が注がれて、万事が統合の向きにはたらく。

ナルシストは、その受け皿がひっくり返っていて、そこにかつて注

がれていたはずの魂は捨てられ、万事は解体の向きにはたらくだろう。

そして解体というのは常にグロテスクだ。

こじれた結ばれが解決するという場合にはよいが、そうでない場合、解体すべきでない統合物を解体し、グロくなってゲロを吐く、という愚かなことになる。

それはナルシシストがふざけているということではない。

ナルシシストは真剣なのだ。

真剣で必死だ。その必死さでいうなら、必死さの度合いはおれなどよりはるかに上かもしれない。

だがそれでも、じつさいにやっていることは、あべこべなので、ふざけているし、両者を並べると、やはりナルシシストのほうが「ふざけている」のだ。

ふざけているわけではないのに、どうしても、根性としてはふざけているということになってしまう。

それがナルシシズムだ。

おれはやり方を変えと言った。

それでじつさい、やはりこのときも、おれは自分の文体・文面を、地べたに這う受け皿と為し、そこに魂を呼びこんでいる。

だから、読めるのだ。

解析しなくても読める。

ナルシシストはこれを解体することしかできない。

ナルシシストの側は実作を示せない。

ナルシシストにできることは、ヨソの実作を正義風に解体することだけだ。

悪口を言っているのではない。

本当に、それが「出て来る」ということだ。その「出て来る」を「出来る」と呼んでいるだけだ。

おれからは気魄の受け皿と呼びこまれる魂の実作が「出て来る」ということ。

ナルシシストからはそうではない逆向きのものが「出て来る」ということ、それを述べているだけだ。

当人としてはふざけてそうしているつもりではないということとはよくよくわかつている。

当人は、六歳ぐらいから、心理的に成長していないので、おのずとそうならざるを得ないというだけであって、ふざけていたり悪意があったりしてそうなっているのではないということは、よくよくわかつている。これも悪口ではない。

ただの悪口であればどれだけマシか。

そうではない、本当のガチガチの事実だから困るのだ。

医者が患者に、メタボを通告するとき、医者は「このメタボ野郎」という悪口を言っているのではなく、ガチのメタボを通告しているだけだ。

そして、それがただの悪口ではない、ガチガチの事実だけに、こちらは本当に困るということ。

現代人は六歳あるいは六歳未満なのだ。

加齢すると、生理的・社会的・知能的には発達するが、心理的には成長しない。

加齢すると、乳歯は永久歯に生え変わり、第二性徴が起こってきては、声変わりしたり月経が来たりするが、そうしたことは自動的に起こる一方、心理的成長というのは勝手に起こらない。

心理的成長はあくまで、当人が向き合い、当人が乗り越えてきたぶんしか得られてこない。

だから、還暦を超えて六歳のままとか、年齢的には後期高齢者になったのに心理的には六歳未満とか、そうしたことはいくらでもある。

それはまったくめずらしくない、この世に日常的にありふれているこ

とだ。

とつぜんだが、あなたには何が「わかる」だろうか。

人は、自分にとってわからないものは摂取しない。

たとえば、幼い男児は「コロコロコミック」を読むし、幼い女児は「ちゃお」を読むだろう。

これは基本的に入れ替わらないし、この差分はわざとらしい性差などではない。

単に、男児には「ちゃお」がわからないし、女児には「コロコロコミック」がわからないだけだ。

人はわからないものを摂取はしない。

幼い男児に、「善の研究」（西田幾多郎）を読ませたって、わからないし、幼い女児に、「留魂録」（吉田松陰）を読ませたって、わからない。

幼い男児は、やがて加齢してゆき、二十歳にもなるが、二十歳になって「善の研究」を読むかという、ほとんどの場合は読まない。

読んだとしても摂取はできないから読まない。

わからないものを摂取はできないのだ。

二十歳になって、善の研究は読まない男性と、二十歳になって、留魂録は読まない女性が、それぞれ同じ大学に入り、同じサークルに入り、同じ「陽キャ」をやったとする。

彼らはそのとき、本当に何かを「わかっている」のだろうか。

本当に、二十歳のその場所で、何かを摂取しているのだろうか。

十五歳の時点で、男は「進撃の巨人」をわかっていた。女は、再放送された「セーラームーン」をわかっていた。

二十歳になって、ふたりは大学生になっており、同じサークル活動をしており、男女交際をして、デートをしてセックスをした。

本当に何かを摂取できているのだろうか。

ふたりで映画鑑賞会をし、「ローマの休日」のような古い映画を観るこ

とも可能だろう。

けれども、冷静になって考えてみてほしい。

二十歳の彼は、「善の研究」との心理的距離をまったく詰め寄らせてはいない。

二十歳の彼女も、「留魂録」との心理的距離はまったく詰め寄らせていないだろう。

彼らは本当に心理的成長を得てきているのだろうか。

加齢して、知能は大学受験に対応でき、立場は大学生になり、成人して飲酒もセックスもするようになったとして、そのことに心理的成長は自動的にくっついてはこない。

「ローマの休日」を観れば、いちおうそれっぽいムードにはなるだろう。

けれども、

「全日本、ヘン顔、選手権ー！」

というテレビ番組を観たときの彼のすなおな大笑い。

「恋愛リアルバトル・彼女が泣くとき」

という海外ドラマを見たときの彼女のストレートな熱中ぶり。

たぶん彼らが本当に「わかっている」のは、そういうものののだ。

単純な、勢いのあるヘン顔、その面白さが「わかる」ので、彼は大笑いしている。

単純な、ドレスと美貌に演出されて、金持ちの男にむらがり、「負けたくない」と戦って傷つく女心、その悲痛さが「わかる」ので、彼女は肩入れして熱中している。

「ローマの休日」は、本当にはよくわかっている。

それっぽいムードになるだけで、^^ふたりの体の真ん中には、在りし日のローマの晴れがましい友情の光景など宿っていないv v。

あなたが本当に「わかる」ことって何だ。

子猫がかわいい、ということか。

オリンピックの試合が燃える、ということか。

この服とネイルがかわいくて、あとこの人は本当に脚がキレイ、ということか。

根暗な画像がよく映えるワードセンス、か。

誰がどの仕事でどうチョンボしがちか、ということか。

ホルモン焼きの食感とあぶらっこさがどう旨いか、ということか。

生まれつきの財産がどれだけ有利で、いじめられっ子がどれだけ不利か、ということか。

こういうアピールをしたら、男が性的にコロツと引かかりやすいか、ということか。

人が一般にどういう人間関係に従属しやすいかという、人情味のことか。

悪趣味な拷問や、SM、その他の残虐性か。

目上の人に対するしきたりや、親族に対する風習か。

ポケモンの種類とひっさつわざか。

会社、権力の中での立ち回りか。

中には「電車」だけ異様にわかるという人たちもいるらしい。

おれはあなたに必要な、本当のことを教えよう。

あなたは根こそぎ、誤解をしたまま生きているのだ。

あなたにとって「わかる」ということ、それは、「わかっていない」ということなのだ。

おれがいまから教えることは、必ずあなたに体得可能なことだ。

六歳未満の幼児が、コロコロコミックに熱中していたとする。

それは、彼にとって、コロコロコミックが「わかる」ということだが、同時にそれは、幼児だから「何もわかっていない」ということでもあるはずだ。

幼女が「ちゃお」を読み耽っていたとして、それは彼女にとってちゃ

おが「わかる」ということだが、やはりそれは、幼女だから何もわかっていないということの表れでもあるだろう。

この、「Aがわかる」ということが、逆に何もわかっていないということを確認している」という状態のことを、幼児性ナルシズムと言う。

もちろん実年齢として幼児のあいだはそれでいいのだ。

だが、このことは、実年齢がいくつになっても引きずられる。

二十歳になろうが、中年になろうが初老になろうが、還暦になろうが、後期高齢者になろうが、引きずられている。

何歳になろうが、ずっと現役の幼児性のまま生きているのだ。

進撃の巨人が「わかる」ということは、「何もわかっていない」ということだ。

セーラームーンや新世紀エヴァンゲリオンが「わかる」ということは、

「何もわかっていない」ということだ。

このことはむしろ、あなたが長年抱えている不安や恐怖、いたたまれなさなどに、うまく当てはまる説明なのではないだろうか。

あなたには、あなたの内部で、強烈に「わかっていない」ことがある。

だからあなたは、自分ひとりが単独でいる場合には、どことなく無敵感を覚えている。

けれども他の誰かと絡むとだめだ。

なぜなら、あなたが強烈に「わかっていない」ことが、他の誰かには通じないからだ。

二十歳の彼が観ている「ヘン顔・選手権」の面白さは、付き合っている彼女には通じない。

二十歳の彼女が観ている「恋愛リアルバトル・彼女が泣くとき」の切なさは、付き合っている彼には通じない。

ふたりで「ローマの休日」を観ても、「ローマの休日」はふたりともよくわかっていない。

「ローマの休日」を観て、彼は「あのときの顔がすごく面白かった、名演技だと思う」と思っており、彼女は「あのときの恋愛感情って、すごくわかる気がする、だから脚本がすごい」と思っている。

それはどちらとも「ローマの休日」ではない。

二十歳の彼は、ヘン顔がわかるというより、じつは「ヘン顔の面白さしかわからない」のだ。

二十歳の彼女は、恋愛リアリティがわかるというより、じつは「恋愛感情しかわからない」のだ。

だから善の研究や留魂録は摂取のしようがない。

あなたには、あなたの内部で、強烈に「わかっている」ことがある。それは、じつはわかっていることへ啓けているということではないのだ。

それは、閉塞している中に、そのことだけが満ちているという状態だ。たとえば、閉塞している中に「かわいい」だけが満ちていたら、わかっているもののすべては、子猫と、おしゃれと、アイドルと、キャラクターと、母性本能だけになる。

閉塞している中に、「面白い」だけが満ちていたら、わかっているもののすべては、ヘン顔と、ドジと、人のぶざまさ、奇抜な恰好と、奇抜な挙動だけになる。

それは啓けているのではなく閉じているのだ。

この根底にある誤解が、ナルシズムの実態、あるいは実物だ。

あなたは、強烈にわかることへ啓けているのではなく、閉じ込められているとこのことが強烈にわかる、だけだ。

センスがあるとか才能があるとかいうことでは残念ながらない。

だからあなたは、「わかっている自分」として話するとき、ますます、人に話を通じないという憂き目にあう。

あなたはずっと誤解をしているのだ。

もう長いあいだ、数十年にわたって、誤解したまま生きている。

六歳児が、「ヘン顔・選手権」を観て、大笑いしたとして、六歳児はその感想を母親に言い、母親に同調を求めるだろう。

「ママ、これすごく面白いね！」

それについて母親は、そうね、とうなずいて微笑んでくれただろうが、それは母親が我が子のナルシズムを、甘えの時期として受け止めていただけにすぎない。

同じやり方が、実年齢として大人になって、知人や同僚に通じるわけがない。

通じるわけがないのだが、六歳児のとき以来、やり方は更新されていないのだ。

ただ生きているだけで心理的成長が得られるわけではないから。

知人や同僚は、いわゆる「空気を読む」ということをして、まるでかつての母親みたいに「そうだね」と微笑んでくれるかもしれないが、やはり母親ではないので、そのことが積み重なってくると、内心では「付き合いきれない」と感じはじめる。

当たり前だ。

彼氏がずっとヘン顔選手権の話をしてくるのには、彼女は付き合いきれないし、彼女がずっと恋愛リアルバトルの話をしてくるのにも、彼は付き合いきれない。

限界まで空気を読むということをつづけるだろうが、そのことはとても消耗するし、つづけたところで根本的に不毛が勝る。

あなたには何が「わかる」だろうか。

あなたには、あなたの内部で強烈に「わかる」ことがある。

あなたにとって、それは強烈にわかる得意分野のため、あなたはそのことについては自信がある。

子猫がかわいいとか、オリンピックの試合が燃えるとか、ネイルが

わいいとか、このワードセンスが光っていると、あの人はこういう仕事でミスをしやすいとか。

強烈にわかり、強烈な自信があるので、あなたは自分の力をぐわっと急上昇させる。

それで、受け皿の配置があべこべになる。

受け皿は持ち上げられ、ひっくり返され、注がれていたはずの魂も捨てられ、失われる。

気魄の使い方があべこべで、これは、平たく言ってバカだ。

魂を呼びこむなんてこと、これでは出来るわけがない。

多くの人の、実作・実演・実態は、このあべこべで示される。

実作、実演、実態、実行ということになれば、スイッチが入るのだ。

ナルシズムのスイッチが入る。

そのことにこそ自信があるから。

ふだんは秘めている、「強烈にわかる」がそこにはあるから。

強烈にわかるそれが、最強の自信で、しかもそこには自信ゆえの、快感まで伴うから。

こうして人々のナルシズムは、強烈な自信に、甘美な味わいさえ具えながら、結果的にはグロテスクな、すべての解体というところに行き着く。

少々でも頭がよければ、じゃあこの受け皿を正位置に置けばよいのだということ、地べたに置けばよいのだということに気づくか、過去の失敗した文豪たちは、みずからの幼稚さを認める気魄を持つことができず、けっきょく六歳児未満のまま死んだ。

ナルシシズムは世界への（ ）・

（ ）を本意にする

人にはさまざまな「気持ち」がある。

「気持ち」は、幼児にだってある。

幼児にだって、「あの子が食べているソフトクリームを、僕だって食べたい」という絶対の気持ちがある。

だから、デパートの床にのたうち回ってでも、食べる、買ってもらう、と泣き叫ぶということをする。

大人でも、そういう「気持ち」は持っている。

たとえば、いわゆる婚活で苦戦している中年女性は、それでも「ハイスペックな相手と、なんともして結婚して、知り合いのすべてを見返してやりたい」という気持ちを、絶対のものとして持っている。

なんとかして自分も勝ち組になりたいという気持ちや、自分のことを馬鹿にしたあの人だけは絶対に許さないという気持ち、あるいは逆に、「もう何をどうしたって無理、無駄」という逆の気持ちも、人によって強く持っているだろう。

あなたのご両親は、「お盆と正月には必ず帰ってきてほしい、それが子というものですよ」という気持ちを、あなたに向けているかもしれないし、あなたの彼氏は、「女は絶対、男を立てるべきなんだよね。結婚してから絶対そうしてもらおう」という気持ちを、あなたに向けているかもしれない。

気持ち、といちいち言っていると語が長くなるので、「気」という短い語に変えよう。

たとえばわたしに、あなたを笑わせたいという気持ちがあったとする。その場合、わたしの「気」、あなたを笑わせたいという「気」は、どう作用するだろうか。

その「気」になれば、すべてがうまくいくだろうか。
なかなかそんなことはない。

その気になればすべてうまくいく、ということなら、われわれはなにひとつ苦勞せず生きてゆけるだろう。

あなたを笑わせる、というわたしの行為を、短縮のために「A」としよう。

わたしは「A気」を持っているということになる。

そのとき、わたしがあなたを笑わせられるかどうかは、そこに「A魂」を呼び込めるかどうかにかかっている。

おれがその気になったからといって、あなたがその気になってくれるわけじゃない。

おれが笑わせる気でも、あなたが笑ってくれるとはかぎらないだろう。あなたはあくまで、おれに屈託がなく、おれの声や話が聞き取りやすく面白かったというとき、その面白さとリラックスのゆえに笑う、というだけのはずだ。

おれの気なんか関係ない。

おれのA気が、A魂を呼びこんだとき、あなたは笑うというだけだ。笑いの魂が呼び込まれたので、あなたは笑ってしまうという、ただそれだけだ。

そうして、魂を呼びこめるということが、本当に何か出来るということ。

もしおれが、そうした本当のことを出来ないならば、あなたはおれに対して気を使い、空気を読んで、おれのジョークが面白くて笑ったという「ふり」をしてくれるだろう。

そのことは疲れるので、あなたはおれとの時間をよろこばなくなる。すべて当たり前のことだ。

あなたを笑わせるだけでなく、あなたにやる気を出させたり、あるいは何かを教えたり、何かを食わせたり、おれからあなたへの行為というのは無数にあるに違いない。

それらのすべては、A気と呼んでよいはずだ。

そしてAが成るか否かは、すべてA魂を呼び込めるかどうかにかかっている。

たとえば、あなたに旨いメシを食わせようとするとき、すべてはそこに「食事の魂」を呼び込めるかどうかにかかっている。

高い金を払って高級なレストランに頼ったからといって、そこで食うメシが必ずしも素敵な食事になるとは限らない。

高級なレストランじたいに興奮するのは、単に自分の低級ぶりにコンプレックスがある人だけだ。

おれの知る限り、おれがメシを食わせて、「生まれて初めて食事というものをしました」と泣き出した人はとても多い。

誰だって、そこまで生きてきているということは、メシを食ってきてはいるはずなのだ。

が、食事の魂がないまま、物理的にだけメシを食うという行為は、まるで呪(のろ)いだ。

まるで、というより、そのまんま呪いだ。

その説明はいまは置いておこう。

Aがまともに成るかどうかは、Aの魂を呼び込めるかどうか、その一点にかかっている。

そのとき、おれの「気」はどのようにはたらくしているのだろう。

それについては、おれは専門家として答えよう。

答、おれの「気」は、何もしていない。

気魄というのは「何もしない」というのが正しい使い方なのだ。

ものすごいエネルギーを放出していたとしても、何もしない。

まんべんなく行きわたるだけで、何もしないということ。その「ノー」のはたらきが、気魄の正しいはたらきだ。

気魄に「イエス」のはたらきはない。

気魄はただ、受け皿を形成する。

受け皿が何かをするわけではない、ただの受け皿だ。

何も降ってこないなら、じつさい本当に何も無い。

けれども、本当にその正しい受け皿が形成されるなら、そこには祈ったとおりの魂が呼び込まれてくる。

「メシ食うか」

その一言に、気魄が発され、気魄は受け皿を形成する。

気魄は、地をゆきわたり、人にまんべんなく「何もしない」を与え、ただすべてを受け皿にする。

そこに食事の魂が呼び込まれる。

魂に「イエス」のはたらきがある。

おれはそのとき、あなたをその気にさせる、というようなはたらきかけはしない。

あなたはたいてい、その気になってしまいうけれども、それはおれがその「気」のはたらきかけをしたということではないのだ。

あなたは、何もされておらず、ゆえに、あなた自身で、その気になるのだ。

気魄の受け皿に食事の魂が呼びこまれた。

あなたにはそのとき、輝かしいほどの「食事」につながる道に立っている。

じつにウマそうじゃないか。

そんなメシを拒絶する人はいない。

人にはいろんな気持ちがある。

おれはいまここに、面白い文章作品を書こうという気持ちがある。

それをあなたに読ませようという気持ちもあるし、あなたの足しになればいいなと願う気持ちもある。

読みやすくなければいけないし、かといって陳腐では話にならないし、合理的な内容に加え、それ以上の文学の力を具えていなくてはならない、という、おれなりに真剣な気持ちがある。

その気になって取り掛かれば実現されるだろうか。

あなたは多くのことについて、この、「その気になって取り掛かる」ということをやってみたはずだ。

そのやり方は、あなたにほとんど成功体験を与えないが、それでもあなたは、死ぬまでそのやり方をつづけるだろう。

なぜそんな不毛なやり方をつづけるのだろうか。

ためしにちょっと、考えてみてほしい。

これだけ露骨に警告していても、あなたは多くの場合、本当に死ぬまでその不毛なやり方を選びつづけるから。

仮にここに、Xさんと呼んだとする。

わたしはXさんに、何か冗談を言うか、漫談でもして、Xさんを笑わせることにしよう。

それを引きついで、あなたもXさんを笑わせればよい。

でもきつと、あなたはXさんを笑わせることができない。

センスがないのか、慣れていないのか、それともそのときになってきゆうに、「向いていない」のか。

そのときになって、きゆうに「向いていない」と言い出す人は、世の中にとってもありふれていて、むしろ多くの人にとってスタンダードとさえ言える。

気の利いたウィットの文脈や、小噺（こばなし）のようなものを、おれ

がメモにしてあなたに書き与え、あなたにカンニングさせることにしよう。

あなたはその虎の巻にしたがい、ウィットの文脈や小噺を示す。

そのようにしても、やはりXさんは、お追従（ついでしょ）ていどにか笑ってくれないだろう。

どうすればいいかといって、あなたは初めから、けっこうな圧力で、Xさんに「空気を読ませる」ということをする。

それがわれわれの日常だろう。

笑わせようとしているのだから、笑ってあげないと気の毒でしょ！ねっ！ という、圧力をかけて、人を支配・コントロールするだけだ。

その点、おれはむしろ、前もって「笑わなくていいですよ」とXさんに向け、慎重に言うことにしよう。

そうしたって、けっきょくXさんは笑ってしまうから。

おれは笑いの魂を呼びこむから、Xさんは、精神運動抑制（うつ病）にでもなっていないかぎり、当たり前前に笑う。

さて、さきほどの問いかけに対する答えは出ただろうか。

なぜあなたは、不毛なやり方をえんえんつづけ、そのやり方から引き下らないのか。

答、あなたは自分の「気持ち」を実現したいからだ。

「気持ち」が直接作用してほしい。

「気持ち」が直接実現されてほしい。

なぜそうして、「気持ち」が直接実現されてほしいのか。

それは、その「気持ち」こそが、「わたし」なのだと、あなた自身に自負されているからだ。

あなたは、本当にはXさんを笑わせたいのではなくて、自分のそうした気持ち、世界に対して支配的にはたらく、ということ望んでいるのだ。

このことは、しっかり考えて、みずからで看破しておく必要がある。

たとえば、世界平和を願う気持ちをもつことは、誰にとっても簡単なことだ。その気持ちを、自己主張・自己表現として打ち出していく人も少なくはない。

けれどもそうした人たちにとって、世界がきゆうに平和になることは、じつのところさしたるよろこびをもたらさしめない。

なぜか？

彼らが望んでいるのは、本当には世界平和ではなく、世界平和を願う自分の「気持ち」が、世界に作用し、世界に対して支配的・コントロール的にはたらく、ということだからだ。

「あたしの気持ちを通じて、世界が平和になったの」

ということを望んでいる。

あたしの気持ちなど関係なしに、勝手に世界が平和になったとしたら、そのことをその人はよろこばない。

それがナルシズムなのだ。

ナルシストは、世界に対し、自分の気持ち（自我）が、支配的・コントロール的に作用することを望んでいる。

当人にそんなつもりはないが、そんなつもりがないのは、そんなことまで考えたことがないからにすぎない。

あなたは、あなたなりにXさんを笑わせようとする「気持ち」を持っている。

あなたは、そうした自分の「気持ち」に無上の価値を置いており、その価値の膝下に、Xさんは支配・コントロールされるべきだと思っているのだ。

だからあなたからはそういう圧力が出る。

「あなたを笑わせようという、あたしの気持ち。これを受けて、あなたは支配されるべきよ」

その気圧を受けて、Xさんは波風を立てないように、空気を読む、ということをする。

ナルシズムはこうして、他者への支配・コントロールを、本意とし、また重大な快感にもしている。

おれの場合は、そうしたことはいっさい混入しない。

もし脳波計で測れるものなら、測ってみてほしいものだ。

本当にこいつ、数値がゼロだ、という衝撃の測定結果をあなたは目撃するだろう。

おれのやることは、笑いの魂を呼びこむことだけ。

おれの気魄は、百パーセントそのことにのみ向けられる。

受け皿の形成にのみ向けられる。

そこに笑いの魂が呼びこまれるのだが、それでXさんが笑ったとして、それはもう、誰が誰を笑わせているのかよくわからない。

呼び込まれた魂による事象だ。

少なくとも、おれの「気持ち」が、Xさんを笑わせているのでは決しない。

おれにとっては、この「魂が呼び込まれる」というナゾの現象、これのほうが、命を帯びていて、ふしぎで崇高だ。

おれが仕手かもしれないが、それにしてもおれのよろこびは、人がそうして不明のまま、呼びこまれた魂に会おう、そこから命を得る、ということじたいにある。

おれの気持ちを通じてうれしいよズキューンみたいなことがいまさらおれにあるわけではない。

おれはもう幼児ではないのだから。

このように説明してみれば、ずばり、あなたは気魄の使い方なんてわかっていないだろう。

気魄というものの存在も、それを使う方向も、さっぱりわかっていな

いだろう。

そしてほとんどの場合、あなたはいまこうして、おれの圧倒的な解説にひれ伏しながらも、内心の根っこで、鳴りやまない反発がずっとあるというのを感じ取るはず。

その反発は何なのか。

その反発は、

「……いや、やっぱり、オレの気持ちだよ」

「……うん、違う。それってやっぱり、あたしの気持ちなの」

という声だ。

ナルシズムの声だ。

その声が消えないことを、おれは知っている。

あなたは知らないかもしれないが、おれは知っている。

おれが示すところの、気魄の使い方は、徹頭徹尾「受け皿」の形成であって、それじたいが何かを実現するということはない。

おれは、呼びこまれたA魂のみが、A事象を実現する、と言っており、

A実現の功績はいっさいおれの「気」にはないと述べている。

あなたはそうではないのだ。

あなたは自分の「気持ち」、自分のその「気」を、最上位に置いている。

あなたは^^世界が自分の気持ちの受け皿になるvvvと思っているのだ。

おれの取り組んでいることとは逆だ。

おれは自分の気魄が、受け皿を形成し、そこに魂が呼び込まれると唱えている。

あなたは、世界を受け皿とみなし、その受け皿に自分の「気持ち」を注ぎ込み、それによって何かが実現されると思っている。

だからどこまで行っても、ここでおれの話していることは、あなたにとってけっきょくは「よくわからない」というものになる。

説明されているうちは、その気になれるかもしれないけれども、いざ

自分で何か小さなことにでも取り掛かろうとしたら、あなたはコロッと本性に戻る。

あるいは、何かストレスが掛かったり、あるいは、あなたと同じ性質の誰かに触れたら、コロッと本性に戻る。

あなたには、れっきとした「あなたのやり方」があるのだ。

「世界を受け皿にして、自分の気持ちを注ぎ込み、何かが実現される」

それがナルシズムだ。

おれはここ十年近く、このことと融和策を採ってきたが、時代と共に、融和策は破綻した。

おれのやり方は違う。いまではもうはつきりと違うのだということを、明らかに述べることになった。

おれのやり方は、あなたとまったく異なるもので、それはむしろ、あなたにとって最も必要ないと感じられるやり方で、あなたにとっていちばん認められないというやり方なのだ。

「キューン」というのは、（ ）が

充足するときに鳴る音だ

おれはいま、ナルシズムについての話をしている。

そしてじつは、おれはナルシズムについて話すのに、ものすごく遠回りな話し方をしている。

おれは本当は、十代のころに、このナルシズムというものについて

勉強・研究したので、仕組みはずっと昔から、もっと細かに知っているのだ。

ただ、それをただ理屈通りに説明しても、あなたにはけつきよく伝わらない。

けつきよく伝わらないし、仮に伝わったとして、それではけつきよく解決はしないのだという、その実例さえ、おれは十代のころに目撃してきている。

もちろん、けつきよく解決するかどうかなんて、その人次第でしかないのだが、おれは少なくとも、ナルシズムがどういう仕組みかということの理屈以前に、それを超克してきた当事者としての、実物を示さねばならない。

だからおれは、ここに、大人になった者が、こうして魂を呼びこむということができるのだという、実作をこそ示し続けている。

そのことはナルシズムの理論説明よりはるかに優先されることだ。

おれがここに呼び込んでいるのは、ナルシズムの呪いではない。

おれがここに呼び込んでいるのは、文学の魂で、さらに加えて言うと、ロックの魂だ。

おれ自身、そのようにしてナルシズムを超克してきた——文学とロックだった——のだから、この題材において、呼び込まれる魂はそのようなものにならざるを得ない。

おれの書き話す文章は、たいていいつも、そういう魂を呼びこみ、読み手はその文章から、そういうサウンドを聞き取ることができるはずだ。

おれはこのように、文学とロックの魂を呼びこむが、ナルシストはここで魂を呼びこむということはできず、代わりに自分の「気持ち」をぶっ込む。

なぜ魂を呼びこまず、勝手に自分の「気持ち」をぶっ込むのか。幼児なのだからしょうがない。

幼児が魂を呼びこむなんてことはできない。

魂を呼びこむということができるのは、心理的成長を経てきて大人になった者だけだ。

魂が呼び込まれるということ。

おれがこうして書き話している文面、その文体について……ふつうは、それじたいが読み取りの内容で、それじたいが読書体験の内容だと思われるだろう。

じつはそうではないのだ。

何度も言うように、おれが書き話して現しているこの文章という形式は、あくまで受け皿でしかない。

おれの気魄が、この文章という形式になり、それが受け皿になって、その受け皿じたいはあなたに対して何もしていない。

だからあなたは、この文章に対し、「レスしよう」というツイッター的発想を起こさない。

おれがあなたに、何かを「する」なら、あなたはそれに対して反応してしまうが、おれはあなたに何もしないので、あなたには反応することじたいが起らないのだ。

だから、流行という側面で考えれば、おれの書き話は、バズるといふことがありえない。

もちろん、バズるなどというのは、誰もが知っているとおりただの随時的癡癡反応でしかないのです、本当にはよろこべるものではないのだから、おれはそのようなことには与しなくていいのだ。

大江健三郎からの影響づくで文学を構築している奴が、「バズる」なんてことあるわけねえよ。

それで言うと、ニーチェとかサルトルとか、ドストエフスキー、マルクスなどは、かつてバズったのだった。

一方、トルストイはバズらないし、アダム・スミスもバズらない。

ウィリアムブレイクやタゴールなどもバズるわけがない。

太宰治や、三島由紀夫、芥川龍之介などは、バズった。夏目漱石や、川端康成などもいちおうバズっただろう。

彼らはもともとインフルエンサーだったからだ。

中野重治などは、インフルエンサーではなく、文学者なので、バズらない。

太宰治や、三島由紀夫、芥川龍之介などが、ナルシシストで「ない」などと言ったら、逆にファンの人たちからさえ怒られるだろう。

彼らは、ナルシシズムが持ち味で、その持ち味が共感を呼びやすかったからこそバズった。いまでも彼らのほうがファンが多い。

「恥の多い人生を送って来ました」とか、「殺されるために走るのだ」とか、そんなことは、よほどのナルシシストでなければ発想するわけがなく、これは完全に、自分の気持ちにしか関心がない者の文脈だ。

そうしたものを、当時は私小説と呼んだようだが、その本質はただの暴露趣味のナルシシズム・トーキングにすぎない。

善し悪しは抜きにして、ナルシシズムというのは幼児性に発生しており、だからこそ、幼児性を脱却しない人から人気が高い。

ナルシシズムを脱却していない人から見ても、言っていることがすごく「わかる」ので、人気が出やすいのだ。

三島由紀夫の映像などを、いまでは Youtube で観ることができるが、発言といい振る舞いといい、わかりやすい上に巧妙に演出が効いていて、じつに現代ならインフルエンサーの筆頭という感じだ。

それに比べて、大江健三郎の、「何を言っているかさっぱりわからない」度合いときたら。

（三島由紀夫と大江健三郎は、十年差ぐらいで割と同世代のはずなのだ）

夜明けまえの暗闇に眼ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする。内臓を燃えあがらせて嚙下されるウイスキーの存在感のように、熱い「期待」の感覚が確実に牀の内奥に回復してきているのを、おちつかぬ気持で望んでいる手さぐりは、いつまでもむなしいままだ。

「万延元年のフットボール」

このように、冒頭から何を言っているのかさっぱりわからない。

こんなものがバズるわけがない。

どんな「気持ち」をぶつ込んだとしても、そんなことでは、こんな文体がえんえん何百ページもつづくわけがない。

いくつか、バズりようがないものを例示しておこう。

朝早く 囁き声がした――

私たちは 小舟で出かけよう あなたと私だけで。

そして世界中の 誰一人も知るまい。

めあての国もなく 終わりもない

この私達の巡礼を。

あの岸辺のない 大洋で

あなたが 黙って耳傾けて 微笑まれると、

わたしの歌は 浪のように 自由な

言葉の束縛から 全く自由な

美しい旋律に 盛り上がるでしょう。

その時は まだ来ないのか。

まだ しなければならぬ 仕事があるのか。

（以下略）

「R・タゴール」

曰く、森羅万象にとって地はその精（ラサ）である。地にとっては水はその精である。水にとって草木はその精である。草木にとって人間はその精である。人間にとって語はその精である。語にとって讃歌はその精である。讃歌にとって讃唱はその精である。讃唱にとっては高唱がすなわちその精である。

かくの如く、高唱なるものは精中の精なるもの、至高、至尊なる第八の精である。

（中略）

すべて、人が何事かを応諾する時には「応！（おう）」と答えるものである。そして、応諾は成功にほかならない。以上の如くに知ってこの一音を高唱として崇信するものは必ずや百般の願望を成就することができるのである。

「ウパニシャッド」

廁（かわや）のなかにはものうい秋の陽がたまつていて

女はどこにいるのか消息もなかつた

黒い一匹の蠅がいてうろろしていたが

最後におれの下腹のあたりに取りついた

おれは手をあげてそれを払ったが

おれは腹が立つて悲しかった

「中野重治「蠅」」

何を言っているのかわからないのだ。

どういう人の、どういう気持ちなのか、さっぱりわからない。

何がどう「キューン」と来るのか、さっぱりわからない。

それに比べて、「恥の多い人生を送って来ました」なら、その気持ちは

わかるし、「キューン」も出来る。

「山路を登りながら、こう考えた」も、エモい。エモくて「キューン」が出来る。

有名な、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」も、エモくてキューンが出来る。

「雪国」の冒頭、「国境の」から「駅長さあん」までの一連の文章は、エモいにもほどがあり、その描写は単純に上手すぎると、わたしでさえ正直、感嘆まじりに認めざるをえない。

それに比べて、

「ブレイクの自然に流露した発想の、グロテスクな奇態さと、それに矛盾せぬ懐かしさ。それを僕はしばしば感じとってきた。しかも自分と息子との生活の細部と、ことのありようとして照しあうものはいくつもあるが、そのひとつは予言詩『ミルトン』の、すでに天上に昇った詩人ミルトンが、墜ちた世界としての地上にくんだり、遍歴する苦行をつうじ妻と娘たちはじめ人間すべてへの救済を実現しようとする、大事業の出発点に見られる。」「大江健三郎 魂が星のように降って足骨のところへ」

これはどうエモいのか。

どう「キューン」とすればいいのか。

こんなものバズりようがない。

何を言っているのかわからないのだ。

人はわからないものを摂取できない。

これが中原中也なら、言っていることはまだわかる。

「汚れつちまつた悲しみに 今日も小雪の降りかかる 汚れつちまつた悲しみに 今日も風さへ吹きすぎる」

これはわかりやすいし、エモくて、キューンと出来る。

それに比べて、中野重治の「蠅」は何を言っているのかわからないのだ。

じつは、ボブディランだって、あるいはサイモン&ガーファングルだって、詩文としては何を言っているのかさっぱりわからないのだ。

（聞き取れないという意味ではなく、詩文じたいが意味不明だ）

それで言うと、むかしは桑田佳祐も、何を言っているのかわからないと言われたそう。

（誘い涙の日が落ちる、というような日本語は存在しない）

おれが何を言っているかわかるだろうか。

それこそ、おれだって、けっきょくは何を言っているのかよくわからないのだが。

おれが言っているのは、エモくてキューンというのが、それじたいナルシズムの産物だということだ。

そのことはちゃんと論理的に説明がつく。

（説明はあとです）

大江健三郎の小説でキューンとなる人はいない。

あなたの彼氏が、真夜中に、落ち込んでいるあなたのことを心配して、二時間かけてあなたの家まで駆けつけてくれたら、あなたは彼氏の果てしない愛にキューンとするに違いないが、残念ながらそれは愛の産物ではなく、ナルシズムの産物だ。

まさか、月9めいてわかりやすいものがマジで本当の愛だなんて思ったのか？

「キューン」は、ナルシズムが充足するときに鳴る音なのだ。

多くの人は、それを「感動」と取り違えている。

サイモン&ガーファングルの歌は、「スカボローフェア」などが特に有名だが、スカボローフェアの詩文が何を言っているのかは、誰にもわからない。

だが、そういうことではなくて……

おれはさっきからずっと、何を言っているかという、「魂を呼びこむ」

という話をしている。

気魄が、詩文なら詩文という形・形式を為し、その形式が「受け皿」になって、そこに魂が呼びこまれるのだということだ。

わかるとかわからないとかの話ではない。

受け皿、その「容器」を、分解して解析して解読するというのは——わからうとするのは——発想したいが誤りだ。

受け皿、その「容器」は、魂を呼び込むためのものであって、そのための用途に作られているのだ。

わかるために作られているのではない。

それを、本来の意味での「作品」と呼ぶ。

「魂を呼びこむ」という、観測不能の現象を担ってしまう、その受け皿たる「品」を作る。

そのことを「作品」と呼ぶのだ。

だから、あなたをキューンとさせるものなんて、まるで本質として「作品」ではない。

あなたは、もう何十年も、そこを根底的に誤解したまま生きているのだ。

作品とは、魂を呼びこむものだ。その受け皿のことだ。

あなたをキューンとさせる作爲物のことではない。

気魄が、何かしらの形式の「受け皿」を形成し、そこに呼びこまれた魂が「遊ぶ」。

作品に魂が遊ぶのだ。

受け皿じたいは遊ばない。

たとえば、プールで遊んでいるのはプールではなく「水」だ。

プールはあくまで「水」の容器だ。

楽しい水、うつくしくてやさしい水を導き入れるには、きれいで、しっかりした、また楽しくなるように造形・デザインされたプールが必要

だろう。

そこでプールの仕事は「水が漏れないこと」だ。

プールという容器じたいは「何もしない」。

ナルシシストは、ここを誤解していて、自分の水を楽しくぶっかけるのがプール遊びだと思っている。

あなたの水をいきなりぶっかけたら、ただの迷惑行為になるだけだ。

おれの水をぶっかけても、誰も迷惑がらず、人がむしろよろこぶのは、おれがプールという容器を形成し、そこに遊ぶ魂を招き入れているからだ。

プールに呼びこまれているから水かけが遊びになるのであって、あなたの水をぶっかけたらそこがあなたのプールになってくれるというわけではない。

プラスチックの風呂桶で、あなたに水をぶっかけようか。

したらあなたの視界は蛍光イエロー、お菓子屋のプリンはカaramelが苦くて甘い。

宇宙ロケットは銀河を夢見て、プールの上空をぐるぐるだ。

何を言っているかわからない。

けれども、おれはそもそも、何を言っているかをわからせるために構文を組んでいない。

魂を呼びこむために構文を組んでいる。

あなたは引き続き、キューンを探しているかもしれない。

ナルシシストには、キューン以外の感動がわからないから。

「キューン」というのは、ナルシシズムが充足するときに鳴る音だ。

そして、逆にナルシシズムが蚕食されていくときは、キューンとは逆の「イライラ」が起こる。

たいていは、きついため息というサウンド付きだ。

ここにはあきらかに、ふたつの異なる営為が存在している。

「魂を呼びこむ」という営為と、「キューンllイライラ」という反復営為が存在している。

そしてあなたは何十年も、前者の営為を知らないまま生きてきている。前者の営為の当事者たるを、まったく引き受けないまま生きてきている。

^^魂を呼び込むということを、まったく受けて立たない、幼児のまま生きてきているvv。

あなたには何が「出来ない」のか、何が出来なくて苦しんでいるのか。簡単なことだ。

おれがあなたに、

「これのつづき、あなたが書いておいて」

と頼んだとしても、あなたはまったくそれが引き受けられないということだ。

おれがこうまで、濃厚に魂を呼びこみつつけているのに、あなたはそれを引き継ぐことさえできないということ。

おれはここまで、文面・文体を受け皿にして、文学の魂を、書き手と読み手ともどものものとして呼びこみつつけて来ているが、あなたがこれを引き受けると、あなたは幼児のように、その受け皿を持ち上げてひっくり返し、ナルシズムのまま、

「魂が失われました。なんかもう無理です」

とイライラして言い出し、さらには呪いを吐き始めるのだ。

キューンllイライラだけを何十年もつづけてきたのだろう。

おれはそれについて悪口を言っているのではないし、責めているのではない。

根底にあるどうしようもなさを解明して整理しているだけだ。

それで、どうしたらいいと言って、どうするもこうするも、成長するしかない。

心理学者の加藤諦三先生いわく、ナルシズムを脱却するには、心理的に「成長する」しかないのだ。

どうやって解決するか、という話ではない。

六歳児は七歳児になるべきだということ。

その積み重ねで大人になっていくしかないのだから。

魂を呼びこむということは、大人にしか出来ないことだ。それに苦しみつつけるというのは、最終的に筋違いだ。

ナルシストは、ずつとずつと「**（ ）を重ねてきている**」

ナルシズムとはけつきよく何なのか。

ずばり、教えよう。

あなたは、自分の気持ちで、「人が言うことをきいてほしい」のだ。

説明はまだまだ続くのでご心配なく。

人が、言うことをきいてくれるということ。

ああしてほしい、こうしてほしい、わかってほしい、というようなことを、つまりは、ウンウンといって、肯定して、きいてくれるということ、わかってくれるということ。

この、「言うことをきいてくれる」という表現は、慣用的にたしかに存在しているが、用法があやふやだ。

よく言われるのは、母親が自分の子について、

「最近、ウチの子がもう、言うことをきかなくなつてねえ。反抗期かしら、本当に困るわ」

というようなことだ。

慣用的に、そうして「言うことをきく／きかない」という言い方がされる。

ナルシズムというのは、けつきよくのところ、自分の気持ちから、「言うことをきいてほしい」に尽きる。

ここで、「けつつきよくのところ」と、促音便を並べたい気分になされる。

本当に、色とりどり、表面的にはバリエーションと、紆余曲折が展開されるのだけれど、けつつきよくのところは、自分の気持ちから、人に言うことをきいてほしい、ということに尽きる。

そして、自分の気持ちから、人が言うことを聞いてくれるということ、ナルシズムにおいては「美」なのだ。

ナルシズムにおいては、それが美であり、やさしさであり、感動であり、胸がキューンとなる。

それだけが救済となる。

このことは恐ろしいことなのだ。

人が、自分の言うことを聞いてくれるということは、つまるところどうということなのか。

しかも、それが自分の「気持ち」からというのは？

それは、支配とコントロール、ということを意味している。

人が言うことをきくというのは、支配でありコントロールだ。

それも、自分の「気持ち」がそれを為すということ。

自分の気持ち、他者を支配し、コントロールする。

そのことに、キューンという快感が起こる。

そのことは、ナルシシストにとっては、美であり、やさしさであり、感

動であり、救済であり、真実だ。

^^ナルシズムは徹頭徹尾、支配とコントロールの欲求に端を発し、もともとから、支配とコントロールの欲求に行き着いているvv。

それは、最終的にあきらかになるところ、まるで怪物めいた欲求なのだ。

六歳児のまま加齢していくというのはそういうことだ。

まず、あなたにとり憑(つ)く正義のようなものは、そのほとんどがウソだと思え。

自分自身、そのウソにとり憑かれるのだ。

上司が口を酸っぱくして、部下に何ごとかを説教をし、部下にあしらる・こうしろと指導をしている。

この上司は、仕事をしているのではないし、業務を執り行っているでもない。

ずばり断じて、「人が言うことをきくと気持ちいい」のだ。

仕事をしているのではないし、部下に何か正しいことをさせようとしているのでもない。

言うことをきかせたい、だけだ。

人が言うことをきくと、キューンと、気持ちよくなる。

「わかつてくれたか」

という感じで、キューンとなる。

交際している彼女が、高額のアクセサリーをねだつてくると同じだ。

彼女は高額のアクセサリーがそこまで欲しいわけではない。

そこまで欲しいなら自分で稼いで購入するだろう。

そうではなく、人が言うことをきくと、快感で、キューンとなるのだ。

彼氏が言うことをきいた。

わたしの気持ちから、言うことをきいてくれた。

十八万円もするアクセサリーを買ってくれた。

言うことをきいてくれた。

そのことに、キューンとなる快感がある。

先日、わたしがさびしいって拗(す)ねたら、夜中なのに、二時間もかけてなぐさめに来てくれた。

わたしの気持ちから、言うことをきいてくれた。

本当に胸がキューンとなった。

そのことが、ナルシシストにとっては、美であり、やさしさであり、救済であり、真実なのだ。

おれはこのことを責めているのではない。

ナルシズムというものが、仕組み上、必ずこうした支配とコントロールという結末へ行き着くということを、ひたすらレポートしているにすぎない。

ナルシシストだって、毎日部下に説教するわけではないし、いきなり十八万円のアクセサリーをねだるわけではない。

そうではなく、ナルシシストは前もって、ずいぶん「我慢」をしているのだ。

「我慢」の蓄積が先にあつて、それがついに爆発する、という手続きになる。

ここはじつにポイントだ。

ナルシシストは、ずっとずっと「我慢」を重ねてきている。

その「我慢」の果てに、耐えきれなくなつて、ついに言い出すのだ。

ああしろ、こうしろ。

ああしてほしい、こうしてほしい。

そうでないともう無理だよ。

わたしはね、これまでずっと我慢してきました。

どれだけ我慢してきたかわかる？

でも、いよいよ限界。

だから、ああして、こうしてくれる？ わかつてくれるよね。

必ずこういう文脈になる。

そしてこの文脈は、ナルシシスト本人にとって、本当にそのとき燃え立つほどの真実なのだ。

ここであなたに、決定的な扉を開く、決定的な鍵を手渡しておきたい。

いわく、

^^あなたは、人が言うことをきかないということを、わずかも納得はしていないVV

ということだ。

どういふことか。

たとえば、おれがナルシシストだったとしよう。

アハハハハハ（なぞの笑い声。これは気にしなくていい）

あなたがスーパーマーケットで、ティーバッグの紅茶を買っていたとする。

あなたが手に取ったそれは、置いてある中で最安のものだった。

おれはふと思ひ、こう言う。

「紅茶って、あんまり安いやつだと、味も香りも薄すぎて、飲まなくなつて逆にもつたないってこともあるよ」

それについてあなたは、フーンと言ひ、

「フーン、でもまあ、いいよ。わたし紅茶って、色ついてりゃそりていいってタイプだし」

と、あなたは手に取ったその最安のものを、そのまま買うことにした。

このとき、おれがナルシシストだとうなるか。

おれはあなたを、内心で鼻で笑い、

「すなおじゃない奴」

と貶(けな)す。

ん？

奇妙なことだ、これは何の話か。

ナルシシストの文脈はこういうものだ。

当人に自覚はなくとも、このときナルシシストのおれから見ると、あなたはおれの「言うことをきかない奴」なのだ。

もちろん冷静に、客観的に考えるなら、どんな紅茶を買おうが、それは購入する当人の勝手でしかなく、そこにおれの「言うことをきく」というような文脈は、そもそもから発生しえない。

あまり安物だと、飲まなくなつて逆にもつたいたいということじたいは、たしかにあるのかもしれない。

あるのかもしれないが、それにしても、当人がその安物でいいやというなら、その安物を買うだけのことははずだ。

しかし、ナルシシストは、永遠にこのことに納得しない。

「せっかくおれが言つてやつてんのにさ」

もちろん口に出していちいちそのように噛みつくわけではない。

内心でずっとそう思いつづけているというだけだ。

人が、自分の言うことをきかないということに、永遠に納得がいかないのだ。

ナルシシストのおれは、あなたがおれの言うことを聞き、ちょっとだけ値段のする紅茶を買うということを、自然で正当なものと信じている。

あなたがそうして「言うことをきいた」とき、おれの中にはキューンという快感が走る。

ナルシシストのおれは、ずっと、そういう快感の中だけを生きていくべきだし、そういう中を生きていく、自然で当然の権利があると思つている。

他人が、おれの言うことをきくのが当たり前で、おれの言うことをきかないということには、永遠の不当さがあり、決して納得することはないのだ。

まあ、許してやらなくはないけど。

本当にそんなことを思っている。

ちよつと値段のする紅茶のほうだが、結果的に良いかもしれないよ、というのが、このときおれがあなたに向けた「気持ち」だった。

あなたは、おれの差出口に一定の理解を示したが、けっきよくのところおれの言うことはきかず、あなたは最安の紅茶を買った。

このとき、おれの中では、小さくはない「我慢ポイント」がグッと加算される。

「まあまあ、いいじゃん。こいつが買いたい紅茶を買えばいいさ。ま、すなおじゃないとは思うけどね」

そのように考えて、おれは「我慢」するのだ。

しょうがない、我慢、我慢。

我慢？

お前がいったい何の忍耐・辛抱をしたというのだ。

わけがわからないけれど、これがナルシシストの内部文脈なのだ。

そして、これが六歳児のままの内部文脈で、じっさいのところ、これが世の中の大人の、多くの場合での内部文脈だ。

おれはこのとき、何に対して「我慢」をしているか。

おれはこのとき、^^あなたがおれの支配とコントロールを拒絶したVVということに、我慢をしているのだ。

あなたはおれの支配とコントロールを受け入れず、それに反発した。

その許しがたいことを……それでも「しょうがないから許してやろう」とする、いわゆる寛容さのころにおいて、おれは我慢をした。

ただ、それでも、おれにも我慢の限度というものがある。

我慢というのは蓄積していくポイント制だから。

もつといういろいろ言つてやることにしよう。

「その服装には、こないだのカバンのほうが合っていると思う。そのカ

バンはぜんぜん色が合っていないでしょ」

「そのおにぎり、ゆかりを入れすぎでしょ。入れるのはほどほどにしておかない」と

「ここで待ち合わせるからといって、そんな植え込みに座ってなくていいじゃん？ もっとあっちのベンチとかに座っていたらよかったのに」

「どう考えてもさ、その洗い物の場合、先に鍋を洗ったほうが早く片付くよね？」

「それを食べるなら箸よりフォークのほうがいいでしょ。箸で食べるのは、何、なにか独特のこだわりがあるの」

「あなたみたいなタイプは、今の仕事より、こういう仕事とかに就いたほうがいいと思う」

「なんか太ってきた？ 年齢的に、そろそろ野菜を多めに食べたほうがいいよ」

「PC使うとき、あなたのそれ、モニタと目が近すぎない？」

「どういう暮らしをしてきたか、見つめ直して、もっと丁寧な暮らしを目指したらいいと思う」

「同じマンガを読むにしても、もっとこういうマンガを読んだほうが、人と話が合うようになると思うよ」

「電話に出るとき、なんか口調に独特のクセがあるよね。気にしたほうがあなたのためかも」

「その眉毛なんだけど、眉毛の整え方について、美容師さんに、もうちょっと注文出したほうがいいと思う」

「買い物袋をそういうところに置くの、悪いクセだね。自分で気づいていないんだろうと思うけど」

おれの、思ったことを、ぜんぶ言ってやろう。

おれの、思ったこと、思ったこと、思ったこと、思ったこと、ぜんぶ、ぜんぶ、ぜんぶ、ぜんぶ、言ってやろう。

言ってやろう。

言ってやろう。

言ってやろう。

おれの気持ちだ。

あなたはおれの言ったことをきいてくれるよね。

それとも、あなたはいちいちのことに口出しされて、そのことにいかげんうんざりし、「もうやめてください」、と言うだろうか。

あなたがそんなことを言うなら、おれはとてつもない激怒を現わすだろう。

「おれだって、言いたくて言ってんちゃうわ！！！」

突然の大噴火だが、おれにも我慢の限度がある。

「おれが、どれだけ言っても、お前が言うことをきかんから、こっちはずっと我慢してやってるんだろが！！！」

なんだこの激怒は。

どういう仕組みで激怒しているのか。

あなたの側としては、本当に意味がわからないだろう。

けれども、これがナルシシストの文脈なのだ。

おれは何に激怒しているか。

あなたがおれの支配とコントロールを受け入れないことに激怒しているのだ。

せっかく「言ってやっている」のに、あなたは支配とコントロールを受け入れない。

せっかく「言ってやっている」のに、これではあなたと付き合うことじたい無意味だ。

それについてあなたは、おれの支配とコントロールを受け入れなくてはならないなんて、そんな義理も道理もない、と言うだろうか。

あなたがそんなことを言うなら、おれだっていいよ我慢の限界だ。

おれは巨大なため息をつき、

「だからあ、そうじゃなくって……。ハー。あー、しんど。もういいわ。

もう何か、何もかも無理だわ。本当にわかってもらえないのね。ハー。もうわかった。もう、いいです。なんかもう、おれがいままで生きてきたことの意味が、ぜんぶ無いなーって、逆に確信したわ」

おれは、空気を最悪なものにして、あなたを窒息させ、その圧力をもってあなたに罪の改悛を求めるだろう。

おれは、あなたが、

「ごめんなさい、わたしが間違っていたわ」

と謝ってくれるのを期待している。

そのときはまだ、希望のやさしい光が差すだろう。

あなたがすなおに謝ってくれる、ただそれだけでいい。

おれがどれだけ我慢していたのか、わかってくれて、謝ってくれたらそれだけでいい。

それ以外のことはおれは決して受け入れない。

このとき、ナルシシストのおれは、あなたに「わかってほしい」のだ。

あなたがわかってくれるなら、まだぎりぎり、おれはあなたのことを許せる、と感じている。

おれは何をわかってほしいのだろう？

それは、いわずもがな、おれの「気持ち」だ。

おれの気持ちをわかってほしい。

おれがどれだけ我慢を重ねてきたかも含めて、おれの気持ちをわかってほしい。

そして、おれの気持ちから、言うことをきいてほしい。

おれの気持ちから、支配を受け、コントロールを受けてほしい。

あなたがそれ以外のことを言うなら、おれはたぶん、あなたのことをけっきょく永遠に許せない。

なぜなら、おれの気持ちから、あなたが支配とコントロールを受け入れるということ、そのことだけが、美であり、やさしさであり、救済であって、真実なのだから。

あなたが、おれの気持ちをわかってくれて、おれの気持ちから、支配とコントロールを受け入れてくれるなら、おれもあなたに、もっとやさしくしていくことができると思う。

ここまでずっと、あきらめずに言いつづけてきたのは、いつかあなたが「わかってくれる」と信じたからだ。

もしあなたが、ここまで来てなお、おれの気持ちと、それによる支配を受け入れないと言ったら？

そのときは、おれはドス黒い激怒と憎悪をさらに強めて、あなたに、「最悪」

と言いつけて、罵るだろう。

「人として、最低。よくそんな最低なことと言えるね。聞いているだけでマジで吐きそう」

ナルシシズムは、このように激烈だ。

そしてこれは、ナルシシストのなれの果てということではない。

これが抜きんでてスーパーナルシシズムというわけでもなく、これがナルシシズムとして標準的なものだ。

ナルシシズムというのとはもともとがそういうものなのだ。

自分の気持ちだが、他人を支配し、コントロールする。

そのことだけがうつくしく、そのことだけがやさしきで、そのことだけが救済で、そのことだけが真実だ。

こころのつながり。

こころを大切にすること。

こころを信じられる人のこと。

すべてはあなたが、言うことをきいてくれたらそれで済むのだ。

なぜそのことに、あなたはそんなにまでして抵抗するの？
おれには本当にわからない。

あなたが言うことを聞いてくれたら、キューンと、おれの胸は熱くなり、すべては解決して、すべてはやさしさに包まれて、すべては笑顔の光景になるのに。

それだけで済むのに、どうしてあなたはそうしないの。

それはあなたが救いたい邪悪だからなんだろうね。

ナルシシストのおれは、そのとき本当にそのように強く確信している。自分のほうがどこかおかしいのではないかと、そのときわずかも思わない。

魂を呼びこむというようなことと、ナルシシズムが、いかにかけ離れているか。

ナルシシストのおれという仮定を、もう取り外すとして、おれは己の気魄を、何かしらの形式に現成させ、それを受け皿にする。

その受け皿に魂を呼びこむ。

呼び込まれた魂が遊ぶ。

魂が遊ぶのであって、おれの気魄は、あなたに対して「何もしない」。

ナルシシストの気魄はまったく逆だ。

「何もしない」のまったく逆。

ナルシシストの気魄は、気持ちで他者を侵略し、他者を支配・コントロールしようとする。

ナルシシストにとってはそれだけが美だ。そのことだけが、その人をキューンと気持ちよく感動させ、救済する。それはもちろんニセの救済であって、ナルシシストの眼球が最後まで明るかった試しはない。

ナルシシズムは（ ）にはあまり露出しない

ナルシシズムという致命的な様相は、平常時にはあまり露出してこない。

いや、本当は、常に露出はしているのだが、われわれはそのことへの視力を持っていないのだ。

じつさいには、ナルシシズムの致命的な様相は、平常時でない「ちょっとしたとき」に露出してくる。

それ以上の、決定的なときには、やはり決定的なものとして露出してくる。

当人が自分のことをナルシシストだと知っているわけではない。

当人はあくまで「ふつう」にしているつもりだ。

当人はあくまで「ふつう」、あるいは、それ以上に善意的であったり、それ以上に意欲的であったりしているつもりだ。

その様相が、まさかナルシシズムと呼ばれるなどとは、当人はまったく予想していない。

それでいて、それがナルシシズムだと指摘されると、なんとなく、遠巻きに、うつすらと、こころのどこかで、思い当たるふしがないではないのだ。

そのあたりの「掴みづらさ」も、このナルシシズムという現象の特徴だと言える。

幸いというべきか、気休めになることとしては、そうしたナルシシズムの人というのは、世の中にまったくくめずらしくはなく、何であればいっそナルシシストのほう为标准に近いとさえ言えるかもしれないということだ。

ナルシシストというのは標準的な存在だ。

あくまで一般平均と比較すればという話だが、その比較の中ではナルシシストは、全体に対して特別に出遅れたという存在ではない。

ありていにいうと、そのあたりは、多くの人にとって「五十歩百歩」というところがある。

一方で、そうした人たちがいつそ標準的というほどに数多いということは、それじたいが、われわれの空間にずっと垂れこめている暗雲の正体なのかもしれない。

まあ、そのあたりは、他人をあてこすっているかぎりは決して救われないだろう。

自分の問題として向き合える人にだけ、なんとかなる可能性が残されている。

ナルシシズムは、平常時にはあまり露出しない。

たとえば、いつものように無言で出社し、多くの日常業務を進め、帰り道にカフェに寄ったり、ジムに寄って汗を流したりして、それぞれ帰宅したらテレビ番組や動画サイトを観て過ごしているというような中で、ナルシシズムはあまり露出しない。

あるいは学生が、いつものように制服で通学し、いつものように級友と、マンガの話やアイドルの話、化粧の話などをし、放課後には部活動の強化メニューをこなすなどして、あとは帰宅して食事を取って寝るというように暮らしている中で、やはりナルシシズムは露出しない。

ナルシシズムが露出するのは、「ちょっととしたとき」だ。

ちょっととしたとき、つまり、少々であれ、魂の営為に直面したときに、そのナルシシズムは出現する。

最も小さなこととしては、たとえば誰かが気の利いたジョークでも発したときだろう。

そのジョークは、内容としてもタイミングとしても冴えたもので、単

なる「ネタ」とは言えない、あざやかさのあるものだった。

われわれは一瞬、そこに安易な「才能」の存在をうかがってしまう。

しかし、本当にそこに佳いものが現れるとき、それは才能がどうこうということでは現れているのではない。

魂が呼び込まれているのだ。

ある男子生徒が、ひとりの女子生徒に、ちょっとやさしく寄り添う拳動をした。

そのときに、何か空間が歪むような、「ちょっとした」、日常とは違う光景が現れた。

魂が呼び込まれている。

そこに、ごくわずかな断片だが、やさしい男性と、幸福な女性、というような光景がちらつく。

誰かの気魄が、何かの受け皿になり、それが場所になって、魂が呼び込まれる。そこに魂が遊ぶ。

そこで、心理的な成長を経てきていない人は、そうした魂の現象には呼応できないので、パニックになる。

「なんか、眠くなってきたわ」

昼の日に、なぜかとつぜんそんなことを言い出す。

「暑く。きょう、なんか異様に暑いっすね。暑、というか、蒸し蒸しする」

なぜかとつぜん、毒気のある言い方で氣候を罵る。

「はあ。なんか、きょうはぜんぜん、やる気がしません笑。きょうって何か、そんな感じしません？」

と、周囲のすべてをネガティブなものへ引きずり込もうとする。

文化祭の演し物で、ありふれた演劇をやることになった。

すると、クラスメートの中でいわゆる「一軍」と呼ばれるような人たちが、「超ウケるんだけど」と大声で言いながら、それでも演劇の組み立

てにはしゃぎ、盛り上がっている。

その中で、一軍ではないひとりの女子生徒が、端役ではあるけれど、ありふれたセリフを言うとき、そのセリフの声でなぜか空気が変わる。

ありふれた、それほど意気込んではいない演劇、一軍の人たちがただ「はしゃぐ」ための材料でしかなかったお遊びの演劇に、「そうではないもの」が混入する。

「一軍」の人たちが、やはりパニック様の挙動を起こし始める。

そういう「ちょっとしたとき」に、ナルシズムは露出する。

たとえば、「就職面接ぐらい余裕っしょ」とうそぶいていた人が、次々に一次面接で落選したとき。

「大丈夫かよ」と茶化されていた新人が、プレゼンの本番では堂々たるフアシリテートを示し、同僚たちをどよめかせつつ、臨席していたグロ―バルマネージャーから直接認められたとき。

クラスメートの中でも地味でトロい子とされていた人が、なぜか数ヶ月で、外国語のスピーキングをものに始めていたとき。

子供たちが、親たちの言うことをきかず騒いでいたところ、子育て経験のない青年が「静かにしなさい」と穏やかに言うとき、なぜか子供たちがその青年の言うことだけはすなおにきいたとき。

夜、おしゃれなカフェに入ったとき、小ぎれいな店員さんと、自分話がかみ合わなかったのに、自分の連れてきた友人のほうは、華やかに話が弾んだとき。

そんなことはいくらでもある。

どれもすべて、ささやかではあれ、魂が呼び込まれるということが起こったときのことだ。

ふつうのマーケットでパンと卵を買い、彼がサンドイッチを作ると、なぜかそれがやけにおいしかった。

名前もよくわからない打楽器を、みんなでたわむれに叩いてみたが、

なぜかあの人が叩いたときだけ、ふしぎな感じがした。

誰かから電話が掛かってきたらしく、友人がその電話に出たが、そのとき力強く「おう！」と言って、その一声がすぐ打ち解けてきずなを感じさせた。

一緒に着物の着付けを習い始めたが、なぜか友人は、和室でたたずまいがうつくしくなり、ハツとさせられるようになった。

バーでギター演奏をしているとき、話には聞いていたが、じつさにそのバーに行くと、彼は信じられないほどみんなに慕われていて、強い拍手を受けていた。

「このごろどうしているの」と、いつもどおり酒の肴に訊くと、彼女が話すところ、彼女が最近任されている仕事は、自分ではおおよびもつかないほど大きなものになっていた。

現場を仕切っているとは聞かされていたが、いざその現場に行ってみると、彼はとんでもなく大きな声を豊かに出せるようになっていて、その監督ぶりには、まるきり気圧された。

「先日教えたやつ、ちゃんと把握しているか」と言われ、自分は「ぜんぜんです」と、テヘヘという調子で応えたのに、同僚はしれっと、ほぼ完璧に把握しているところを披露し、先輩に力強く「やるじゃないか」と言われた。

魂を呼び込める者と、呼び込めない者の差。

魂を呼び込めるようになりつつある者と、そのようにはなっていない者の差。

そのような差が浮き彫りに出てくるとき、ナルシズムが露出してくる。

単純に言って、「じつはすごい人だったのかも」ということ。

単純に言って、「じつはすごい人になりつつある」ということ。

そのことに、ナルシストは対抗できない。

同僚は、Aのプロジェクトを任されることになった。

上司とやりとりをして、その受け答えから同僚は、そのプロジェクトの肝をじゅうぶんに把握しているようだった。

次いであなたは、Bのプロジェクトを任されることになった。

Bのプロジェクトは、Aのプロジェクトほどむつかしくはない。

それで上司はあなたに、

「Bのプロジェクトの肝は、わかっているな？」

と確認する。

あなたは、

「……えっと、はい。たぶん、わかっている、はず、です。はい。あの、わかっている、と、思います」

と言う。

上司は訝（いぶか）り、

「お前なりに捉えているところの、概要を言ってみて」と促す。

「……えっ？」

同僚は少しずつ、すごい人になりつつある。

あなたは、その同僚に比べて、じつは根本的に「よくわからない」ままそこに生きている。

本部長が定年で勇退することになり、送別会が催されることになった。

同僚が送辞を述べるはずだったのだが、急病になり、同僚は送別会に行けなくなった。

代理で、あなたが送辞をする事になった。

どんなことを言えればいいか、よくわからなかったが、ネット検索もできることだし、あなたは無難にありふれたことを言えいいだろうと思っていた。あなたは学生時代にもそうした飲み会に慣れている。

ところが、あなたは「飲み会」の調子で送辞を述べるのだと想像して

いたところ、そうではなく、到着してみると会場はずいぶん立派なところで、雰囲気はいささか厳粛だった。

現場についてから、きゆうに方針転換できるわけもなく、あなたは居酒屋ふうの半笑いで、本部長への送辞を述べた。

その調子は、もちろん一同にころよく受け取られるわけがなく、一同はむしろギョツとしたようで、ムードはしばらくドツチラケになった。

このようなとき、人はどのように落ち込むだろうか。

じつは、ナルシズムのメカニズムにおいて、このようなとき、人は「落ち込む」のではないのだ。

テレビドラマのように、じつさいの人の心理は挙動しない。

あなたは、とにかく誰に向けてでもいいから、

「っていうか、そんなの、何の準備もなしにやらされても、無理に決まっているでしょ!？」

と、怒りとため息を撒き散らすのだ。

「はいはい、ま、どーせ、わたしが悪いんですけど」

落ち込むということはじつさいにはない。

そのことはまた後の章で述べられるだろう。

差し当たりここで知られるのは、ナルシズムは、平常時にはあまり露出しないということ。

ナルシズムは、「ちょっとしたとき」に現れる。

小さなものであれ、魂の営為にさらされるとき。

魂を、それなりにでも呼び込めるかという、大人としての当然のていどが問われるとき。

そのようなときにナルシズムは露出する。

あなたにとって、ちょっとしたことでも「やっていこう」とすることは、額面通りに易しいことではない。

あなたの苦悩はすべて、魂を呼びこむという、大人のすることが出来

ないということに尽きるのだった。

大人ならそれなりに出来ることのはずなのに、じっさいには、自分はそこに幼児ぶりをさらけ出すというみじめなことしかできない。

そこには、多大な――猛烈というほどの！――痛苦と抵抗が伴う。

だからあなたにとって、ちよつとしたことを「やっていこう」というのは、じっさいにはとてつもない壁になるのだった。

道理が（ ）わかつていない

ナルシシズムは病気ではない。

ナルシシズムで病気になることはあるが、ナルシシズムじたいは病気ではない。

ナルシシズムは、ただの未発達だ。

誰でも幼児のころはナルシシズムの中を生きている。

われわれは、0歳で生まれ落ちて、乳児のころ、まだ自我というような自我を持っていない。

まだ、言語化されていないふたつの感情、「快・不快」と、「落ち着いている・興奮する」という感情しか持っていない。

それが、幼児になりはじけると、どこからともなく、自我というものが発生してくる。

乳児のころは、たとえば、おでこに冷水をかけられても、それについて「やめてよ」と言うことができないのだ。

何をされても、不平不満を持ってない。

不快さをいやがる、ということしかできない。

まだ、自我がなくて、自分や他人が存在するということもわかっていないから、何をされても、何もわからないのだ。

それが幼児になってくると、「やめてよ」と言えるようになってくる。自分と似たような子供が、ソフトクリームをおいしそうに食べているのに、自分はソフトクリームを食べていないというとき、

「ボクもあれ食べる」

と言い出してきかない、ということが起こる。

母親は、

「もうすぐ電車の時間だから、ソフトクリームはまた今度ね」

と言う。

幼児は、母親の言っていることが、なんとなくわかるが、よくわからない。

なんとなく、ダメと言われているのはわかるが、けっきょく、なぜダメなのか本当にはわからない。

むくむく……

幼児の中でナルシシズムの温度が上がってくる。

ナルシシズムは、「自分の気持ちで他者が動いてくれる」ということ、そこにキューンとくる快感に本質がある。

そのために、他者に侵略し、支配・コントロールをしようとする。

だから幼児は、

「食べるー!!」

と駄々をこねる。

母親は、

「また今度ね」

と言う。

このとき、幼児の体内には、猛烈な不満と怒りが起こる。

何に対する怒りか。

母親が自分の支配を拒絶したことへの怒りだ。

母親が自分の支配を受け入れるなら、快感だが、その逆は、不快だ。猛烈に不快だ。

それで怒りが湧く。

幼児は泣き叫ぶ。

幼児なりに、すべての「力」を持って、母親を侵略し、支配・コントロールしようとする。

これがナルシズムだ。

幼児のころは、誰でもが、少なくともこういう成分を持っているはずだ。

ていどの差はあるのかもしれないが、誰も幼児のころの記憶をまともには残していないので、わからない。

幼児は、ソフトクリームの要求について、「ダメ」と言われていることはわかっていて、

そしてなぜ「ダメ」なのか、その理由も、うっすらとはわかっていて、そういう理性的な判断が、幼児にもあるのだ。

さすがに、幼児だって、ソフトクリーム屋にナパーム弾が撃ち込まれ、激しい炎と黒煙に包まれていたら、「ソフトクリームは無理だな」と思うし、「それどころじゃないな」と思う。

幼児のナルシズムは、「まだ何もわかっていないコドモだから」ではないのだ。

まだ何もわかっていないという状態は、乳児のころのことであって、幼児のころのことではない。

ダメなのはわかっている。

が、むくむくと、ナルシズムが立ち上がってくるのだ。

他人が言うことをきいたらキューンと快感で、他人が言うことをきか

ないと不快だ。

自分の気持ちがある。

自分の気持ちだが、他者を支配するなら、キューンとうつくしい感動だけれど、もし他者が支配を拒絶するなら、そこに湧くのは怒りと憎悪だ。

その、快感と不快感、感動と憎悪、そのパラメーターが、道理をもみ消してしまう。

もうすぐ電車の時間だからいまソフトクリームを食べるのはダメという、道理が、幼児にまったくわからないということではなく、それをもみ消してしまうナルシズムがあるのだ。

この幼児が、加齢してゆき、やがて三十歳になる。

三十歳になった彼は、知人女性に、

「ね、今夜さあ、一緒に食事に行こうよ」と言う。

誘われた女性のほうは、

「うーん、それはちょっと。ごめんなさい」

「えっ、なんで。いいじゃん、いこうよ」

「ごめんなさい、またいつか」

「え、なんでなんで？　なんでダメなの」

「なんでって言われても……」

「ねっ、お願い！　いいじゃん、行こうよ。お願い」

「ちょっとそういうのは。すいません、ごめんなさい」

「えー、なんか、ノリ悪いね」

三十歳になった彼は、すでに道理を把握する能力を持っている。

食事に誘われたとき、誘いに乗るかどうかは、あくまで本人の気持ち次第だ。

その気があれば付き合うだろうし、その気がなければ付き合わない。それが当たり前すぎる道理だ。

彼自身、誰かに誘われたとき、その気になれば付き合うけれど、その気にならないなら付き合わないのだから。

こんな道理がわからない人はいない。

誘っても、向こうがその気にならなかったら、それはしょうがないでしょということ。

そりゃそうだよね。

しょうがない、しょうがない。

やれやれ、あつはつは。

が。

むくむく……

道理をもみ消すナルシズムが立ち上がってくる。

彼は、幼児のままなのだ。

心理的成長を得てきていない。

彼は、道理というものを、本当にはわかっていない。

彼は、

「おれの気持ちはどうなるのよ」

と不満に思っている。

自分の気持ちで他人が動けばキューンと感動だ。うつくしく、やさしい。

かがやく世界を信じていることができる。

彼は自分の気持ちで他者を侵略するのが「当たり前」になっている。

幼児のまま生きてきているから。

自分の気持ちで他者を侵略し、他者が支配とコントロールを受け入れたら、キューンと快感が起こる。彼はそれに感動する。

そこでもし、支配とコントロールを拒絶されたら。

たまらなく不快だ。

怒りと憎悪が湧く。

「えー、なんか、ノリ悪いね」

彼は、相手が自分の支配とコントロールを拒絶したことが、猛烈に不快なのだ。

そのことについて、怒りと憎悪が湧く。

彼は、その怒りと憎悪を、正直なところ正義の感情と思っている。

彼は、自分のことを幼児だとは思っていないし、ナルシストだなんてわざわざ思っていない。

彼は自分のことを、総じて「ふつう」と確信している。

「そりゃ、向こうが無理って言うてんだからしょうがないもんね。しょうがない、しょうがない。おれが^^我慢VVするよ」

三十歳の彼は、別の女性と交際することにした。その交際相手も三十歳だ。

ふたりはデイズニーランドにデートに行った。

彼女は、ひさしぶりのデイズニーランドを大いに楽しんだようだった。

帰路についてから彼女は、

「すごく楽しかった!」

と言う。

彼は、少々出費がかさんだけれど、これだけ楽しんでもくれたらならまあいいか、と思った。

彼女は重ねて言った。

「ね、すごく楽しかったから、来月も行こ?」

「え?」

「デイズニーって、やっぱり夢の国だと思う。わたしやっぱり、すっごい好き!」

「そうなの」

「ね、来月も連れていってくれるよね?」

「えーっと」

「ね？」

彼は答えあぐねる。

彼女は、^^快感と、彼女なりの美、彼女なりの感動に包まれて、

「来月もつていうか、わたしたち、月に一度はディズニーに行く、そういうふたりにしない？」

と言った。

彼は、さすが無然として、

「それはさすがに無理。キツすぎる、というか、引くわ」

と言った。

彼は、たまに行くディズニーランドは楽しいけれど、そこまで彼女のように楽しめるわけではないし、なんだかんだ出費がかさむ。

時間的にも金銭的にも、自分のやりたいことがまったくやれなくなってしまう。

彼の言ったことは、ごくふつうのことで、そういうことであれば、彼にまさか月一のディズニーランドを強いることはできない。

それは当たり前道理だ。
が。

むくむく……

彼女は、

「そうなんだ」

と言い、うつむいて、

「じゃあ、もういい」

彼は訝り、

「何、どうしたの」

「なんかもう、どうでもよくなっちゃった」

「どうしたんだよ」

「なんでもない」

「そんな、無理言うなって」

「もう、いいから。いいから放っておいて。どうせわたしのことなんかどうだっていいから」

彼女もまた幼児だ。

ガキくさい、ということではなく、発達心理学の指摘する事実として、心理的に成長していなければ、人は何歳になっても幼児のままだ。

彼女は、三十歳だから、一般の道理を当然わかっているが、^二本当にはわかっていない。

「ちよつとしたとき」にはそれが露出してくる。

本当にはわかっていない道理が、立ち上がってくるナルシズムにもみ消される。

彼女はまさか、自分のことを幼児とは思っていないし、自分のことをナルシストなんてわずかも思っていない。

彼女は、

「わたし、ディズニーランドに行きたいって言っただけ。ただそれだけの」

と思っている。

「ただ、そう言っただけなのに、彼にぜんぜん聞いてもらえなかったのが、悲しくて、わたし傷ついたの」

と彼女は言う。

月一でもディズニーランドに行きたい、というのが彼女の気持ちだった。

自分の気持ちで彼が動いてほしい、と彼女は思っているし、また彼女は三十歳になって、その思いが「当たり前」にもなっている。

「わたしがこんなに言っているのに。わたしの気持ちはどうなるの？ わたし、あなたが仕事でいそがしくて会えないときも、いつも我慢しているじゃない」

自分の気持ちで彼が動くなら、それに彼女はキューンとなる。

快感と感動があり、彼女はそれを、うつくしいもの、感動そのもの、と体感する。

彼女においては、その美と感動こそが「恋愛」なのだ、という解釈もあるかもしれない。

その快感のため、美と感動のため、彼を侵略し、支配とコントロールをする。

そのことに何の咎（とが）があるだろう。

そももし、その美と感動たる支配とコントロールを、まさか彼が拒絶するなんてことをするなら。

信じられない、信じたくない、という大ショックが起こる。

そして、猛烈な怒りと憎悪が湧く。

このとおり、ナルシシズムというのはただの幼児以降の未発達であつて、病気ではない。

病気ではないから治療の対象ではないのだ、ナルシシズムを「治す」ということは理論的にない。

「心理的に成長するしかないんです」と、心理学者の加藤諦三は言う。

おれも、そのとおり同じことを言うしかないように感じる。

心理的に成長するしか、たぶん本当に方法がない。

ナルシシズムの克服は「（ ）」なので、ナル

シシストはそちらの方向には進まない

自分のナルシシズムに気づいた人は、多く、そのナルシシズムを、「治したい」と考える。

ナルシシズムは、病気ではなくただの未発達だから、「治す」という対象ではないが、実際問題としては、「治す」「治したい」という語が当てはまってくるのはよくわかる。

原理的には、それは未発達の様相とはいえ、現実的には、どうにもそれは「病的」というほどの感触がするからだ。

病的なものなら、「治したい」という言い方が当てはまってくるのも自然なことだろう。

ところが前もって、このナルシシズムを「治したい」という話は、じつさいにはなかなか成立しないというか、成功しないということを、前もって言っておかねばならない。

ナルシシズムが克服されていく過程というのは、たしかにあるのだが、それは後に示すとして、それよりも先に、ナルシシズムが「治らない」という構造についてを、先に示しておく必要があるように思う。

自分のナルシシズムに気づいた人は、それを「治したい」と考える。

けれどもそれは、実際的には、そんなにすっきりした話ではないのだ。

ナルシシズムを「治したい」と考えるのは、ナルシシストにとって、自分がナルシシストだと気づいたことが「不快」だからにすぎない。

不快だから、それを治し、「快」になりたいと考える。

これが、病的なものというより、はつきりとした病気だったら、その

文脈で問題なく成り立っただろう。

誰だって病気になるれば不快だし、治癒したらそれは快に切り替わる。

自分が風邪をひいていたと気づけば、それを「早く治したいです」と望む、それは誰でも当たり前のすっきりした話だ。

けれどもナルシズムはそういうものではない。ナルシズムはそもそもが病気ではない。

ナルシストが、「ナルシズムをさっさと治したいです」と言うのは、何かを自己決定しての言いようではなく、単に「さっさと快になりたいです」と言っているにすぎない。

ところがじっさいには、ナルシストにとって、ナルシズムの克服というのは、それに向かうことじたいが不快なので、ナルシストによるナルシズムの克服は大頓挫するのだ。

シンプルな仕組みがある。

ナルシストにとっての快とは何か。

これはどこまでも変わらない。ナルシストにとっての快とは、「人が自分の言うことをきいてくれること」だ。

自分の気持ちを、他者に侵入させ、他者が自分の気持ちから、支配とコントロールを受けてくれるということ。

そのことにのみ、胸にキューンとくる、無上のよろこびと、美と、やさしさと真実がある。

「キューン」というのは、ナルシズムが充足されるときにチャージ音だ。

そしてありていに言って、ナルシストにとってその「キューン」は、それだけがすべてを許せる「快感」なのだ。

ナルシストはけっきょく、この「キューン」という快感に向かって全力で生きているだけにすぎない。

このことを、おれは勝手に、ナルシストの「快感原則」と呼んでい

る。

ナルシストは、この快感の得られる方向にしか進まない。

その他の方向へ進まされるときは、ナルシストにとって「我慢」にしかない。

ナルシストは、この「キューン」が得られないとなると、苛立つか、そうでなければ追い詰められる。

追い詰められた結果として、この場合、「治したいです」と言っているだけだ。

これは意地悪で言っているのではなく、本当に、この原則を見ておかないと脱出のしようがなくなるので言っているのだ。

追い詰められた結果、「治したいです」と言っているだけで、そのまま快感に反する方法を示されると、けっきょくナルシストは激怒するだけになってしまう。

ナルシストは、「キューン」で快感を得ているときだけ安定しているが、そうでないときは、我慢を重ね、追い詰められているか、もしくは激怒している。

その激怒というのも、感情が未分化という、幼児未達の未発達によって起こっているのだが、そのことにはまだ触れないでおこう（話がややこしくなってしまうので）。

なぜナルシストは、ナルシズムから脱出できないのか。

ナルシストにとって快とは、「人が自分の言うことをきいてくれること」だ。

ナルシストにとって不快とは、「人が自分の言うことをきいてくれないこと」だ。

ナルシズムとは、「人を侵略し、支配・コントロールすることの快感」だ。

ナルシズムの克服とは、その侵略やら支配・コントロールやらの、

発想と快感じたいを持たなくなるといふことだ。

それはナルシシストにとって耐えられないことなのだ。

人がオレの言うことをきいてくれないなんて。

人がわたしの言うことをきいてくれないなんて。

「けっきょく我慢しろっていうことですか？」

となる。

ぜったい許せない。

それがいちばん許せない。

そんなことを許すぐらいなら、自分はナルシシストでいたほうがマシだ。

「そこまで我慢して、ナルシズムとやらを克服したいとは思いません」

「あはは、自分で気づきました。むしろわたしは、今までそうやって我慢させられてきた、被害者だったんですね」

そうしてナルシシストは、ふたたび「キューン」を追い求める道へ帰っていく。

それはやはりナルシシストにとって、燦然と輝く強い正義の道だ。

快への期待に、満ちている。

ナルシシストは誤解している。

ナルシシストは、誤解の上で、「ナルシズムを治したいです」と言っている。

ナルシシストは、

「ナルシズムを治せば、またあのキューンが、今まで以上に得られますよね？」

と思っているのだ。

ビッグな快感を期待している。

それで、治したいです、と言っている。

ビッグな快感を期待し、それが得られるならばと差し引きして、自分

のナルシズムを認めてもよい、と考えている。

快感原則だ。

そこでもし、「そんなビッグな快感は得られない」と言い、それ以上に、「その快感じたいがナルシズムだから」と否定されるならば。

ナルシシストは、それを治すどころか、激怒するに決まっている。

意地悪で言っているのではない。

ナルシシストは本当に、前もってこの「キューン（快感）充足⇓我慢激怒」の往復内に閉塞しているので、このことを先に示しておくしかないのだ。

ナルシシストは、露骨なため息を示して、

「けっきょくのところ、我慢しろ、と。そういうことですよね。我慢するしかないってことですよね。ハー、あんまり生きる意味ってないんですね。バカバカしくなっちゃった」

ここに当てはまるのはやはり、「治っていない」ではない。

「成長していない」だ。

ナルシシストは「キューン」という快感原則によってのみ挙動している。

快感原則に反するものは、「我慢」として受け入れるよりないが、その「我慢」はいずれ相応するキューンで報いてもらうという前提だ。そうでなければ未分化の激怒を発するよりない。

ナルシシズムが、「治る」わけがない。

残されるのはいつも、何十年経っても「成長していない」という振り返りだけだ。

ナルシシズムは、成長によって「過ぎ去っていく」だけのものだ。

ただ、その「成長」を、頑強に拒む愚かさや傲慢さが、人には少なからずある。

快感と成長、どちらかを選ぶという、けっきょくは人それぞれの選択

でしかないのだろう。

おれはかつて、若かったころ、いいかげん幼児じみた快感への期待と偏執に疑義を持ち、成長のほうを選んだ。

そしてそのときから——きつとナルシシストにとっては理解不能の極みだろうが——人がおれの言うことをきかないことが、おれにとってはよろこびになった。

とはいえここでは、ナルシシストの「快感原則」という通告と、どうやらそうでないものもあるらしい、という予告を示すにとどめておく。

ナルシシストにとって、ナルシズムの克服は「不快」なので、ナルシストはそちらの方向には進まない。ナルシシストは常にナルシズムの快感を期待しての進行方向のみを採るのだ。

（ ）の発見

ではどのようにナルシズムは克服されるのだろうか？ これにはじつは、前もって決まっている手続きがあり、そこにドラマチックな盛り上がりはない。あとは本人がその道理の通りに進むかどうかという、自己決定にのみすべてが掛かっている。

それは心理的なことのはずが、学門としては恬淡としたもので、特に演出も付加せず、ここでただ番号つきで示してゆこうと思う。

①「が」の発見

ナルシシストは常に、特徴的な「が」を発生させる。

どのように道理を把握していても、けっきょくはむくむくと「が」が発生してくるので、いかなる道理の把握も無意味なのだ。

たとえばわたしが、有名企業の就職面接を受けたとする。わたしは、残念ながら落選し、ほかの誰かが内定を勝ち取ったとしよう。

それはわたしが力及ばずだったからしょうがない。

わたしより優秀な者がいて、わたしより有効なアピールを出来た者がいたのだからしょうがないことだ。

そう、それはしょうがないことではないか。

誰だって、就職するなら、自分の入りたい企業に入りたいだろうが、誰も彼もがそうやって夢を叶えられるわけではない。

人生はままならないものだ。

落選したのは無念なことだが、そのことに不服はない。

わたし以外にも落選した人たちはたくさんいるのだろう。

無念を糧として、前を見て進んでいくしかない。

誰だってそうだろう？

が……

が。

が。

が、なんとか今からでも、逆転して入社する方法はないですかね？

本当に、○○社に入りたいんですよ。

何か方法ないですか。

なんでもしますんで、誰か、なんとかしてくれる人を紹介してください。

ナルシシストは常にそうしたことを考える。

正確には、どうしても、そうした思念が湧いてきて、それに支配される。

「面接のとき、どうもうまくアピールできなかったと思うんだよね。本

当のおれが見せられたら、結果はきつと違っていたと思う」

「そうは言っても、その本当の自分というのを見せるのが面接という機会、そこでしくじったんならしょうがないだろ」

「それは、たしかにそう。まったくそのとおり。そのための面接だものね」

「そうだよ。誰だって、そこでコケなきやイケると思っているけど、なかなかそうはいかないもので、みんな苦労するんじゃないか」

「そうだな、おれもまったくそうだった」

「まあだから、力及ばずで、残念だったが、しょうがないね」

「そうだな、しょうがない。ああ、まったくしょうがないわ。力及ばず、かあ」

力及ばずだった。

が……

が。

が。

「が、それはそうなんだけど、なんか納得いかないんだよ。だってさあ、これじゃけつきよく、本当のおれは、向こうに見てもらってないわけじゃん？ これじゃ面接の意味ないじゃんって話なんだよ」

他の例。

わたしが社会人になり、同期のほうが先に出世したとする。

わたしから見て、同期の彼は、ただならず努力していたし、実績も出していた。

新人のころは、わたし以上に泣かず飛ばずの凡人だったが、彼はわかりやすく根性を見せ、何事にも挑戦し、デキる男になっていった。

そのことを何年もつづけてきて、今回の昇進は、むしろ衆目にも「当然」と認められる抜擢だった。

同期のおれとしては、先を越されたことになるが、おれは彼に比べて

たいした努力もしていないし、挑戦もせず、実績も出していない。

何よりそもそも、デキる男になるための根性を見せたということがない。

この場合、出世にかかわって、おれと彼とを比較する由さえない。

おれもあらためて、彼のことを見習ったほうがいいかもしれない。

彼が祝福されるのは当然として、おれはしばらく平社員をつづけよう。

おれがダメなんじゃなくて、彼がすごいんだ。

これら一連のことに、何もおかしいことはない。

おれはよくよく納得している。

おれが役員だったとしても、とうぜん彼を選んで昇進させる。

それはそうだ。

が……

が。

が。

「が、なんか違う感じはするよな？ いや彼の努力も実績もわかるし、おれとの現時点での実力差もわかるよ。でも逆に、おれが昇進したほうが可能性としてはよかったんじゃないって思う。なんでかわかんないけど、直観的にさ。うん。……あ、わかった！ おれたぶん、今回の人事には最後まで納得しないわ。今回の人事は、なんとというか、わかりやすい失敗なんだよ」

ナルシストは常にこの「が」を発生させる。

駅前でさんざん納得しても、交差点を曲がったらもう「が」が湧いてくる。

なぜこのような「が」が発生するか。

その仕組みはシンプルだ。

ナルシストは自分を特別なものと思っているからだ。

面接で落ちたら、その会社には入れない。他のふさわしい誰かが入社

する。「が」、自分は特別なものだ。ボクは面接で落ちてもその会社に入
れるのではないか？ そういう思念が自然に湧いてくる。

そうして湧いてきたそれは、彼にとつてじつにすっきりと快、うつく
しく真実で、ゆいいつ力強くやさしく、正しいものに思えるのだ。

努力としても実績としても、また具わった実力としても、同期の彼が
出世するのは当然のことだった。自分はそこまでやっていないし、実力
的にそこまで至っていないので昇進には当たらない。それも当然のこ
とだ。

「が」、そういうのは一般論にすぎず、ほかの誰かに「特別な何か」があ
る場合は話が変わるだろう。

だから今回の人事はどうしてもしっくりこないんだよ。

もっとあるべき判断があったと思うんだよね。

そういう思念が自然に湧いてきて、湧いてきたそれはじつに正しいも
のに思える。

「が」の発見。

あなたも自分のナルシズムを疑う場合、あなたはいっそ、「自分はす
べてについて何ひとつ納得はしない！」と前もって考えるほうがよい。

なぜ納得しないのか。なぜなら、あなたにとってあなたは「特別」だか
らだ。

ハハナルシシストは、自分から見た自分が「特別」で、他人から見た自分
はそうではないということがわからないのだ。V。

あなたは、自分が学級で二番目の美人だったとしても、そのことに納
得はしない。

いちばんの彼女のほうが美人だというのは見たらわかる。

いちばんの彼女はあまりにも飛びぬけているのだ。

他の学校にも知られていて有名なぐらいで、芸能界からスカウトが来
るようなタイプだ。はつきり言ってモノが違う。

さすがにアレには負けるよ、そこまでわたし思いあがっていないって。

「が」……

ナルシズムの「が文脈」が湧いてくる。

いちばんの彼女はたしかにすごい美人だ。

が、

「彼女はただの、いわゆる美人ってだけでしょ。わたしの場合はそうい
うのじゃなくて、美人というより、プラス別の、何かの感じの人じゃん？」
「だから、彼女は正直そこまでアレではないというか。本当には、わた
しがいちばんだと思う。悪いけど。ね、じつさいそう思わん？」

そういう思念が湧いてきて、その湧いてきた思念はあなたにとってじ
つに正しい。すっきりして快で真実だ。

お金持ちは高級なホテルに泊まるが、あなたはせいぜい中級止まりだ。
あなたはそんなたいそうな身分じゃないということを自分で理解してい
る。

そんなにお金を持っていないのだから宿泊する部屋はほとほとのもの
だ。当たり前のことだろう。

経済的に大きなはたらきをした、財界人とかが、一泊三十万円すると
かの、ああいう離れの部屋とかに泊まるんだろうね。

そういうもんじゃない？ それはそれで、すごいことだし、わたしは
わたしの身分で、満足しているよ。

「が」……

あなたは納得なんかしていない。

信号待ちをしていたときは納得していたが、青信号になったころには
もう「が」に切り替わっている。

あなたにとってお金持ちは特別な存在ではないが、自分は特別な存在
だ。

あなたは、どこまでも自分が高級ホテルに泊まるものじゃないかとい

う思念を湧かせ、金持ちの宿泊に内心で首をかしげる。

「お金持っているからって、あの人たちは高級な部屋に宿泊しているんですよ。それって、いわゆるただのお金持ちでしかないじゃん。うーん、それってどうかと思う。そういう金持ちって、もうけっこうな年齢なんだから、そういう人たちが高級な部屋とかに泊まっても意味なくない？」

仮にあなたが、仕事上で大きなミスをして、多くの人を困らせ、少ない実害を出したとする。

そのときあなたは平謝りだ、

「まことに申し訳ございません」

なんでこんなミスをしてしまったのだろうと、あなたは痛切に反省する。たしかにあのときの自分はボートとしていた。不注意に加えて怠慢があった、という指摘はまったくそのとおりで、肅々と肯い、頭を下げるしかなかった。

どう考えてもわたしが悪い。

いろんな人に迷惑をかけてしまい、なんとも、いたたまれない。申し訳ない。

ものすごい、わたしのミスだ。

「が」……

が、

が、

「うーん、なんかそこまで、わたしが悪いわけじゃないと思うのに、なんでこんなに言われなきゃなんないの？ マジむかついてきた。わたしそのとき、どうしても気になることがあって、注意散漫になっていただけなんだって。そういうことって誰にでもあるじゃん。それをさあ、ホントにここまで言われなきゃいけない？」

そういう思念が湧いてきて、湧いてきたその思念はあなたにとってじつに正しい。

ミスをすれば、そのミスは当事者の責任となるが、それはあくまで一般論であって、「特別」なあなたにまで当てはめられることは、あなたにとって許しがたい不服になる。

初めは頭を下げていても、内心でしだいに、あなたの側が不服と唱えるべき真の正義を覚えてくる。

あなたは「特別な何か」の人だから。

ほかの誰かがまったく同一のミスをしたときには、その人は特別な何かの人ではまったくないので、すべてはその人の単純な責任になる。

「弁解とかありえないんで。このミスじたいがぜったい許せない。だってこれ不注意というよりアイツの怠慢の結果でしょ。マジ最悪」

他人の場合はそのとおりだが、自分の場合は「ちょっと待って」になるのだ。

他人の場合は特別ではないが、自分の場合は特別なので「ちょっと待って」になる。

もっと単純な例で言えば、たとえばわたしは、文章力ということでは、あなたよりきつと上位にあると思う。そりゃあこれだけ大量に書き話して、命を投げ込んだのだから、経験量にせよ費やしてきたものの質量にせよ、差分があって当たり前のことだ。

「が」……

あなたはけっきょく、自分がこいつより文章力において劣るというようなことに納得はしない。理由はなんでもいい、どうせこじつけの理由だ。なんであれ、あなたにとって自分は「特別」だが、ほかの誰かは特別ではないのだから、特別な者がそうでない者に劣る理由はない、引ける理由もない、という思念になっていく。

ナルシシストは永遠に、この「が」を湧き立たせる。

がんばっている人を邪魔するようなことは、してはいけない。ぜったいにしてはいけない。「が」、自分はこの場合しようがないというか、自

分はある意味特別だから。今回だけは。他の誰かがそんなことしたらぜったい許さないと思いますけど（笑）。この場合たぶんわたしだけはいいいんですよ、だってしょうがないですもん。そういう思念が湧いてくる。

不十分なものとは相応の低評価を受けるべきだ。「が」、自分の場合は、特別なので、不十分とはいえ高い評価を受けてよいものだと思える。そうでないとおかしいとも思えてくる。

みんなで暑い中を一時間歩いてきたら、みんなして「たいへんだった〜！」となる。そりゃそうだ、暑さは平等だ。「が」、「その中でも特にわたしはたいへんだったんだよね」となる。

自分だけが「特別」な存在に思えており、他人から見た自分がそうではないということがわからない。それが幼児性およびナルシズムの最も安直な表れだ。そのことのじっさいは、果てしなく湧いてくる「が」で現れてくる。

だからナルシストは、どのように帰り道に道理を納得したつもりでも、タクシীর後部座席に乗った瞬間にはもう「が」が湧いてきて文脈が書き換えられる。

すべての道理への納得はダミーに過ぎず、けっきょくは「おれの場合は特別だから違うじゃん」という文脈に書き換えられるのだ。

②「我慢」の発見

「が」「が」と言っていてキリがない。そして無意味なことだ。わたしはどのように思念を湧かせようと、就職試験に落選したらその会社には入れないのだし、人事が同期の昇進を決めたのなら昇進するのは同期であってわたしではない。

だからわたしはどうするかというと、

「しょうがない、我慢するよ」

ということになる。

我慢するよ、と、サツと言える。

なかなか、潔（いさぎよ）いだろう。

それが、出来たオトナというものじゃないか。

……ん？

「いやだから、今回はあいつの勝ち、おれの負けだよ。そう認めて、おれは我慢するって。なんでも言わせるなよ」

わたしは何を言っているのだろう。

わたしはいつたい、何を「我慢する」というのだろう。

あなたは自分が学級で二番目の美人ということで「我慢」する。

あなたは金持ちと違って中級ホテルに宿泊する。

「しょうがないよね、わたし我慢する」

あなたはいつたい何を「我慢する」のだろう。

あなたは仕事でミスをし、多くの人に迷惑をかけて、平謝りした。

不注意に加えて怠慢があった、と厳しく指摘された。その指摘は当たっており、まさにそのとおりだったと自分でも思う。

「そりゃ、厳しく言われるよね。しょうがない、受け入れて、わたしはひとまず我慢のときだ」

あなたは何を「我慢する」のだろう。

あなたはおれよりも文章力について劣るだろう。あなたはそれについて肯定し、

「そうですね。文章力についてはさすがに負けます。そこは我慢します」と言う。

不十分なものを出したあなたは、相応の低評価を受けた。あなたはそれについて、

「まあ、不十分だったし、妥当な評価だと思う。今回はこれで我慢するしかない」

がんばっている人を邪魔したとき、あなたは、

「ごめんなさい、次からはぜったい我慢するので、今回だけは」と言う。

他の誰かがやったら、ぜったいに許せないこととを感じるが、自分のことになると「特別」になり、「が」が湧いてくる。

先ほど①で示したように、人はナルシズムにおいて、じつは何ひとつ納得などしていないのだ。どんな道理があつたとして、またその道理を把握していたとして、本人がそれで納得するというわけではまったくない。

本人としては納得したつもりでも、うつむいて一呼吸すると、たちまち体内からナルシズムの「が」が湧いてくる。

そして、そんな不毛な「が」を湧き立たせたところで、そのナルシズムがすべてを圧して押し通るわけではない。押し通らなかつた場合はどうするか。どうするもこうするも、どうしようもないので「我慢」する。

わたしが女性をデートに誘つたものの、フラれてしまい、彼女は別の誰かとデートに行つてしまったというとき、わたしはそのことを「我慢する」と言うのだ。

道路が渋滞しているとき、自分もその渋滞を作り出している当事者のひとりであることは確かだが、ナルシストはその渋滞において自分だけを被害者と感じ、周囲の自動車を加害者と感じる。

「くそっ、車が多すぎ！ 移動する奴が多すぎなんだよ」

かといって、どうすることもできないので、ナルシストは「我慢」をする。

「しゃーない、あーダリい、またこうやって、オレは『我慢』させられるのか」

ナルシストは、こうして本人だけ、この宇宙で無尽蔵に「我慢」を貯蓄していくのだ。

「水曜日は無理だから木曜日でもいい？」

「そうなの？ わかった」

納得して了承したように見えるが、本人は内心で、「水曜日がよかつたけど、まあ我慢しよう」と思っている。

少なくとも我慢ポイントを溜めていつている。

そして定期的に「我慢の限界」が来る。

我慢の限界は、事象として爆発的な様相でやってくる。

本人は、ここまで我慢の蓄積が、他のすべての人に理解・共有されていると思っているのだ。

「オレがこんなに我慢してやっているの、お前らにはわからねえのかよ！」

とつぜんの爆発。

周囲の人たちは、

（え、え、これ何？）

（彼は何のこと言っているの？）

と怪訝な目配せを交わしあっている。

彼は自分のとつぜんの爆発が、話として当然通じていると感じている。

ナルシストは、自分が「特別」な存在で、その特別性ゆえに何ひとつ道理に納得してはおらず、そうは言っても力及ばないことについては、すべて「我慢」しているのだ。

その「我慢」をしてきたぶん、自分はどうぜん、自分の気持ちで他者を支配・コントロールする権利があると思っており、そこでキューンという快感を得られることを代償のアテにしているが、そのことが否定されると、もう我慢の限度を超えて激怒を起こす。

この激怒は感情的に未分化で、不快・寂しさ・悲しさ・怒り・不安・恐怖がごちゃ混ぜになっている（※感情の未分化については本稿ではまだここまでに説明していません）。

③「他者」の発見

ナルシシズムの克服はこの一点に掛かっている。

ナルシシストは誤解している。正確には、やはり未発達のまま、情報を正しく認識できていないということになるし、あるいは正しい情報を受容できていないことになる。

他者というのは本来、「自分の言うことをきかない存在」のことを指すのだ。

あなたの右腕は、あなたの意図したとおりに動く。障害でもないかぎりは。あなたの左腕だってあなたの思ったように動く。あなたは思ったとおりに歩くことができるし、考えたとおりにグー・チョキ・パーを出すことができる。

つまりあなたの身体はあなたの言うことをきく。

だからあなたの身体はあなたにとって他者ではない。

ナルシシストは他者に「言うことをきかせたい」。

これはナルシシストの誤解だ。

他者とは定義として「自分の言うことをきかない存在」なのだから。

言うことをきかせたい、ということは、それじたいが「他者」の否定だ。

だからナルシシストは、他者の誰ひとりをも愛してはいないということになる。

当たり前だ。

この当たり前のことに、ナルシシストは冗談ではなく混乱する。

本当に六歳児のままだからだ。

じっさいの六歳児のほうが混乱しないかもしれない。

他者とは何だろうか。

あなたが頭の中で、三桁の数字を思い浮かべたとして、わたしはその

数字を読み取ることができない。

テレパシーやESPは、存在しないか、仮に存在したとしてもほとんど偶然に生じるものでしかなく、そんな恣意的なことには使えないのだ。一組のカードデッキから、あなたが自由に一枚のカードを選んだとき、わたしにはあなたの選んだカードがわからない。

当たり前だ。

「手品師なのにわからないのですか」

それは話が逆だ。

他人の選んだカードがわかるのだったら、手品師という存在が成り立たない。

人は人の内部に侵入できないのだ。

内部に侵入することはできず、内部から支配するということもできない。

内部に侵入したという錯覚を起こすことを、自我インフレーションと言う。

サルトルが「地獄とは他人のことだ」と叫んだのがそれだ。

われわれは、暴力や精神的加圧、恫喝、神経症的依存や、宗教じみた脅し等によって、外力的に他者を支配しうるだけでしかない。

それだってけっきょく、

「何もかも要りません」

と言われたら、支配はできない。

娘が内心で中指を突き立てていたとして、母親がそれを読み取るということはできない。

超能力やオカルトを前提にするというような馬鹿げた条件でしか、「こころはつながっているんだよ」というようなことは言えない。

こころがつながると言い張る人は、即刻、戦争ビジネスを続けているいくつかの国の首脳にこころをつなげて、その愚劣な行為をやめさせて

くれ。

ところがつながるならすばらしいことだ、明日の朝刊を楽しみにしているぞ。

こころはつながらないし、人に言うことをきかせることはできないのだ。

言うことをきかせられない存在が「他者」だ。

支配・コントロールできないのが「他者」なのだ。

ナルシストはそのことがわかっていない。

繰り返し、ナルシストは、本当にそのことがわかっていない。

わかっているつもりでいるだけだ。

定義レベルでわかっていない。

おれがあなたに、

「缶コーヒー買ってきてくれ」

と頼んだとする。

「はい」

あなたは請け負った。

かに見えた。

けれどもあなたはなぜか、おれにラグビーボールを買って来たとする。

まったく予期していなかったおれは、それなりに戸惑うだろう。

けれども、おれはそのことであなたに、

「はあ？」

と言って怒るということではない。

あなたが何をどうするかは、あなたが決めることだからだ。

缶コーヒーを買って来いと言われたからといって、何をどうするかは

あなたの決めることだ。

あなたが、判断力を失ったり了解不能になったりして、ラグビーボールを買って来たのだとすると、おれは別の心配をするが、そうではなく、

あなたの主体的な行動としてそれを買って来たのだとすると、おれはそのことについて怒ったり、文句を言ったりはしない。

怒る筋合いではないし、文句を言う筋合いでもないからだ。

缶コーヒーについて、おれはあなたをアテにしたのだが、だからといって、あなたがそれに付き合わなくてはならないという道理はない。

アテにするといって、この場合、あなたが缶コーヒーを買って来なかったからといって、おれが何か困窮するわけではない。戸惑うだけだ。

人がわざわざ困るようなことをするのは、悪意であって、公共の福祉にも反するので、別の問題があるが、そうでないかぎり、あなたが何をどうするかはあなたが決める。

おれが、おれの書いたものをあなたに読ませ、

「どうだ、面白かったか」

と訊いたとする。

それについてあなたが、

「つまんなかった」

と言いたいとき、あなたはそのことに怯えなくていい。

あなたにとってそれが面白かったか・つまらなかったかは、あなたが

体験することだ。

おれがあなたの体験を支配・コントロールすることはない。

おれの書いたものが面白くないわけではないけどね！ あくまで仮の話としてだ。

あなたが、おれの書き物を「つまらなかった」と言うなら、おれは「あらら」と言うだけだ。

あなたが「もっとこう書けばいいと思う」と言ったとして、おれはあなたの言うことをきかないだろう。

あなたの言っていることの内容はヒアリングするが、あなたの言うこととはわずかもきかない。

おれはあなたの言うことをきかないのだから、あなたもおれの言うことをきかなくていい。

あなたは誰の言うこともきかなくていいのだ。

同様に、誰にも、あなたの言うことをきかせようとするな。

従業員としては、業務命令に従う義務が一定ていであるし、学校に行っていれば、生徒はあるていど校則に従わねばならないが、そうしたことでないかぎり、あなたは誰の言うこともきかなくていいし、同様に誰も、あなたの言うことなんかきかなくていいのだ。

「他者」の発見だ。

他者は、どこにでも存在するように思えるし、誰でも他者というものを認識しているように思える。

けれども、本当はそうではない。

他者というのは、当人が「発見」するまでは、本当には捉えられていないし、本当には存在していないのだ。

ナルシストには「他者」が存在していない。

他者が存在していないので、目の前の人に、赤の他人に、侵略をして支配・コントロールをする、そのことがとうぜんに思えるという発想になるのだ。

おれが志望企業の面接に落ちたのはなぜだろう？

^^そのことは知る由もない^^。

なぜなら、おれを落選させたのは、おれではなく面接官だからだ。

おれを内定させるか落選させるかは、おれの決めることじゃない。さまざまな理由も含め、他者の決めることだ。

だからおれからは知る由もない。

同期の出世・昇進も、上司や人事の決めることだ。おれの決めることじゃない。

だから、同期が昇進するべきなのか、おれが昇進するべきなのか、そ

れについて考えるということじたい、おれが当事者ではありえない。

そこでおれがいったい何を「我慢する」というのだろう。

一組のカードデッキから、あなたがハートの8を選んだとして、おれがそのことを「我慢する」というのか。

他者が選び、他者が決めることを、なぜおれが「我慢する」のか。

「我慢」という文脈は発生しない。

あなたがあなたの飼うハムスターの名前を決めるとき、その名前がどのようなであれ、それについておれが「我慢する」というのは意味不明だ。

おれはいつさいの我慢をしない。

おれが女性をデートに誘って、フラれたとして、そのこともおれが決めることじゃない、誘われた彼女の側が決めることだ。

彼女がその誘いを受けてくれるにせよ、断るにせよ、おれが「我慢する」という文脈はない。

そのことは、「他者」を発見していない人にはどうしてもわからない。

おれがあなたに、缶コーヒーを頼んだところ、あなたはラクビーボールを買って来たとする。

多くの人はここでどう感じるか。

口には出さないにせよ、

（うわ、何こいつ。ヘンな奴。はぁー、しょうがない、面倒くさいけど我慢しよ）

と思う。

なぜ「我慢しよう」という文脈になるのか。

それは、どだい、人が自分の言うことをきくと思っているからだ。

言われたとおり、コーヒーを買って来てくれて、

「おっ、ありがと！」

と礼を言う、そういう予定調和のステレオタイプ・イメージが、人との付き合いだと思っているからだ。

おれはあなたがラグビーボールを買って来たとしても、それについて「我慢」は一切しない。

なぜかといって、何度も言うように、何を買って来るかはおれの決めることではないからだ。

おれが何を頼むかは、おれの決めることだが、何を買って来るかは、あなたの決めることだ。

あなたがナルシストだった場合、あなたはこれまで生きてきて、じつはひとつの世界のありようを、まったく知らないままにいるのだ。

ある人が汗をかいて、おれに、
「タオル貸してくださいますか」
と頼んだとする。

おれはそれについて、
「おう」

と言ひ、竹とんぼを差し出す。

「ほれ、これをどうぞ」
するとどうなるか。

「は？」
とはならない。

「あ、竹とんぼだ！」
となる。

あざやかな声と、あざやかな瞳だ。
あなたの知らない世界だろう。

彼女は汗を掻いたまま、竹とんぼを揉んでシューツと飛ばすことになる。

彼女はタオルを頼んだが、何を持ってくるかはおれの決めることだ。
おれの決めること、つまりおれの主体性だ。

彼女はナルシストではなく、おれの主体性——他者の主体性——を

受け取るのが当たり前になっているので、タオルではなく竹とんぼを渡されたときに、「は？」とはならなかった。

ほとんどの人は、

「……は？　なんで竹とんぼなんですか」
となるだろう。

どだい、人が自分の言うことをきくものだと思うている。

他者が存在しておらず、他者が発見されていない。

ほとんどの人がそれなので、ほとんどの人がじつさいには、六歳児かそれ未満の、ナルシストということになる。

残念ながらそれが事実だ。

常識的に考えてうんぬんと、理屈を言うが、いかげんそういう無駄な問答も不毛だ。

他者を発見しておらず、他者の主体性を受け取るということを根本的に知らない、ナルシストというのがわれわれのほとんどだ。

ナルシズムの克服は、この一点に掛かっている。

「他者」の発見。

それはつまり、「他者が決めること」。

侵略して支配・コントロールを目論むなら、それはもう定義として「他者」の否定だ。

そのことが真に発見されたとき、先ほどからの、「我慢する」というわけのわからない文脈は消える。

他者が決めることにおいて、こちらへの悪意・加害の意図がないかぎり、おれの側には何もすることがない。

（悪意と加害の意図がある他者に対しては、とうぜんの危機管理が発生するが、それはまた別のジャンルの話だ）

おれは何もしない。

当たり前だ。

何を我慢するのか、我慢というのは意味不明だ。

おれは何もせず、おれはずっと、気魄を受け皿にして魂を呼びこむだけ。

気魄の正しい使い方は、地べたを歩き渡り、「何もしない」のだった。

④「冷淡問題」の発見

ナルシシストは六歳児なので浅はかだ。どれだけ加齢しようが、心理的に成長していない人は、「ややこしく」なるだけであって、奥行きを得るものではない。

ナルシシストは浅はかなので（これはただの悪口だ）、いまさらになつてこの「冷淡問題」に出くわす。

つまり、「他人は他人じゃないか」ということ。

他人の決めることは、他人の決めることであって、

「こちらから口出しはできないし、興味持ってもしょうがないですからねえ」

と、ことさらに冷淡になるということ。

少年マンガにさえ出て来ないような浅はかさだが、ナルシシストは一旦この安物の文脈を思いついてしまうものだ。

この浅はかさから脱出しないと、人はニーチェなんかをありがたがって読むというような、知性の低いものになってしまう。

先の③で示したように、他者とは、自分の言うことをきかない存在だ。

自分の言うことをきいてくれるという期待は、そもそも定義として「他者」に反している。

仮にわたしが、若く美しい女性を見つけたとして、土下座して彼女との逢瀬を乞うたでしょう。

そのときわたしは、そのようなみじめだったらしい振る舞いで、彼女のところが動かされるようなことが、どうぞ「無きように」と願っている。

わたしは他者のところに侵略するようなことはしたくないからだ。

他者のところに、人格に、自我に、入り込んで支配・コントロールするというようなことをしたくない。

そんなことはわたしにとってわずかも快感でないし、わずかもよろこびでないのだ。

わたしがそうして性愛に向けての土下座をするということがあったとしたら、それは本当に単純に、おれが土下座をしたくて土下座をしているだけだ。

人のところに入り込んで言うことをきいてもらおうとはおれは一ミリも思わない。

仮にあなたが、やけ酒でも飲んで身体を壊しそうにしていたら、それはちよつとところに割り込んででも、あなたをコントロールしようとしてしまうことがあるかもしれないが、そうしたことはやはりおれにとってはよろこびではないし快感でもない。

おれはおれのやりたいことをやるだけだ。

あなたもあなたのやりたいことをやればいい。

おれは、自分がそうしたいと思えば、自分限りの営為として土下座もするし、土下座して「ほれ」と竹とんぼを手渡す、というぐらいのむちゃくちゃは平気でする。

おれは何をしているのか。

おれは何もしていない。

土下座したって、別に相手に何かをしているわけではないし、竹とんぼを手渡したって、別に相手に何もしていない。

気魄という事象の根源レベルで、おれは相手に何もしていない。

そして、こんなわたしのむちゃくちゃな挙動を、少年マンガにさええない「冷淡さ」で上書きすることには無理がある。

他人は他人だからね、と、冷淡になっているのは、ただのその人のひ

ねくれ根性でしかない。

ビビっているだけ、ブルっているだけ、ただのシャバ僧だ。

おれは、他者は他者であるという定義をわずかも見失わないまま、それでいてまったく冷淡にはならない。

冷淡になる人や、もつと言えはそうして安直に冷淡さを思いつく人は、もともとが「他人ではない他人」を期待しつづけているということ、けつきよくは「自分の言うことをきいてくれる他人」に対する願望が幅を利かせているということだ。じゃあやつぱりナルシストじゃないか。他者が他者であるということは、発見したかもしれないが、それが気に入らない、さびしい、ということなのだろう。

それがさびしくて、冷淡さが浮きたってくるというのは、ただの当人の感情の問題であって、何も真実が浮き彫りになったわけではない。

それが真実の浮き彫りに視えるようでは、残念ながら知性がニーチェのように低くて残念なことになっているので、やはり超克していけるほうがいい。

他人は他人じゃないか、ということと冷淡になるのは、真実ではなく、単にあなたが「ザコ」というだけだ。

ここであなたがザコでなくなろうとすると、あなたは以前の古巣、ナルシズムに戻ってしまうだろう。

いやいや、なぜ元のナルシズムに戻ろうとするのか。

そうではない、おれは単純に、

「冷淡とか、少年マンガでも失笑されそうなザコいこと言っておらず、さっさとお前の力を見せろよ」

と言っているのだ。

このように、他者を他者と正しく発見した上で、ザコではない自分を示そうとすると、そのことはきゆうに本当にむつかしくなる。

これまでに視えていなかった、えげつないシビアさがそこにはあるこ

とが発見されるのだ。

本当の力が問われることになる。

本当の力とは何か。

ようやくここまで来て、「魂が呼び込めるか」という、本当のことが問われるということだ。

人の苦悩なんて、つまりはこの一点、「魂が呼び込めない」ということに尽きている。

「ザコじゃないならそれなりに出来るでしょ」

そう言われると本当に追い詰められるしかない。

だから人はここまで来てけつきよく裸足のまま逃げってしまうことが多いのだった。

冷淡問題は、フェイクで、そのフェイクは、真相のシビアさに比べて自分のザコさがヤバイ、ということ覆い隠すために発生しているだけにすぎない。

冷淡問題の発見はフェイクで、それを引つpegせば、「本当に出来なくてはならないこと」が発見されてくるし、「それが本当に出来ている人」も発見されてくる。

いちおう本当に、世界が視えるようにはなってくるわけだ。

その中で、おれが本当には何をやっているか・何を出来ているのかも、視えるようになるかもしれない、またそのぶん同時に、やはり人は裸足のまま走って逃げ出してしまうかもしれないのだった。

なぜ走って逃げだすのか。

まあいいではないか。本稿の冒頭で述べたように、稽古のバックアツプもなしに解き明かすと危険なことというのは、意外と本当にあるものだ。

⑤「愛」の発見

冷淡、というような、中学二年生でも控えそうな安直さを、われわれはつい思いついてうっかり気取ってしまうところがあるのだが、そんなことを言えばそもそも、あなたがいま手元で目撃しているこの文章が、実作のものとしてまったく冷淡でないということにつじつまが合わない。

他者は他者であり、人の言うことをきかないものということが定義であって、わたしはそのとおり、これを読むあなたがわたしの言うことをきかないものとして書き話している。それはわたしにとって当たり前のことだ。あなたがこれを読んで何をどう思うのかは、あなたの決めることであっておれの決めることではない。あくびをしようが唾を吐こうが、それはあなたの決めることだし、震えて冊子を握りしめるにしても、それはあなたの決めることだ。

おれが決めることは、ひたすらおれが何を書くかということだけ。そして、それが独りよがりにならないためには、おれの気魄が受け皿になり、読み手ともども、そこに文学の魂が呼び込まれなくてはならないということだった。

そのことのどこが「冷淡」なのか。

「他者」が発見され、その他者を認めない・よろこばないということでは、けっきょく元のナルシズムに戻ってしまうだろう。だから他者は認められねばならず、他者は保たれねばならない。

それは当たり前として、「他者」というと、ここでなぜか多くの人はわざとらしく、「他人は他人だからね」と安直な冷淡さを気取り出してしまふ。なぜそんなわざとらしい陳腐な挙動を採るのか。

その理由は、逆に子供じみて単純なことだ。

つまりあなたは、自分が侵略・コントロールできない「他者」によって、

「つまんね」

とはっきり言われることを恐れているのだ。

「キモい」

「ダサイ」

「寒つぶ」

「痛い」

「才能ない」

「要らない」

「みっともない」

「恥ずかしい」

「醜い」

「親の顔が見たい」

「友達いなさそう」

「こんなふうにはなりたくない」

他者は他者なので、他者はすべてを思ったとおりに思うべきだ。

そして、悪意や加害の意図がないかぎり、他者は自分の言いたいことを言うべきだ。

となると、あなたのすべては、このままに失笑され、百パーセント鼻で笑われてしまうかもしれない。

それはそうだろう。

「ザコ」というのはそういうものではないか。すべての人から鼻で笑われてこそザコだろう。

あなたは自分で自分のことを、大きくは見積もっておらず、それなりに自分が「ザコ」ということも、独りかぎりでは冷静に認めているところがあると思う。

ところが、あなたの覚悟している自分の小ささというのは、じっさいに他者の前に白昼堂々、自分自身を陳列し、白い眼で見られながら、「ぜんぜん面白くない、というか、見苦しいですね。ダサイ。努力は認めるんですけど笑、すべてが偽物というか、陳腐というか、これはとても

付き合いきれないですよ」

と言われることまでを想定してのものではない、ということが多いものだ。

だがおれがやっていること（やってきたこと）は、それを覚悟するのが基本のことというか、それが始まりの土台というものだったので、これについては「他者とはそういうものだろう」としか言えない。

他者の中で自分をやっていくというのはそういうものだ。

おれには何の社会的権威もない。おれは大学教授ではないし何かの受賞者ではないし何か芸事の家柄に連なる者でもない。

おれは常に、百パーセント、

「何こいつ」

と他人からキモがられうるという、そういう地点にばかり立ってきた。

おれの場合は、あなたから見ても、それが「当たり前」だろう。

今だってそうだ。

「何こいつ」と言われたら、おれ自身、「何なんでしょうねこいつ」と、同じキモさを思わなくはない。

だから、その当然のキモさの中で、「もし例外が起こるとしたら」ということを追究しつづけ、おれはいま、「魂を呼び込む」というのがそれだという話をしているのだ。

もちろん、それが成り立っていないければ、そのキモさは倍増アンド倍増してしまうけれども。

こんなにちの環境は、各種の営為についてまったく有利な雰囲気・文化状況とは言えないが、そこを四の五の言っていてもあまり意味がない。魂が呼び込めれば何かになるだろうし、呼び込めなければ「何これ」とキモがられて笑われて終わりだろう。

おれは二十年も前からずっとそこに立っているのだから、逆にフェアに、そのことにウソをつかずに申し上げるしかない。

おれは他者におれの書き話を読ませている。

おれがやっているのは、いつのまにか、書き話しだけではなくてしまったけれども。

そのすべて経験に立って、当たり前のことを言うことができる。

他者は、自分とは断絶されたものだ。

断絶されていたものを、さびしがり、幼児的につなぐとすると、侵略になる。

侵略して、入り込み、内部から支配し、コントロールしようとする。

それに成功するとキューンとなる。

それは定義レベルで他者の否定だ。

コントロールできない他者なんか要らない。わたしの言うことをきいてくれる存在だけでいい。それが真実、というのがナルシズムの自白だ。

このナルシズムを放棄し、断絶した定義どおりの「他者」を目の前に置くとき、われわれは「冷淡を気取る」というつまらない態度に終始するしかないのか。

そうではない方法はあるだろうか。

そうではないものを、ふだんは言わない言い方でいうと、愛と呼ぶ。

きつと、英語圏で言われる love というほどには、愛という語は、使用を控えられている。

控えられているということは、大事にされているということかもしれないし、ないがしろにされているということかもしれない。わからない。最重要のことばは濫（みだ）りに発するべきではないという直観もある。真相は不明だ。

ともあれ、愛というのは、ここでは簡単だ。

実現は容易でないが説明は簡単だ。

他者と、断絶されているのに、通じるものがあるということだ。

他者に、何もされていないのに、迫ってくるものがあるということだ。断絶されているのに通じるとか、何もされていないのに迫ってくるというのはどういうことか。

だからそれが、「魂を呼び込んでいる」ということだ。

あなたが読んでいる、この書き話しの文章から、あなたが聞き取っている声は、じつはおれからあなたへのものではない。

この場合、もはや何を「おれ」と呼ぶかの問題になってくるのだが、とにかく一般的な意味においての、ボクからキミへのものではない。

おれの気魄が、この書き話しという作品になり、これが受け皿になって、文学（その他）の魂を呼びこんでいるのだ。

あなたはその呼びこまれた魂を体験しているのだ。

あなたが聞き取っている声はそれだし、あなたに迫って来ているものもそれだ。

本当はあなたのころのほうがそれに向かって行っているのだが、そこまでの説明はまた別ジャンルのことになるので差し控えよう。

おれの話があなたに聞こえている功績はおれにはない。

おれに功績は一ミリもない。

おれがおれの話をあなたに届ける必要はないのだ。

おれがそんなことに鼻息を荒くしなくても、どうやら何か、もっと上等で祝福に満ちたシステムがある。

おれは、あなたに侵略を仕掛け、あなたの内部に侵入し、内部からあなたを支配・コントロールする、なんてことをしなくてもいい。

そんなことをしなくても、あなたの中枢に直接「通じる」方法があるからだ。

その方法があるから、何もガンバってあなたに侵略を仕掛ける必要がないということ。

あなたはおれにとって他者のままでいい。

他者のままでも中枢に通じるから。

むしろ他者が発見されなければ、おれはこの方法というか、現象を発見できなかった。

聖書には、次のように書かれている。

こういうことについて、聖書がアテになるのかどうか、おれは知らないが、書かれてあることはおれの発見したことにそっくり当てはまっている。

詳しいことが知りたい人は専門家に聞いてくれ、おれは宗教にはかわりが無い。

いわく、

「まず、汝の主たる神を愛し、次に、汝の隣人を、汝のごとく愛しなさい」

聖書にはさしあたり、「隣人にあなたの言うことをきかせて支配し、あなたはキューンとなりなさい、それって感動だよ」とは書かれていない。

おれは、おれの隣人に向け、気魄を地べたに這わせ、それを隣人ともどもの受け皿とする。

何の受け皿かはわからない。

けれども、決まって、ちゃんと祈っているところの魂が呼び込まれる。

そうしたら、おれが何かをしなくても、隣人は呼びこまれた魂を体験する。

もちろん隣人が熱烈拒絶したら話は別だ。

熱烈拒絶したら魂の呼び込みは成立しない。

それはおれが決めることではなく隣人が決めることだから、それに付いては何もない。

というわけで、話は最初のところに戻ってくるのだ。

魂を呼びこむということ。

それは大人の出来ることであって、幼児の出来ることではない。

人の苦悩なんてけつきよくこの一点に尽きている。

人の苦悩とは、魂が呼び込まれないということの、みじめさと恥ずかしさだ（西洋では「罪」だ）。

ナルシシストは誤解をしている。

ナルシシストにはどう見えているのか。

ナルシシストには、おれが「気持ちのままを世界にぶっ込み、表現し、コミュニケーションしている」、というふうに見えているのだ。

幼児からの視点としては、そのようにしか見えないのはしょうがない。けれども実年齢としてはもう誰も幼児ではないのだ、そろそろ寝言も差し止めることにしよう。

おれのやっていることは、みずからの気魄を受け皿にすることだ。

ナルシシストは、逆、世界を自分の気持ちの受け皿にしようとしている。

発想が逆、受け皿があべこべだ。

おれのやっていることは、他者の中枢に通じるが、それは呼びこまれる魂のはたらきであって、「通じる」ということにおれの功績は一ミリもない。

せいぜい、おれはその魂の営為の「仕手」ではどうやらある、というだけだ。

ナルシシストは、同じことを、他者への侵略、支配・コントロールで出来ると思っている。

それが感動ですよ、と思っている。

本当は快感でしかないくせに。

ナルシシストは、心理的成長のていどとして、本当にそういう発想しか知らないのだからしょうがない。

おれがおれの方法で百の声を通じせしめたとき、ナルシシストはナルシシストの方法で同じように百の声を通じせしめることができると思っている。

本当に、思っている。

しょうがないのだ。

おれが魂を呼びこんだ代わりに、同量、ナルシシストは自分の気持ちをぶっ込めば、それで同等の声の通じが得られると思っている。

精神的発達のていどとして、本当に、おれが「魂を呼び込んでいる」ということが六歳児には視えないので、ナルシシストはナルシシストの方法を採る。そして、それがおれの方法とはまるで違うということ、結果としてもたらされているものもまったく違うということが、わからないまま暴れつづける。

むかし、ある国のある地方の人々が、金物屋で買った蛇口を壁に押し込み、

「水が出ないぞ！」

と次々にクレームを言ってきたということがあったらしい。

びつくりする話だ。

蛇口はただの末端機構だ。

水道管や上水道、水源や浄化槽のインフラに接続していなければ、蛇口から水が出るわけがない。

ただの土壁に、蛇口を押し込み、それで水が出てきたら、そっちのほうで物理的に大問題だ。

でもそのことも、三歳児なら、わからなくておかしくない。

三歳児は、記号的に、蛇口をひねれば水が出るものだと思っているかもしれない。

精神的発達のていどとして、三歳児ならそれはしょうがないことだ。おれの方法は、みずからの気魄を地べたに這わせて受け皿とし、そこ

に魂を呼びこむという方法だ。

ナルシシストは、自分の気持ちを世界にぶつ込むという方法で、

「同じ結果が出ないぞ！」

とクレームを言っている。

蛇口から水が出ないとクレームを言ってきた人たちに向けて、

「まずインフラをしつらえないと、水が出るわけがありません」

と説明したらどうなるだろうか。

説明されていることは、わかるような気がする、「が」、

「そんなことはどうでもいいのだ！ 水が出るようにしろ、われわれには水が必要なんだ」

と無茶を言い出してもおかしくない。

ナルシシストは、自分の「キューン」という無上の快感を知っており、それを「感動ですよ」と確信しているから、まさか自分の何かが誤って、自分が六歳児の誤解の中を生きているとは思っていない。

ナルシシストは根本的に、何であれ自分はまず「出来る」と思っているものだ。

自分が六歳児ということを知らず、世界には六歳児でない大人もいるということを知りやうがないので、ナルシシストは、ほかの誰かがやっていることは、コツさえ教われれば自分も近日中に出来ると本当に思っている。

けれども、ナルシシストがそう信じたとしても、じっさいのこととしては、大人の示しうる実作・実演・実物を提出することはできない。

ナルシシストが、幼児であって大人ではないということ、魂を呼び込むというようなことは幼児には取り扱えないということから、いつまでたっても「出来ない」ということがつづく。

そのことは、ナルシシストにとってはきわめて不快なことで、追い詰められ、やがては未分化感情の激発に至る。

いいかげんこの話にも飽きてきたので、ナルシシズムは克服されるべきだ。

ナルシシズムを克服するのはどういう手続きになるか。

いつまでも「が」を繰り返すことを発見せよ。

まるで体内物質を生産するように、自然かつ強制的にその「が」は、ナルシシストの体内に湧いてくる。

なぜそのような、「が」の生産が繰り返されるかというと、自分を特別だと思っているからだ。

そして、じっさいには特別ではないので、結果はまともには伴わず、「生きにくい」と感じ、当人の感覚としてはさまざまに、みじめな憂き目にあわされている。

そのみじめな憂き目について、ナルシシストはひとつひとつ「我慢」をしている。

客観的に見たらめっちゃくちゃな話だ、「我慢」するようなことはどこにもない。

だがナルシシストは快感原則にしたがってしか挙動できないので、どう「我慢」を離れようとしても、けっきょく「キューン」と「我慢激怒」の往復しか運動の軸がない。

閉塞しているこの構造の中から、どうやって脱するのか。すべては一点に掛かっている。

「他者」の発見だ。

他者は誰だって日常的に知っているものに思える。

それはウソだ。

「他者」は、定義レベルできっちり「発見」されるまで、まともには存在していない。

他者が発見されれば、これまで「我慢」と言っていた、ナゾの濃縮ウランのような自己都合沈殿物も、馬鹿げたものとしてもう発生しなくなる。

我慢を我慢するのではなく、我慢したいが発生しなくなるのだ。とりあえずそこまでナルシズムの一次克服だろう。

そこまで、一般的にはじゅうぶんなのかもしれない。

他人は他人だから、という、すぐ打ち切られる少年マンガ連載のセリフのような「冷淡さ」、それに耽りつつ、それでも他者を他者として発見したのではあるならば、それでもう一般的にはじゅうぶんな心理的成長なのかもしれない。

おれはこのとおり、冷淡ではないけれども。

愛という現象があり、呼び込まれた魂がもたらすその祝福の中核現象が愛だが、その中核現象について、おれの功績は一ミリも無い。

なんとも無力なことだが、愛というなら、愛という現象の主(あるじ)はおれではなく、その現象の主じたいがどこかにどのようにかして存在している。

おれはせいぜい、必死になれば、それと呼び込むことはできる、と言っているだけの俗人にすぎない。

そして、それと呼び込む気魄のありようは、どんな形を取るにせよ、作品たるか、少なくとも作品性を帯びていると、おれは経験的に思う。

だからここに書き話しているこれは、題するなら、ナルシズムと作品の読本ということなのだ。おれは自分がこれだけ言うからには、実作を示さないでは認められようもないだろう。

感情に振り回されてゐる自分こそが、やつぱり

「()」人なのだと、ナルシシストは
確信する

あなたは生後三ヶ月の赤子が「ブチギレ」しているのを見たことはないはずだ。

生後三ヶ月の赤子は、気ままに泣いたりぐずったりはしゃいだりするけれども、何かにブチギレたり、納得したり、懐かしんだり、感慨を覚えたりはしない。

感情の多くは、後天的に分化・獲得されるものであり、生まれつき具わっているものではないのだ。

人は、生まれつきには、ふたつの感情軸しか持っていないと言われている。

ひとつには「快・不快」の軸と、もうひとつには「落ち着いている・興奮している」の軸だ。

赤子は、まるでx y平面の象限のように、2×2の、単純な感情しか持っていない。

快×落ち着いている…ごきげん、おだやか

快×興奮している…キャッキヤ、はしゃいでいる

不快×落ち着いている…ぐずっている

不快×興奮している…泣き叫んでいる

母親が赤子を放ったらかせば、赤子はやがて泣き出すだろう。そのた
びに母親は、「はいはい、お腹空いたね」「さびしかったね」「うんち出た
かな」と言うが、赤子の側にはまだそのような複雑な感情分化は起こっ
ていない。すべて「不快・興奮している」というだけだ。もちろんそのこ
とに赤子の咎（とが）はまったくない。

赤子は「さびしい」という理由では泣かないのだ。もちろん、おしゃぶ
りを吸わせたり「ガラガラ」を持たせたり、抱っこしたりにぎやかなと
ころに連れて行ったりすれば、赤子は比較的泣かないので、結果的に「さ
びしいと泣く」ということはあるのだが、赤子のほうはそれを「さびし
い」とは思っていない。

赤子はまさか「きょうは寂（さび）しい」「きのうは淋（さび）しかっ
た」などと使い分けて泣いているわけではない。そんな使い分け（分化）
に至っている赤子は泣かないだろう。

赤子は「さびしい」という感情を捉えているわけではなく、ただそれ
が快・不快でいえば不快なのであって、その不快の訴えとして泣いてい
るのだ。

赤子は、おむつの中が水濡れしても不快で泣くし、お腹が空いても不
快で泣く。

さびしくても不快で泣くのだ。

大人の場合はどうだろうか。

大人は、おむつの中が水濡れして不快でも、それで泣きわめいたりは
しない。

（認知症の場合はどうなのか、おれには知識や経験がないのでわからな
い）

お腹が空いても、「腹が減ったわ!」と言って泣き出したりはしない。

それは大人だから当然のことだ。

……。

本当にそうだろうか？

あなたの母親は、子供たちが自立して、お盆にも帰ってこなくなった
いうことで、さびしがって泣くということがありうるのではないだろ
うか。

あるいは、汗をかいてシャツが濡れ、
「ああつ、ベトベトして気持ち悪い!」

と言って、ブチギレ様相を示す可能性のある人が、あなたの知り合い
の中にひとりぐらいいるのではないだろうか。

お腹が空くと「イライラ」しがちな人が、あなたの知り合いにひとり
やふたりはいないだろうか。

感情の分化と発達は、後天的に得られるものであって、これもまた心
理的成長のひとつだから、万人が同じようにその成長を得てはいない。

さびしくて、シャツが水濡れして、お腹が減っていたら、それらにつ
いての感情がごちゃ混ぜになり、

「不快! 不快! 不快!」

と泣いたりわめいたりする大人はじゅうぶんに存在しうる。

「あーもう! 無理! キモい! ウザい! ムカつく! もう死にた
い! 気が狂いそう!」

泣き声や体躯が赤子のそれではないというだけだ。

多くの人はきつと、感情の「分化」なんてことは、これまでに一度も考
えたことがないのではないだろうか。

このことも、あなたの心理的成長と深くつながっている。

たとえば、あなたの実母はともかくとして、誰とは知らない高齢に近
いおばさんが、

「お盆なのにもう、子供たちが帰ってこなくなってるねえ」

と言い、泣いていたとする。

あなたはおそらく、それを見るとすなおに、

「かわいいそう」

と感ずるだろう。

そしてあなた自身、そうして「かわいいそう」と感ずることについて、あてはめうることを持つていないのではないだろうか。

さしあたりおれがそれについて、

「人情、というやつか」

と言え、あなたは、

「そう」

と肯うだろう。

あなたは感情の分化について知らない。

そして、それについて知らないということが、あなたの背骨たる経験量として危なっかしさを漂わせているということも、あなたは知らない。

子供たちが帰つてこなくなり、「さびしい」と言つて泣いていたお婆さんは、翌日、思いがけない人たちからカラオケパーティに誘われた。

そうすると、意外に意気投合したみたいで、お婆さんから送られてきた動画は、年甲斐もなくピースサインを示しており、お婆さんはカラオケの爆音の中でカメラレンズに向かい、「イエーイ！」と大声を発していた。

さびしさは癒されたようだ、めでたしめでたし。

人情としてはここで打ち切りにしてよいと思うが、精神的な発達という視点では、あなたとしては少々の疑義が残るはず。

子供たちが帰つてこないという話はどうなったのか？

子供たちが帰つてこないということがさびしかったのではなかったのか。

お婆さんは、来週もカラオケパーティに誘われたとのことで、あたらしくお出かけ用の服を買いに行くといつて、デパートに出かけていった。それが悪いと言っているのではない。むしろ楽しそうで何よりだ、友

人が得られるのはすばらしいことだ。

ただ先日、さびしいと言つて泣いていたあれは何だったのかという話だ。

さびしい、と言つて、仮にここで、彼女のお子さんたちは、事故や病気で、みんな若いうちに他界していたとする。

それはそれでさびしいことだ。

亡くなつてしまつたのであれば、霊的なことを除けば、お子さんたちは母親のところに帰省してこないだろう。

しかしその場合、そのお婆さんは、お盆に子供たちが帰つてこないということに泣くだろうか。

帰つてこない、という意味では同じだが、彼女はおそらく、その場合は泣かないように思われる。

帰つてこないというか、帰つてきようがないので帰つてこないのだが、なぜその場合はお婆さんは泣かないのか。

このお婆さんの感情について、あなたは、じゅうぶんにあてはめて説明できるだけの「ことば」を持つていないかもしれない。

もちろんただの推測なので、誤つていたら申し訳ない。

けれどもこうしたことは、当人が心理的成長・精神的発達を得てきていないかぎり、

「んー？ よくわからないです」

になるものだ。

よくわからないのではなく、本当には、「そこまで考えたことがない」「そんな領域にまで精神が発達していない」のだ。

ここで考えうる、お婆さんの感情について、おれがあるべきことばをあてはめて説明してみる。

もちろんどんな感情であるかは、当人のことなので、あくまで「考えうる」ものの列挙にすぎないけれども。

まず、お子さんたちが他界していた場合はきっと泣かなかっただろうということは、逆にいま、お子さんたちは存命で、「来ようと思ったら来られるのに」ということ、「来られるのに来てくれない」ということが、おばさんの感情に深く刺さっているのではないかと推定できる。

その場合のおばさんの感情は、申し訳ないが、「さびしい」というよりは「みじめ」だ。

加えて、お子さんたちはまだ若く、それぞれ都会に出て活躍し、にぎやかに遊んでいるかもしれない。

その若さと、にぎやかさと、楽しさと、都会での充実と、自分にはなかった人生が、「妬（ねた）ましい」ということもありうる。

その場合は「嫉妬」だ。

妬ましさ、嫉妬が混入していたということは、「ひがみ」の感情、あるいは怒りや憤（いきどお）ろしさなどの感情もあったかもしれないし、さらには自分も華やかにやりたいという、あてのない空想・願望の感情もあったかもしれない。

自分も華やかにやりたいという願望・欲望があつて、それを求めているのに得られないということがあれば、悲しみの感情はあつただろうし、求不得苦という苦しみの感情もあつただろう。

あるいは、お盆でお子さんたちがどうこうという以前に、おばさん自身の日々が、もう年齢もあり、ひそやかなもので、

「あとはもう、このまま年を取っていつて、死んでいくだけなのかしら」という思いもあったかもしれない。

だとしたら、その感情は「空漠」と「虚しさ」だ。

さらには、その「死んでいくだけ」ということに、ゾッとする感情も覚えていたかもしれない。

その場合、その感情はさびしさではなく直接の「恐怖」だ。その恐怖には、規模のわからない「不安」も混ざっていたかもしれない。

おばさんが覚えていたさびしさ、というよりはみじめさは、自分がお子さんたちにいまいじ好かれていないということ、疎まれてさえるかもしれないということ、それに加えて、お子さんたちを含めて全体的に、そもそも自分が人から関心を向けてもらえないということにあつたかもしれない。

おばさんは、あまり人付き合いが上手でなく、気の利かないところがあり、友人らしい友人を得ずにここまで来たということもありうる。

だとすると、そのみじめさには、劣等感やバニックなどの感情も含まれているだろう。

また、自分がそうしたみじめさの中にあることについて、“言い訳がましき” というような感情のはたらきを持つていてもおかしくない。

お子さんたちを含め、誰も自分のことを相手してくれないということについて、「どうせわたしなんか」という自己卑下の感情、あるいは「世の中なんてしよせんそんなものよね」という厭世の感情も持つていたかもしれない。

カラオケパーティーで盛り上がったということは、お歌が上手であろうが下手であろうが、マイクを持てば一定でいど盛り上がって昂つてしまふという、自己顕示欲求の感情もあつたのかもしれない。

「イエーイ！」という動画が撮影されるということ、またそれが送られてくるということは、思いがけずおばさんには遊蕩という気質あるいは抑圧されてきたその感情があるのかもしれない、お酒を飲んで騒げば気が大きくなる、そして自己主張をしたくなるという感情もあるのかもしれない。またその自己主張に伴つては、とうぜん「快感」という感情も得られたに違いない。

このあたりで、感情の可能性の列挙はひとまず済ませたということにしようと思うが、どうだろうか、あなたがこのおばさんに向けていた先ほどの共感性の感情は、大きく変化したのではないだろうか。

人情といえば、これらのことはすべて人情と言いうるだろうし、総じて言えばそれは「さびしい」に当てはまるだろうが、あなたの捉えていたところのものは大きく変化していったはず。

あなたは先ほどまで泣いているおばさんを「かわいそう」と思っていたのだ。

お盆なのに子供たちが帰ってこなくなった、とおばさんが泣く。

かわいそう、とあなたはすなおに思った。

「人情、というやつか」

「そう」

さきほどまで覚えていた、おばさんへの感情は、あなたの内部でずいぶん変化してしまったはず。

そして同時に、このおばさんの「こころ」あるいは「心理」についての手触りは、あなたにとって先ほどよりずっと生々しいものになったのではないだろうか。

あなたはいま現在のほうが、このおばさんのことを「よく知っている」はずだし、おばさんのことを「よくわかる」はずだ。

ではさきほどまであなたが覚えていた「かわいそう」という強い感情は何だったのだろうか。

精神的発達のでいど問題として、^^感情が未分化V Vということがある。

わかりやすく言うと、おばさんは赤子のように泣きわめいていたのだ。

もちろん赤子のそれとまったく同一に泣きわめいていたわけではない。赤子においては感情が未分化なのは当たり前だ。

赤子はただ、不快という単一の感情において泣く。

おばさんも同じだ。

さびしいといえばさびしいし、みじめといえばみじめ、悲しみといえ

ば悲しみ、苦しみといえば苦しみ、虚しいといえば虚しい、恐怖といえば恐怖、不安といえば不安、自己卑下といえれば自己卑下、厭世といえれば厭世。

それらの感情が、分化されておらず、未分化のまま一緒にたにされ、「とにかくこんなの、つらいです、耐えられない、厭（いや）です」

と泣いていた。

何かしらのネガティブな感情・受容しがたい否定的な感情でおばさんが泣いていたのはあきらかだが、もう高齢者に近いおばさんに、

「何の感情で、どうあつてほしいとお望みのですか」

と訊いても、おばさんは、

「そんなの、わからないです。ただ、お盆だからね、お盆ぐらいはみんな実家にね」

と泣き声でいう。

「わからない」というまま、とにかく自分の感情をなくさめてもらいたくて、お子さんたちを「人情」的に、またお盆という風習的に、実家へ呼びつけようとしていた。

あなたは、自分の経験と、自分のことばを総動員して、このおばさんの感情をじゅうぶんに「分化」して捉えることができると自負できるだろうか。

そのことはちょっと、むづかしいです、とあなたは言うのではありませんかと思う。

これらのことは、いまこの場でウンウン唸って考えて、「わかった」となるたぐいのことではない。

自分自身のこと、またこれまでの周囲のさまざまなことについて、たくさん考えてきて、いくつもの感情の分化をみずからに見・獲得してきたというタフで直接の経験がないと、にわかに手触りのある感情の分化なんて出来ない。

子猫を見て「かわいい」、ネイルを見て「超かわいい」、イケメンを見て「尊い」、上司に説教されて「ウザい」、月曜日に「ダルい」、知り合いを見て「無理」、音楽を聴いて「エモい」、そんな粗雑な感情の放置^ミをつづけてきて、きゅうに感情の分化が達者になるわけがない。

現代人は特に、子猫を見て「かわいすぎてヤバイ」、ネイルを見て「映えすぎてヤバイ」、イケメンを見て「エロすぎてヤバイ」、説教されて「ウザすぎてヤバイ」、月曜日に「ダルすぎてヤバイ」、知り合いを見て「無理すぎてヤバイ」、音楽を聴いて「エモすぎてヤバイ」と、とにかく「ヤバイ」しか言わない。

赤子が泣くのと同じだ。

ヤバーい、ヤバーい、と泣いているのと同じ状態にある。

悪口で言っているのではなく、本当のこととしてやむを得ず言っているのだ。

「快でヤバイ」「不快でヤバイ」と言っているだけでしかない。

感情の未分化について、われわれはいつまでもなんとか怒鳴り声で押し切ろうとしているが、そんなことがどこまで通用するものやら、どこまでいってもそれは冷静に見ればただの「未発達」にすぎない。

六歳児なら何もかもが「ヤバイ」のまま未分化でよいかもしれないが、その六歳児のまま顔つきは中年の面持ちとなってくると、やはりわれわれはそこに酸鼻なものを見出し出してくるのだ。

本来、精神の発達^ミは、感情の分化と同道する。

感情の分化は、それじたいが心理的成長の大きなひとつでもあるということだ。

先ほどのおばさんが、仮に、何かに目覚めたように、みずからの感情に徹底的に向き合い、何の知恵あつてか、まるで天啓を受け続けたかのように、感情の分化に成功していったとする。

するとおばさんはみずからについて次のように述懐するだろう。

「わたくしは年甲斐もなく、お慈悲のように厚意で誘っていただいたカラオケパーティではしゃがせてもらい、ありがたくも人から構ってもらえるということ、まるで気の置けない知己のように交歓してもらえるとすることに、これまでみじめだったうらさびしさをおおいに慰められました。そこでわたくしは、酒精もあつたにせよみつともなく気を大きくし、それに乗じて、イエーイと声を張った醜態の動画まで撮影し、まるで充実している自分を若者ぶって誇示するかのようになり、それを知人に送りつけましたのです。振り返れば、自分が慣れない快感に酔いしれ溺れていたということを認めざるを得ないところです。そのことの背後には、これまでずっと、叶うことならそのように人に慕われる者でありたかった、華やかに人気者のひとりでありたかったという、願望があり、それが無作法にも弾けて飛び出したのだと思います。その、人に慕わたいという不相応の願望は、これまで行き場をなくして、立場として最も付き合わせやすい子供たちに向けられておりました。彼らはわたくしの子なのですから、母であるわたしを慕って当然だと、強弁できる正当性があるように思い込み、その思い込まれた正当性の強さにすがったのです。これまで華やかなことがなかった自分が、このまま枯死していくだけなのだろうかということが現実感を伴って毎夜のように迫ってきますと、恐怖もあり、不安もあり、またすべてがあまりにもみじめで、そんなこと信じたくないというやたらな拒絶感に苛まれたのです。わたくしは何とも、さびしい人でしたね。そのことを引き受け切れず、せっかくのご厚意の中で醜態をさらしてしまい、たくさんの人に厄介な思いをさせてしまいました。今となっておわびの申し上げようありませんが、精一杯、愧（は）じております」

おばさんが突如、そこまでの感情の分化に至ったとする。

感情の分化が得られたとしても、おばさんを取り巻く環境は何ら変化していない。

けれどもあなたはこの述懐をもって、おばさんを軽蔑するだろうか。心理的な成長など存在しない、関係ない、おばさんはただのおばさん、とあなたは思うだろうか。

わたしにはこのおばさんは心理的に長足の進歩を得たように思える。このおばさんは来年のお盆にも、「子供たちが帰ってこない」といってメソメソ泣くだろうか。

あなたが先ほど「人情」と言って捉えたところのおばさんと、いま、感情の分化を得て心理的に成長したおばさんとで、あなたが「ここある人」と体験するのはどちらのおばさんだろうか。

仮に、後者、成長したおばさんのほうが「ここある人」だった場合、ここある人のほうが感情に振り回されないのはなぜなのだろうか？

ナルシシストは六歳児なので、感情のほとんどが未分化だ。

感情が未分化なので、感情に振り回される。

そして当人はそれを「人情」のたぐいだと思っている。

そのとき、誰よりも自分こそが、「ここある」者だと思っている。

人が、自分の言うことをきいてくれると、ナルシシストは「キューン」となる。

キューンとなるということは、「快」だ。

快ということは、「好き」で、「美」で、「やさしさ」で、「正義」で、「真実」で、「救済」だ。

なぜ？

なぜと言われても、未分化だからだ。

快に属するものはすべて一緒にたにされている。

逆に、人が、自分の言うことをきいてくれなかったらどうなるか。

それは「不快」だ。

それが不快ということは、「悪」だ。不快ということは、「誤り」で、「怒り」で、「憎悪」で、「邪悪」で、「軽蔑」で、「愚劣」で、「断罪」だ。

不快もなんとか「我慢」するけれど、その我慢はただの不快の後回し貯蔵タンクでしかない。

不快に属するものもすべて一緒にたにされている。

分化されず、一緒にたにされたまま、不明の混合情動となった感情に振り回されることになる。

そのことは、当人にとっては、誰よりも「ここある」と信じられる状態だ。

「好きなんだからしょうがないじゃん！」

「マジ無理、死ねとしか思えない」

「なんでさあ、そうやって、人のここを平気で踏みにじることができんの？」

「あたしたちってスゴくない！？」

感情が未分化というのはそういうことだ。

快なら快で暴走するだけ、不快なら不快で爆発するだけ。

成人男性が、おっぱいを揺らすアイドル女性を見て、快を覚える。

それは快だから、「好き」で、「かわいい」で、「天使」で、「尊く」、「応援されるべき」で、「がんばっている」、「純粹で」、「まじめ」、「性格いい」。

おっぱいが揺らされただけなのにだ。

けれども、冗談でなく、感情が未分化なので、

「ゆさゆさゆさゆさ」

「好き好き好き好き」

になる。

アホの極致という可能性はじゅうぶんにある。

それを当人は、

「本気で彼女に恋をした。こんなに人を好きになったのは初めて。この感情を、彼女がくれた。いつも彼女に元気をもらっている」

と大真面目に言っている。

そのとき当人は本当に、自分こそが「こころある」と確信しているのだ。

成人女性にとっては、イケメンの顔面が「快」だし、高級なレストランが「快」で、自分をちやほやしてくれるのが「快」だ。

快だから、それは「正義」で、それは「恋」で、それは「愛」で、それは「青春」で、それは「ピュア」で、それは「大切」で、それは「けがれおらず」、それは「聖なるもの」だ。

ところが、彼が別の女性をちやほやしたら、それはとたんに「不快」だ。

不快だから、それは「邪悪」で、それは「嫌悪」で、それは「憎悪」で、それは「悪夢」で、それは「汚物」で、それは「ゴミ」で、それは「軽蔑」で、それは「無理」で、それは「サイテーなもの」だ。

この成人女性が、

「そろそろ婚活に向き合いたい」

と言っており、さきほどの成人男性が、

「おれ、彼女ほしいんだよね」

と言っているのだ。

何かがどうにかなくて、こうしたふたりが「うまくいく」なんてことがあるのだろうか。

数十年ぶんというレベルで、心理的成長・精神的発達が遅れているというのは、のっぴきならずそういうことなのだ。

ナルシシストは、感情が未分化で、その不明の混合情動となった感情に振り回されている。

そして、そうして感情に振り回されるということをもって、誰よりも自分が「こころある」と確信する。

いまこのときもそうだ。

ナルシシストがおれの書き話を聞いていたら、ナルシシストは最終

的に、おれのことをこころある人とは思わないし、そのように認めもしない。

ナルシシストにとってこころある人とは、誰よりも自分、特別な自分だ。

感情に振り回されている自分こそが、やっぱりこころある人なのだと、ナルシシストはしだいに確信を深めていく。ナルシシストは感情の分化には向かわない。

このこともまたナルシシズムの快感原則だと捉えてよい。

感情に振り回され、誰よりも「こころある」真実の自分を確信するとき、そのことはキューンと胸に音を立て、自分にとって否定のしようがない至上の快感をもたらすのだ。

自分が（ ）だなんて、許せない

ナルシシストは、自己愛の権化だ。

それは幼児期においてはしょうがない。

問題はやはり、心理的成長は、生理的成長のようには、自動的に得られていかないということ。

百六歳になっても、心理的には六歳のまま、ということがめずらしくもなくありうる。

それでは敬老の精神も撤廃すべきだろう。

じっさいには六歳のだから。

百年間、何をしてきたかというと、何もしてきていない。

何もしてきていない、エエッ？

そんなことはめずらしくないのだ。「ふつう」だ。

ナルシシストは自己愛の権化で、自分のことが好きすぎ、いつも調子こいでいる、たちの悪いやつ、というイメージがある。

たしかにナルシシズムとしてそういうことが成り立っている時期もある。

若いうちや、何かしらの成功や強みにいるあいだ、あるいはその成功や強みを錯覚しているあいだには、いわゆる「イケイケ」の、そういうナルシシズムもありうる。

けれどもじつさいの割合としては、そうしたイケイケタイプのナルシシストは少ない。

ナルシシストは、自己愛の権化だが、その自己愛というのは、イケイケというよりただ「自分への関心度ばかりが異様に高い」という形で現れてくる。

仮に、自分の同級生がオリンピック出場権を得たとしても、

「へーそうなんだ。超スゴいじゃん」

ぐらいで、それよりは、

「ちょー！ マジで前髪切り過ぎたんだけど。何なのあの美容院。ヤバイ、待って待って。これ明日学校行けないじゃん」

ということばかりに関心がいく。

このことはめずらしいことではない。

ナルシシストが、テーブルに足をひっかけて、高価なグラスを床に落として割ってしまったとする。

そういうチョンボをすると、ナルシシストは、

「あちゃー！ やっちゃった」

と反省する。

本人なりの、そういう反省をするが、大切にしていたグラスを失った

人の気持ちということは、ナルシシストにはわからない。

自分の「やっちゃった」だけが百わかり、誰かの「グラスが失われた」はゼロわからないのだ。

表面的には、反省しているように見えるし、謝罪しているように見えるだけに、見分けがつきづらくたちが悪い。

人の気持ちを考えないというより、「他人の気持ちを第一義に考える」というような高潔な能力を、彼の発達でいどに見込めるわけがないだろう」という状態だ。

六歳児というよりは三歳児ぐらいのことで、三歳児がグラスを割ってしまったら、「ごめんなさい」と震えて言いつつも、まず「ガシャーン！」というショックで自分が泣いてしまっだろう。たいてい代わりに保護者が謝罪するはずだ。

大人になっても、彼のチョンボは、代わりに先輩や上司が謝罪して回るはずで、そのことを、ナルシシストの当人は「おかしい」とは気づけない。

あちゃー、やっちゃった、とばかり思っており、当人は本当に反省しているつもりで、当人は、「その真剣な反省だけで自分は百点だ！」となぜか自己肯定的なことを思っていたりもする。

まあ、こんにちでは、ヘンに落ち込まなくていい、というメリットの点もあるけれども。

根本的に、グラスを大切にしていた他者のことまではわからないので、ナルシシストにはそこまでの反省のしようがない。

ナルシシズムはこういうとき、奇妙な盛り上がり方をするのも特徴だ。チョンボをやらかしたのだが、それでもいちおう、悪目立ちで人から注目され、一種の「時の人」にはなるわけで、そのことに対するテンションの昂りを抑えられなくなる。

信じがたいことだが、それでも彼にとっては、自分が人に注目されな

いよりはマシ、という感情があるのだ。

恋愛すると必ず喧嘩ばかりになる人にはこのパターンが多い。

派手に揉めて、派手に喧嘩すると、何はともあれ交際相手からの、憎悪混じりのきつい関心は自分に向くわけで、そうすると自分の自己中心性が満たされるといえることがある。

喧嘩をして、喧嘩にまぎれてどぎついことを言えば、そのどぎつさで交際相手を侵略・支配コントロールできるといえることもあり、そのことにはやはり「キューン」という快感が得られる。その快感が得られることに比べれば、お互いに什器を投げつけあったり罵詈雑言を投げつけあったりというようなことは、「別にどうだっていいや」と思う人は少なくないのだ。

あるいは、世の中の半分以上の人が知っているように、社会人の中には、部下に厭味を言ったり、残業を押しつけたりで、支配コントロールの快感を味わうただけに、毎日会社に出勤しているという人もいる。仕事熱心でも何でもない。

ナルシシストだから快感原則でしか生きられないのに、小物すぎて、支配・コントロールという会社で立場に乗じるしか方法がない。他にいくところもなく、土曜日も日曜日も出勤し、デスクで若手と下請けをいじめるネタばかりを探している。

こうしたものは、周囲に実害があるし、特に立場の弱いものにしわ寄せがいくので、はっきりいって世の中の汚物だ。

そうした人は、そうした行為やあなたの存在じたいが汚物ですと、はっきり言われたとしても、そのことをけっきょくやめられないだろう。

どう言われても快感原則にしか動きようがない。

ある意味、徹底している。

途中からは逆に、ニヤニヤし始めたりさえる。

ナルシシズムというのはそういうものだ。

異常性に気づいたとしてもやめられないのだ。

病気ではないがじゅうぶんに狂人ではある。

ごまかせているうちは誰でも、「いくらなんでもそこまではならないですよ」と思えるのだが、誰だって遅かれ早かれだ。誰のナルシシズムでも本質は変わらない。

なぜ自分で異常性に気づいても、ナルシシストはそれをやめられないのか。

快感原則でしか動けないからだ。

ナルシシストなのだから、自分のナルシシズムに向き合うなどという不快な方向へは進めない。

自分のナルシシズムに向き合おうとすると、何が不快なのだろうか。ここで、まったく思いがけないテーゼが出て来る。

「自分が許せない」

ということに行き着くのだ。

んんん？

ちょっと待て、何の話だ。

何がどうなって、そんな話になったのだ。

自分が許せないといって、そうじゃない、お前のことを許せないのは周囲の全員のほうだ。

なぜお前がとつぜん、「自分が許せない」というような、スポ魂マンガ風のことを言い出すのだ。

自己愛の権化のくせに、セリフがおかしいだろう。

自己愛の権化なんだから、あるべきセリフはあつかましく、「ボクはサイコー」であるべきだ。

「自分が許せない」というのはいくらなんでもおかしい。ところがそうではない。

これこそまさに、ナルシシストが自己愛の権化だからなのだ。

ナルシシストは、自己愛の権化であるために、^^ちよつとでもケチのついた自分を、もう認められないVVのだ。

鉄オタの撮る鉄道写真と同じだ。

仄聞するところ、鉄オタの撮る鉄道写真というのは、構図や角度やタイミングが完璧でなくてはダメなのだそう。

そのことはよく考えると奇妙なことだ。

たとえば大好きの人が、いろんな犬の写真を撮っていたとして、その人は犬の写真について、構図や角度やタイミングが完璧でなくては「ダメ」とは考えないだろう。

犬を愛しているので、つい犬の写真をパシャパシャ撮ってしまうというだけだと思うが、鉄オタの場合はそうではない。

鉄オタは、鉄道を、何かしらの形で偏愛しているのだろう。

ちよつと、あまりに共感できない趣味なので、その偏愛がどういふものなのか、おれにはわからない。

写真に撮られる犬の横で、おれがピースサインでもしたら、写真を撮る人は「ははは」と笑うだけだろう。

鉄オタが鉄道写真を撮るところで、おれがピースサインで割り込みでもしたら、鉄オタはちよつと一般には知られていないような激怒の仕方をする。

なぜそのようになるのかは、知られていないが、とにかくそのようになる、ということはすでに一般に知られている。

やや気が引けるが、ナルシシストというのもこれに似ているところがある。

自己への偏愛と完璧主義があるのだ。

ちよつとでもケチがつくと「ダメ」。

本人にとっては激怒に値することになるのだ。

別にそれぐらい良いじゃん、と言っても、本人にとっては「もうダメ、終わった」「絶対に許せない」。

それはわれわれが、鉄オタの撮る写真に何か余計な看板でも映りこんだとして、「別にそれぐらい良いじゃん」と言うのと同じなのだ。

鉄オタにとっては「もうダメ、終わった」なのだろう。

だからナルシシストというのは、じっさいには、自分自身に対して「サイコー」とは思っておらず、「ダメ」と思っていることのほうがはるかに多い。

ちよつとでもケチがつけば「ダメ」なのに、じっさいにはケチがつくのは「ちよつと」どころではない。

先ほど会社のナルシシストおじさんは、はつきりとおれに「汚物」とまで言われてしまった。

ナルシシストなんて、万人にどこか「キツいっす」と思われているに決まっている。

じつはナルシシストの多くは、自分のことを根底でめちゃくちゃ「ダメ」と思っているのだ。

もちろん、自分のことだけがひたすらイケていると断じつづけるタイプもいるが、そちらのタイプはナルシシストというよりも、自己愛性パーソナリティ障害（自己愛性人格障害）という向きが強い。

自己愛性人格障害の人は、そこまで世の中に多くはないが、ナルシシストの人はめちゃくちゃ多い。

自己愛性人格障害の人は、本当に、自分についてのネガティブな情報は「耳に入らない」というような、特殊な偏りを示す人で、それは未発達ということではなく、人格の機能として「どこか壊れている」というようなことだ。

語弊があつて気が引けるが、障害、という診断名がついているのだから、そのように言うしかないだろう。

ナルシズムは障害ではなく未発達だ。

ナルシズムにおいては、人は自分のことを根底で「ダメ」と思っていることのほうがはるかに多い。

たとえば、学歴が大したことがない。

すると、「ダメ、終わっている」と、どこかで思っている。

外見は、美貌ではまったくない。

そのことも、「ダメ、終わっている」と思っている。

職歴や、仕事の能力も、いちおう人並みと思っているが、人並みでいどということは、たいしたことがないということであって、「ダメ、終わっている」と思っている。

これまでに、そこまで「活躍した」というようなことがない。

これまでに、あまりまともな恋愛経験がない。

友人は、いるにはいるが、きずながあるとまで言える親友がいたかという、そこまでの友人はいなかった。

趣味でテニスをやっているが、そんなに上手なわけでもない。

最近髪が薄くなってきた。

日焼けのあとに、少しシミが出て来てしまった。

自分は美声ではない。

音感はあるがリズム感がない。

派手な服が年齢的に似合わなくなってきた。

このことについては誰よりも詳しい、というような得意分野は持っていないし、何かの役に立つというような、目立つほどの特技は持っていない。

車の運転は、いちおうできるけれど、せわしない道路だと、乗り心地がどうこうということまでは、とてもじゃないが気を配れない。

海外旅行をよくしてきたので、いちおう、日常会話ぐらいの英会話はあるが、ネイティブのように「ペラペラ」ではないので、ダメだ。

ああ、ぜんぜんダメだな。

終わっている。

そのようにナルシストは思っている。

ここに、まったく別のAさんを用意してみよう。

Aさんの学歴も大したことはなく、Aさんの外見も美貌ではない。

Aさんの仕事の能力も、人並みでいどだ。

Aさんもこれまでに、目立って「活躍した」というようなことは特にない。

このAさんについて、ナルシストは、「ダメ」「終わっている」とはまったく思わない。

なぜそう思わないか。

ナルシストにとつては、Aさんのことなどどうでもいいからだ。

ナルシストにとつては、Aさんはふつうの人なのだから、万事が「ふつう」でいいでしょ、と思っている。

ところが当人についてはそうではないのだ。

ナルシストは、自己愛の権化で、自分は特別な存在だから、自分は「ふつう」ではダメなのだ。

Aさんがふつうなのは、許せるし、「当たり前」と思うが、自分はそうではない。

自分がふつうだなんて、許せない。

自分がふつうで、やっていけるわけがない。

だからもう何もやっていくことはできない。

無理なんだよね。

このように、ナルシストは、自分のことを多く「許せない」と思っているものだ。

自己卑下が、表面的には謙虚なふうにも見えるので、われわれはこのナルシストを見落としてしまう。

彼は、Aさんのことは肯定的に言い、自分自身のことは否定的に言う。それは謙虚さのあらわれではない。

自分だけは特別なんです、だから自分の場合はダメなんです、ということのあらわれであり、Aさんなんかは、「ふつうだからどうでもいいんです」ということのあらわれだ。

ナルシシストは、自己愛の権化なのに、自分のことを愛せない。

奇妙な矛盾だが、じっさいのナルシシストは、主流としてそういう性質だ。

自分の子供を偏愛する母親が、教育ママになって、テストで百点を取ってこない我が子を愛さない、愛せない、というのと同じだ。

「○○ちゃん！ ママと一緒にあんなに勉強したのに、どうして七十点しか取ってこないの？ ママびっくりしちゃう。次は、もっと出来るよね。ママ、大切な○○ちゃんのこと、とーっても応援しているからね」

自己愛といって、ナルシシストは、そもそもその「愛」という機能だけが成熟しているわけではないので、自己愛というのもまともな愛ではありえず、実態としては「自己への執着」だ。

（余談だが、おそらくキリスト教などでは愛というと「まともな愛」のことが言われており、仏教では愛というとこの偏愛・執着のことが言われている）

ナルシシストは、自己愛の権化で、さらにはその愛はまともな愛ではなく、その自己愛は自己への偏愛、自己への執着だ。

ナルシシストは、まるで自分のことを、「能力者バトルに出て来る主人公」のようでなければ愛せないと思っていたり、あるいはまるで自分のことを、「神話に出て来るヒロイン」のようでなければ認められない、と思っていたりする。

現実的にはそんなこと成り立ちようがないので、ナルシシストは自分のことを「ダメ」「終わっている」と思っている。

それでいて、そうして自分のことを「ダメ」「終わっている」と言いながら、「そんなわたしのことを完璧に愛してくれる人」を厚かましく要求しており、その愛も完璧でなくてはならないと、本気で思っている。

その愛は、完璧でないと許せない。

完璧なものなら認めるけれど、完璧なものでないならつきよく認めない。

でも、そんな人につきよく現れないんだよね。

そんな人が現れないってことは、わたしは愛されないってことで、わたしが愛されないってことは、わたしが価値がないってことだよ。『だからわたし、自分のこと、終わっていると思っているの』

そうして自己への偏愛・執着があると、それじたいがナルシシズムだから、ナルシシズムを克服するためには、奇妙なことが必要になってくる。

ナルシシストは、自分を許し、自分を認め、自分を愛さなくてはならないのだ。

自己愛の権化なのに奇妙なことだ。

そしてじっさい、ナルシシストにとっては、この「自分を許す」「自分を愛する」ということが、ものすごくキツイことなのだ。

無理、とただちに切り捨てたくなるほど、そのことはナルシシストにとって不快に満ちている。

「だってそれは、『ふつう』のわたしを許してやれてことで、『ふつう』でしかない自分を愛せてことでしょ？」

そのとおりなのだが、それはナルシシストにとっては何よりもキツく、最大に「無理」と感じられることだ。

教育ママが、七十点しか取ってこない我が子を許し、愛するということのように、それは最大に無理で、最大にキツイ。

ヨソの子なら七十点どころか五十点でもかまわないのだけれど。

若手と下請けに支配コントロールを仕掛けてキューンとなるだけの、汚物のようなおじさんは、自分がどれだけでもくだらない小物であるかというのを、じつは内心でわかっている。

そりゃ、鏡を見たらわかるし、自分の半生を振り返ればわかるのだ。

あなたもその汚物おじさんの立場になってみれば、何がいちばんキツいかが、逆に視えてくるかもしれない。

その、愚にもつかない小物を、自分として、許し、認め、愛してやれというのだ。

キツすぎるだろう。

自分は、オタクアニメの主人公のような能力と環境を持っているか、そうでなければ神話の中の登場人物というほどでなくてはならないのに、よりにもよって現実には、「汚物のような小物おじさん」たる自分を許して愛せいいのか。

^^さびしくてみじめな自分を許す・愛するなどということは、ナルシリストにとって最大にキツイVV。

それはとても可能とは思えないような、はてしなくキツイことだが、事実としてはそういうことなので、しょうがない。

本当に、そういう自分を、何であれば「ふつう以下」の自分を、許してやらないといけないし、愛してやらないといけないのだ。

ダサい言い方になるが、けっきょくそうすることですか、先には進めないのだ。

さらにダサい言い方にするなら、そうしていくことでしか、心理的な成長には向かっていけない。

あなたの実態が、あなたの価値観において、とても肯定できないものになっているということは、じゅうぶんによくあることだ。

あなたが、さまざま言い分だけは自分を肯定し、代わりに誰かを見下して、表面的には強気であるけれども、内心ではこれまで自分自身で

光り輝くようなものを得てきたわけではなく、本当にはそんな自分自身を愛せてはいないのだとしたら、それはとてもありふれたことだ。

そこで、自分が自分を許せなくて、自分が自分を認められなくて、代わりに誰かに認めてもらいたい、たくさんいいねをつけて認めてもらいたいと考え始めるような、地獄の承認欲求ルートへの思いつきはおすすめできない。

自分が愛さなくてはならないものを、キツいからといって他者操作で代替しようとするな。

ふつうあるいはそれ以下の自分だったとして、さびしくてみじめな自分だったとして、それでも愛します、とあなたが言うなら、それでも愛せるのだ。

さびしくてみじめなわたし。

何をやらせても、本物ではないわたし。

何をやらせても、そこまでは上手じゃない寒いわたし。

何をやらせても、本当に優秀とまでは言えないわたし。

何をやらせても、醜い自己防衛がただよっているわたし。

何をやらせても、下手というよりは「しんどい」わたし。

何をやらせても、けっきょくは人を頼って投げ出すわたし。

何をやらせても、すぐに人のせいにするわたし。

何をやらせても、形だけであいまいな成果しか出さないわたし。

何をやらせても、けっきょく他人の真似ばかりしているわたし。

何をやらせても、内心では自分のプライドを高くしているわたし。

何をやらせても、お茶を濁して本当の評価を避けるわたし。

何をやらせても、「馬鹿にされたくない」だけに必死なわたし。

何をやらせても、人に空気を読ませるだけのわたし。

何をやらせても、「見返してやる」としか考えていないわたし。

何をやらせても、本当の価値なんかわかっていないわたし。

何をやらせても、何者にもなれなかったみじめなわたし。

何をやらせても、きのうの決意がきょうはもう無いわたし。

何をやらせても、けっきょく成長してきていないわたし。

何をやらせても、本当には人に慕われないわたし。

何をやらせても、汚らしさが出てうつくしくないわたし。

何をやらせても、集中力が無くてすぐイライラしだすわたし。

何をやらせても、自分の陳腐さを思い知るだけのわたし。

何をやらせても、若さがなく老醜がちらついてきたわたし。

何をやらせても、やさしい自分になんかけっきょくなれないわたし。

そんな自分が、許せない、唾を吐くしかない、というのは、ナルシズムであって、誠実さではないし自分への厳しさでもない。

それは自分への厳しさではない、^^責任逃れに自分自身を「拒絶」して突き飛ばしているだけVだ。

そうではなく、自分自身に、

「そうか」

と言うのだ。

突き飛ばさない。

見るに堪えない自分を突き飛ばそうとしない。

もう六歳児じゃないんでね。

それではじめて、ナルシズムの結び目がほどけはじめる。

ナルシズムというのは、どこまでいっても佳いものではない。

ナルシズムは、何のロマンでもないし、ナルシズムには、ついに

ドラマツルギーはない。

ナルシズムは、ただの大問題でしかないのだ。

夢のないことだが、本当にそうなのでしょうがない。

ナルシズムに夢はない。理としてはまさにそうなのだけれども、ナ

ルシズムの当人、ナルシストは、そのナルシズムに究極のロマン

とドラマの核を信じている。

自分にはとめどなくあふれるテーマがあるというように感じられてい

るのだ。

その正体は、ただの自我インフレーションなのだが、そんなことを言

われても、それはとても六歳児に理解できることではない。

ナルシストはけっきょく、そのナルシズムを捨てるという選択を

採れない。

なぜならナルシストは、そのナルシズムに、いわばかけがえのな

い「ときめき」を見出し出しているからだ。

自分に秘められたときめき、自分にあふれてくるテーマ、まさかそれ

を捨てる、というような選択は採れない。

ナルシストは、そのときめきと、あふれてくるテーマ（じっさいに

はただの自我インフレーション）を、

「これが『オレ』なんだよね」

「これが『あたし』なんです」

と思っている。

全力でそのように思っている。

全力でそのように思い、思えば思うほど、そのことは思い返されてく

る。

そしてそのことを、ことばにして確かめるなどすると、ナルシスト

ナルシズム、（ ）！

はどうしても、胸の奥にキューンとくる無上の快感を覚える。

それで、その快感を原則にして挙動することしか考えられない、ということになる。

ナルシズムといって、ここまで書き話してきて、ここまで赤裸々に解き明かされるのであれば、さすがにナルシシストの当人も、ナルシズムというものについて理解する。

鼻白むことも通り過ぎ、どう考えても、そのナルシズムというものにたしかに自分のところあたりがあると、さすがにナルシシストも認めるものだ。

そしてほとんどの場合、ナルシシストは、そのナルシズムを「治したい」と考える。

治したいと考えるのだが、言葉尻はどうであっても、じつさいには追い詰められて、「なんとかしたい」「なんとかしてほしい」と思うところだ。

悪口を言っているのではない。

あなたが何かを克服しようとしていくことがあったならば、そのときに、あなたの余計な手間が減らされているように、おれが先に情報の構築をしているのだ。

ナルシシズムは、自己中心性、という語にも置き換えられる。

他者が発見されていないのだから、自分だけが絶対の中心になるのは理の必然だ。

ナルシシストが、ナルシシズムを「治したい」と思うことじたい、まずはこの自己中心性の中で生じざるを得ない。

だからナルシシストは、

「どうしたらいいでしょうか」

と訊きながら、

「なんとかしてください」

とも思っている。

ナルシシストなので、「治したい」といえば、その「治したい」がすべての中心になる。

そして、それが世界の中心事なので、世界の辺境から何か巨大なものがやってきて、自分のことを解決してくれる、というような前提を持っている。

何を言っているのか、わけがわからないと思うが、自己中心性というのはそういうものだ。

ナルシシストはいつも、

「これってどうしてくれるんですか」

と思っている。

「誰が責任取ってくれるんですか」

「誰に言えればいいですか」

と思っているのだ。

たとえば、自分が株に投資をして、大損をしたりすると、

「これって誰が責任取ってくれるの!？」

と激怒する。

わけのわからないことだが、何か世界のあちこちには、なぜか自分の問題について責任と解決を担ってくれる「何者か」がいて、そいつらに強く要求しないといけない、というような固定されたヴィジョンがあるのだ。

自分が試験勉強をして、まともな点数が取れなかったとき、ナルシシストは、

「はあ、これ、どうにかしてほしんだけど」

と発想する。

「このままいくと、マジで今年も不合格ってありえるんだけど。え、これってどうするの。どうにかしてもらわないとマジでヤバいんだけど」

どうにかしてやろう、と思うのではなく、どうにかしてほしい、と思うのだ。

ナルシシストは、ふざけた邪意があってそんな発想をしているのではなく、やはり六歳児のまま（この場合は六歳にもなっていないが）、未発達なのでそういう発想になるのだ。

じっさい、幼児のうちは、すべてのことは自分よりずっと大きい両親がなんとかしてくれるという前提でいるので、ナルシシストはそのころのまま、何か巨大なものが自分のすべてを「なんとかしてくれる」と思っているのかもしれない。

ナルシシストには自信がない。

当たり前だ、六歳児のまま数十年が経ったのに、豊かな自信が構築されてきているわけではない。

ナルシシストは、自己中心的で、そこにときめきを覚えているから、強烈な「自負」は隠し持っているが、だからといって物事に対して堅実な自信があるわけではまったくない。

自負だけが強烈にあり、自信はまるでないので、そのぶん、他人に対して強気に当たらなくてはならないという事情が、ナルシシストにはある。

腰を低くすることはできないのだ。

ペコペコしているようだったり、控えめなふうだったりとしても、真に腰を低くすることはできない。

自己中心なのだから、けっきょくは他人を見下すしかなく、けっきょくは他人を侮辱するということに行き着く。

みずからの、自負にふさわしく他人を侮辱し、みずからの、自信のなさにふさわしく他人を頼る。

だからナルシシストは、最終的に、「自分のいかなる侮辱をも受け入れしてくれる人」を探す。

何をどう考えても、そんな無価値で屈辱的なことに付き合おうとする人が存在するはずはないのだが、何しろ当人は自己中心的だ。自分にとって大切なことは、ほかの人のすべてのことより大切なことだと信じられるし、「どうしたらいいか」については、世界の辺境から不明の巨大なものがやってきて、自負にふさわしいぐらいに「どうにか」してくれるはず。

自分でどうにかしようという発想はナルシシストにはない。

（「はいはい、自分でなんとかしますよ」と、いやらしくかと思えない）この仕組みは、ナルシシスト当人にもわからず、次第に当人にとってさえ、謎の「発作」のように現れて来る。

何をどうしても、自分の口から、誰かへの「侮辱」が飛び出すのだ。

そんなつもりがあるのかないのか、もはや当人にもわからない。

そもそもナルシシストは、感情が未分化なので、自分に何が起り、どういう感情でどういう挙動をしているのかなんて、まるでわかっていない。

まったく必然性のないときにも、突如、自分の口から誰かへの「侮辱」が飛び出すのだ。

当人にとっても気持ち悪い、まるで発作のように。

「そろそろ帰り道だから後輩の○○クンを侮辱しようか」

「昼食も済んだから高校のときの同期を侮辱しようか」

「雨で洗濯物が干せなくなったから転職した△△ちゃんを侮辱しようか」

それで、さすがにこれはおかしいと自省し、そのことを自らで抑える。

すると、一週間は抑えられるが、その抑えたぶん——我慢したぶん——

は、来週に利子までつけて飛び出す。

このわけのわからないことには、おれが名前をつけておこう。

ナルシズム、発射！

おちよくったような名前で、これこそがまるで侮辱のように聞こえる

かもしれないが、本当にそれは「発射！」なので、そのように命名しておく。

すべてあなたが完全な脱出不可能に陥らないための措置だ。

あなたが、ナルシズムを「発射！」すると、なぜかあなたの内部で、「始まったー！」

というような、お祭りさわぎが起こる。

自分の内部がイケイケになるのだ。

そのときは、どうぞ自分の内部を観察してみなさい。

本当におれが言ったとおりになっているから。

あなたには自信がなかったのだ。

あなたが自分で、自信のつもりで隠し持っていたものは、じつは自信ではなく、ナルシズムによる「自負」だった。

ナルシズムのときめきから生じた、根拠のない、それはただの醸成された「自負」だ。

あなたが秘めていたその自負は、あなたの内部では強烈なものに思えたけれど、じっさいの場所（魂の呼び込みが問われる場所）で取り出してみたら、それはまるで虚弱で、本当の場所で実用に堪えるようなものではまったくなかった。

自信がゼロになり、あなたはナルシズムの古巣に帰りたくなる。

あのときめきと、秘めた自信に満ちていた古巣へ。

それで、

「ナルシズム、発射！」

自分の口から、誰かへの・何かへの侮辱が飛び出す。

あなたは、認識としては、別に誰のことも見下していないが、自負としては、周囲のほとんどの人を見下しているのだ。

あなたがするようにしようとしているのではなく、ナルシズムというのはそういうものだ。

自己中心で、それがときめきに満ちており、他者などはまったく発見されていない。

それで自分を低くして他者を敬っているわけがない。

自己中心で、自分は秘めた自負とときめきの中にあり、一方、「ふつう」の他人たちはそれとは違うものとして存在し、あなたは自然とそれを見下しているという状態が、あなたにとっては旧来からの「正常」な状態だ。

ナルシズムというのはそういうことなのだから。

不意にでも自信を失ったあなたは、「正常」な状態に戻ろうとする。

それで、ナルシズム発射！ となる。

そのことが起こったとき、あなた自身で、

（おー、今日も発射したなあ）

と黙って眺めておくのがいい。

自己客観視というのはそういうことだ。

自己客観視を積み重ねていくうち、やがてさすがに自分のことを、（いつまでも、何やってんだこいつ）

と冷静に見定めるといふことも起こってくる。

自信をおびやかされたナルシストが、ナルシストとして「正常」に戻ろうとするとき、その合図の大砲のように、それは発射される。

ウェブ上の、さまざまなレスや記入欄に、侮辱的なコメントが書き込まれているのもその「発射！」だ。

誰もその自覚はないが、ナルシストとして自信を恢復し、「正常」な状態に戻ろうとして、それらの書き込みは行われている。

ナルシストが探す、「自分をわかってくれる人」「自分を受け止めてくれる人」は、定期的にやってくるそのナルシスト砲の侮辱発射を、どこまでも受け入れてくれる人だ。

ナルシズム砲が発射されるとき、ナルシストは「正常」になり、自

信を恢復していく。

それは恢復なので、ナルシシストの体内で、

「始まった〜!」

というお祭りさわぎが起こるのだ。

自信を恢復して、自分の内部がイケイケになる。

それはけっこうな勢いなのだ。

「止まらない、マジで止まらない」と、本当にファナティク（狂信的）な、宗教的というほどの昂った顔つきをし、止まりようのない声を発する。

なにしろ、あのかけがえのない「ときめき」と共に、すべての中心という無敵の自分も取り戻されてくるのだから。

自信を恢復させようとしている。

そのために、侮辱を発射し、他人を見下しもする。

それ以外に、自分がやっていく方法はもうない。

何しろ、本当には自信はないのだから。

当人は、そんなことをしているつもりはない。

そのとおり、当人はそんなことを意図していない。

当人は自信を恢復したいだけだ。

ナルシシズムのときめきから生じる、秘めた自負、あふれつづけるテ

ーマ、それを自分の自信にしていた、あの状態に返りたいだけだ。

自信がおびやかされたときにだけ、その発射は起こるし、他人を見下すということも起こる。

仕事に自信のない営業マンが、車を運転していると、いつのまにか、周囲に毒づきながら走行しているだろう。

「チッ、さっさと進めってんだよ」

「なんだ、あんなブサイクな女連れて」

「自転車がよろよろしてんなよ、邪魔なんだよ」

「汚ったねえ定食屋だなあ、こんなところ客来ねえよ」

本人はそうして、毒づき、「発射」をしていることに、まったく気づいていないし、そんなことをしている自覚はない。

そのとおり、当人が意図していることは、「侮辱」でも「発射」でもなくひたすら「自信の恢復」だ。

ときめいて自信に満ち溢れていたあのときのボクとアタシに帰ろうとしている。

六歳児のまま営業マンをさせられているので、そこだけを見れば、自信を持ちたいということ、偽りのものでも自信を恢復したいというのは、切実なこととして理解されうることだ。

ナルシシズムを、「治したい」とは思うのだが、ナルシシズム由来の「自負」が、これまでの自信のすべてだったので、それを取り外すことはなかなかできず、ほとんどの場合は、

「お、また発射したねえ」

とならざるを得ず、元の木阿弥になってしまうものだ。

それでもじわじわやっていくしかないのだろう。

ナルシシストは、自信をまったく持つておらず、自負で生きている。

そしてナルシシストの当人はふだん、その自負と自信の違いがわかっていない。

なぜ違いがわからないか、なぜその違いに気づかないかといえば、ナルシシストは他者を発見していないからだ。

自負は、自室で寝転んでいるときには通用するが、他者に向けては通用しない。

たとえば、自室で寝転んでいるときに、「自分は人並みにコミュニケーション能力を持っている」という自負を持ったとして、その自負は自室において完全に通用する。通用するも何も、当人しかいないのだからそりゃあその自負は通用するだろう。

ナルシシストはこういうとき、自負に浸る「ひとりの時間」で、自分にけっこうなときめきを感じている。

けれども、自負がどのようなであれ、じつさいに街中でショートパンツのギャル四人組と対面したとき、あるいは職場であたらしい案件について上司にメールするとき、はたまた友人のイベントで初対面の人たちが来客したとき、自室で寝転がって醸成したその自負というものは通用しない。

コミュニケーション能力に自信があるかどうかは、そのとき目の間にしているギャル四人組に向けての自信の有無、ということと問われる。

まさかギャル四人組を相手に、自分が「魂を呼び込む」か。

そんなことはなかなか出来ることではないだろう。

このとき、派手なギャル四人組を目の前になると、内心で、

(何なのこいつら、人としてまともじゃないでしょ。こんな連中に話通じないわ)

という思いが湧くことがある。

そして、予想したとおり、コミュニケーションは捗(はかど)らず、双方ともギクシャクして、向こうからはなんとなく、

「ダルっ」

というような表情をされた。

あなたは帰り道、車の運転をして国道を走行する。

明日は友人のイベントがあり、出席する予定だが、会場には自分の知らない人たちがたくさん来るらしい。

するとあなたは車を運転しながら、何とはなく、

「うわここ、小さい店なのに、駐車場ばっかり広いなあ!」

通りすがりの風景に、侮辱を吐き捨てる。

あなたにその自覚はない。

発射だ。

とつぜんどうしたのだ、なぜいきなり何でもない景色に「発射」したのか。

発射した当人は勢いついて、気色ばみ、止まらない、という様子だ。

何の発作か、何が起こっているのか。

これは、自負と自信の食い違いに「発射」が起こっているのだ。

あなたはコミュニケーション能力に一定の「自負」があつた。

けれどもショートパンツのギャル四人組を目の前にしたとき、あなたがじつさいに体験したのは「自信」がないということだった。

自負と自信が分化されていたら、「自負と自信は違うでしょ」というだけのことで、何も混乱することではないが、自負と自信が未分化なので、あなたは混乱する。

コミュニケーション能力に自負があるのに、コミュニケーション能力に自信がないという思いをさせられるのは、矛盾していてヘンだ。

ヘンというのは、何が原因か。

ヘンといつても、自分は何もおかしくないのだから、自分とは違う何かヘンなのだ。

自分は正しくて、世界が正しくない。

となると、コミュニケーションするとはいっても、ギャルの四人組という連中がヘンなのだ。

それで、

「人としてまともじゃないでしょ」

そのようにあなたには見える。

たとえば、魚をさばく技術に自負があるのに、目の前の魚をさばける気がしないのであれば、それは目の前の魚がヘンだ、ということになる。

「何この魚、ヘンなの。これまともにさばける魚じゃないでしょ」

車の運転技術に自負があるのに、乗っている車がフラついて制御できないなら、それは乗っている車がヘンだということになる。

「この車おかしいよ、壊れていて無理」

PCの知識に自負があるのに、PCがおかしな挙動をするなら、PCがヘンということになるし、書道に自負があるのに、下手な字が書かれたならば、筆や半紙がヘンということになるだろう。

「何このPC、ウイルス入ってない？」

「あー、たぶんこの筆はなんかダメなやつだわ」

自分が正しくて世界がヘンなんです、ということになる。それであなたにとっては、ギャルの四人組が「ヘン」ということになるのだ。

「何なのこいつら、人としてまともじゃないでしょ」

あなたは帰り道、明日のイベントのことを思い出した。

友人のイベントで、知らない人たちもたくさん来るらしい。

コミュニケーション能力にかかわる機会になるのは必然だ。

あなたはコミュニケーション能力について、自負があるが、先ほどギャル四人組に、自信がないという思いをさせられたため、未分化のまま不安が惹起される。

自信（本当はただの自負）はある、のに、不安が起る。

未分化の感情には、強く振り回されるので、あなたは感情的に強くネガティブなストレスを覚える。

自信（本当はただの自負）があるのに不安にさせられるのはヘンだ。

ということは、世界の何かがヘンなのだ。

あなたはそのことについてボヤきたい。

「うわここ、小さい店なのに、駐車場ばかり広いなあ！」

正しい自分が、世界がヘンであることを指摘する。

すると、先ほどの不安ストレスが和らぐ。

ときめきが少し取り戻されて、止まらない。

帰宅して、知人に電話し、

「そういえばさ、二年前に○○くんが取引先でトチったこと！ あれってじつに○○くんらしくて、いまでも忘れられないよね」

すべての中心たる自分が取り戻され、自信と混同される自負にときめきが取り戻され、「やっていける」という気がしてくる。

現実的には、しょっちゅう不安にさせられる。

要するに、明日のこと、来週のこと、来月までのことが、ちゃんとやるか不安なのだ。

そこで、発射すると「やっていける」という気がして止まらない。

こんな複雑なことが、未分化の六歳児にわかるわけがない。

それに、実情として、人は「発射」しながらでも何でも、破綻しないように生きていかなくてはならないのだ。

「やっていける気がしない」と、不安に押し潰されて、夜眠れなくなり、追い詰められるというわけにもいかない。

方法論を抜きにして、自信を獲得できたら、この「発射」は消える。

自信を獲得できたら、ときめきは自己中心性のもではなくなってゆき、ギャル四人組と当たり前にコミュニケーションすることができるようになり、それでいて「いや、たいしたことはできないけど」と、自負は薄まっていく。

理解はできるけれども（ ）が勝つ

ナルシシストは、幼児だ。

大人ぶっているし、シニカルな、老練ふうや円熟ふうを演出してくる

けれど、本質が幼児だ。

加齢すると、テクニクがついてくるし、ややこしさが増してくるのだけれど、それはやはり、テクニクを身につけた幼児でしかない。

幼児というのは、その人らしさではなく、単に「大人になることができなかった」だけ。

ナルシズムというのは、性質ではなく「結果」だ。

建築資材を置いておけば、勝手に家が建つというわけではないし、土木用具を置いておけば、勝手に整地されるというわけでもない。

何十年経っても、その土地はその土地のままだった。

雑草が生え、根が入り込み、ねずみや外来種が棲みついてややこしくなったが、それは厄介ものになっていったというだけで、何かが成り立っていったということではない。

幼児のまま、「大人になることはできなかった」という、結果なので、それは「どういう人」と描写することさえしにくい。

どういう人にもなっていない、ただの厄介もの、としか表現できない。

ナルシストは、そんな自分を、本心では恥じているが、さらに本心では、何もかもが「よくわかっていない」。

幼児のままなので、本当に「よくわかっていない」のだ。

幼児が、たとえば「大政奉還」と「王政復古の大号令」について話し合っただけで、本当にはよくわかっていないだろう。

あたかも、何かがわかっているように、見せかける、そう振る舞うという、偽装のテクニクは身につけているのだが、本当には主題じたいがよくわかっていないのだ。

徳川幕府が朝廷に將軍職を返上した、と、教科書に記されてあったことを丸暗記していても、まず「幕府」が何なのかよくわかっていないし、「朝廷」が何なのかよくわかっていないし、「將軍職」がよくわかっていない。

碓シンジ君が初号機に乗って「うわああ」とイヤがり、神経の弱い

同士に情を誘う、というような、本質的にストーリーを喪失したものに

ついて、自分が覚える「印象」、というようなことしかわかっていない。

幕府というと、幕府っ「ぽい」もののヤバみしかわかっておらず、朝廷

というと、何かそれっ「ぽい」もののヤバみしかわかっていない。

初号機っぽいもののヤバみ、使徒っぽいもののヤバみ、ネルフっぽい

もののヤバみしかわかっておらず、それが何の話なのかという、主題じ

たいがわかっていないのだ。

だから、新世紀エヴァンゲリオンには、物語としての主題がない。

作る側も、観る側も、主題はよくわからない同士で、何かヤバみのフ

レーバーを嗅ぎ合い、その印象を「ヤバイ」と言い合っているのだ。

ヤバみを嗅ぎ合ってきた、印象キャッチへの「自負」だけが肥大し、そ

れはどういう話かと訊かれると、「よくわからない」のだ。

「主題」は、大人にしかわからない。

「主題」は、その魂が呼び込まれるかどうかということだから、幼児に

はわからないし、幼児には取り扱えない。

ナルシストには、そのことがずっとストレスで、そのぶん、自分の

「わかる」ことについては火がついたようになる。

先に述べたように、ナルシストは、自分の強烈に「わかる」ことに閉

じ込められているのだ。

だから、ストレスと発射が呼応し、逆に、

「え！ キミわっかんないの？」

という表現が出る。

ふだん、これまでもう何十年も、心理的成長を得てきた人たちだけが

取り扱う「主題」の話について、「よくわからない」でいて、わかって

いるふうに振る舞うという偽装のテクニクだけを駆使してきているの

だが、そのことじたい恥ずかしいし、当たり前だが苦痛なのだ。

みんなでスケートリンクに来たけれど、自分だけスケート靴を履いてはおらず、ふつうの靴で氷上を「滑走しているふり」をしつづけているというような苦痛だ。

本当にはスケートなんかしていない。

それと同じように、本当には主題なんか「わかっていない」。

スケート靴の存在を未だ知らないまま、スケートしているふりをつづけているのだ。

大阪の道路に、府道30号線というのがある。

ところが、この府道30号線を、地元の人「13号」と呼ぶ。

え、なぜ？

わけのわからない話だ。

歴史的に由来があり、かつてその道路は、道路幅から「十三間（じゅうさんげん）道路」と呼ばれていたそう。

だから地元の人、それを13号と呼ぶし、むしろ13号としか呼ばない。

「府道30号線を……」

「はあ？ どこそれ」

本当にこういう調子だ。

行政の冊子にさえ「13号」と書いてある。

（二〇二五年現在にはわからないけれど、二〇一五年ごろまでは確実にそう）

もちろん、国土交通省が定めるところの「府道13号」は別に存在している。

守口市から京都への接続に、府道13号が存在する。

だから仮に、地元ではない人に、

「13号線沿いのファミレスで待ち合わせしよう」

と連絡すると、その人はとうぜん守口市に行くわけだ。

それでは待ち合わせが成り立たない。

ここで待ち合わせが成り立たなかったとき、どのようになるかという

と、

「あんなあ、13号言うたら、ここのことやろ」

となる。

地図には30号線と書いてある。

「せやけどふつう、13号言うたらここのことや」

そんなの知らない、知るわけがないと言うと、

「え！ 知らんの！？」

となる。

知らんに決まっている。

カリフォルニアから来た旅客が地図を見て、30と書いてあるのをサ

ーティーンと自動的に読み替えるなどということがあ

るわけがない。

けれども、人は、

「え！ 知らんの！？」

と、そのことに驚き、人を嘲笑し、人を侮辱する。

「自分、常識ないな」

ここでひとつの、音楽CDでも再生してみよう。

「この曲、知っている？」

「こんな外国の歌なんか知らん」

「ビートルズの、エリナー・リグビーだよ」

「そんなん知らん。知るわけないやろ。そんなんは、知っている人だけ

が知っているもんや」

世界全体で見たらとうぜん、「13号」より「エリナー・リグビー」を知っている人のほうがはるかに多い。

けれどもそれは、彼の「常識」には当てはまらない。

信じがたいことだが、本当に彼は、「自分に見えているものしか見えて

いない」のだ。

「サリーとアン」の課題に示されているように（※ググってください）、彼は、本当に自分の指定した「13号」が、たとえばブルガリアの体操選手の少年にだって伝わると思っている。

13号といえば「ふつう、このこと」だから。

一方、ニーヨンロクといえば、東京で城南のほうへ走っているあの道路のことだ。

城南、つまり、目黒区世田谷区品川区大田区だが、ここに住んでいる人で246を知らない人は存在しない。

「うち、玉川通り沿いだから、246をずっと来てもらって……」

「その、ニーヨンロクから、玉川通りへはどう曲がったらええんや」

「え？ 玉川通りだから246じゃない」

「国道246号からの交差点を曲がればええんや」

「え、ひょっとして知らないの？ 玉川通りって246のことじゃん笑」

「そんなん知らんわ」

「そんなこと言われても、そんなのフツー誰でも知っているし」

「それに、いま246号走つとるけど、青山通りって書いてあって、玉川通りっていうのは無いで」

「それは……あー、なんて言ったらいいのかな。渋谷のあたりを超えたら玉川通りになるの。だから246をまっすぐ来たらそれでいいの笑。そんなの知らない人って本当にいるんだ」

どうしても鼻で笑ってしまう。

東城南ニーヨンロクと、大阪阪南13号の戦いだ。

「映画の中で、戦車に隠れてマシンガン撃っていた」

「は？ そんなシーンなかったでしょ……ああ、ひょっとしてあれか、自走砲を遮蔽にしてアサルトライフル撃っていたシーンのことを言っているの？ 笑」

どうしても鼻で笑ってしまう。

このような場合、彼は、戦車と自走砲は分化できており、マシンガンとアサルトライフルは分化できているのだが、自分と他者が分化できていないのだ。

鼻で笑われるのはどちらであるべきか。

「このスピーカー、スイッチはどこですか」

「は？ スピーカーは本来バッシブなもので、スイッチなんかついていないですけど。ひょっとして、アクティブスピーカーのアンブ部のことをおっしゃってる？ 笑」

「これはどういうウイスキーですか？」

「は？ そっちの棚はもうブランデーだけど。そんなの見たらわかるじゃん。ここからここまでがバーボン、ここからここまでスコッチで、こっちから向こうの棚はブランデーだよ笑」

「そのサンダル、色がきれいでかわいいね」

「え？ あ、ありがとうございます（このミュールのこと言ってるのかな？ さすがおじさん、わかっている笑）」

たとえば、ついうっかりということも含むと思うが、たまに、お寺で賽銭をして合掌するのに誤って手をパンパン叩いてしまう人がいる。つまり神社でする柏手をやってしまう人がいる。

ナルシシストは、他人のそれを見ると、どうしても「発射」が止まらない。

「いやいや！ お寺で柏手は打たんやろ笑！ キミほんと常識ないなあ、さっきからあそこでお坊さんがあんなにお経唱えてらっしゃるのに、キミにはここが神社に見えるのか？」

ナルシシストは、ふだんの自分が、あるべき主題を「わからない」ままで生きているので、他人の「わからない」が大好きなのだ。

「え、キミって、そういうことわからないんだ！？」

大好き、大好き、止まらない。

そうして人を侮辱し、嘲笑しているあいだは、あたかも自分が「わかつている」側でいられるから。

ここではひとつ、くだらない教訓として、ナルシシストの立つ瀬をなくしてみよう。

「それで言ったら、さっきからお坊さんがお勤めしているのは偈頌（げじゆ）であってお経ではないぞ。そんなの聞いてりゃわかるだろ、句になつていて節（ふし）がついてんだから偈頌だよ。恥ずかしいから大声を出さないでくれ」

先ほど述べたように、ナルシシズムというのは、平常時にはあまり露出しない。

ナルシシズムは「ちょっとしたとき」に露出する（「発射」の発作を除く）。

あなたが、ふと、こんなことを思い出した。

「わたしやっぱり、あのときのあれのこと、許せない」

あなたの内部で、精神は曇り、底深い憤怒に満たされていく。

そこに、待ち合わせしていたとおりに知人がやってきた。

しばらくやりとりをして、知人は何か不穏の気配を察し、

「なんか、具合悪いことあった？」

と言う。

あなたはそれについて、

「お察しのとおりで」

とは言わないし、そのようには思わない。

あなたはため息をつき、

「ハー。いや。わかつてくれないなら、もういいんだけど」

「なに、どうということ」

「もういいって」

「そんなこと言われても……」

「うーん。面倒くさいなあ。あのさ、見ていてわかんない？」

「いや、そんなこと言われても、わかんないっていうか、見当もつかないよ」

「ハー。あのさ。わたしは、やっぱりあのときのこと思い返してね。やっぱり許せないって思っているの」

「はあ……」

「こんなこと、いちいち言わせないで。言われるわたしの身にもなつてよ」

「その、あのときのことって、どのときのことを言っているの？」

「え！？ ひよつとして、それさえわからないの？ もしそうだとしたら、マジでありえないぐらい許せないんだけど」

「そんなこと言われたって、わからないのはわからないよ」

「うわ、マジ最悪」

平常時には露出しない。

ちょっとしたときには、ナルシシストという本質が露出する。

あなたは、自分が「13号」と言って向こうが「わからない」と答える

と、心底からおどろき、軽蔑するのだ。

こんなにわかりやすく言っているのに、わからないとかマジありえないから。

どういつもこいつも、頭おかしいよ、と、あなたは本気で思っている。

「正直、○○ちゃんは、それぐらいすぐわかつてくれると思っていた。

だから、本気でショック。もう何も信じられないかもしれない」

あなたは、そのショックの中、「本当にわかつてくれる人」を夢想する。

「わかつてくれる人」、ただそれだけ、ただそれだけの人と過ごすことができたなら、そのときわたしはなんと無垢の、自然体でいられるだろう。

あなたはその夢想にときめきを覚え、こころあるものについて確信を

深め、そのぶん、そうではない目の前のものに軽蔑と憎悪をたしかめて
うなづく。

あなたは内心で、

(ハー。さしあたり、「我慢」するしかないか)

と思うのだった。

取引先のA社は、何かと口うるさい。

口うるさいので、資料を送ったり、電話でやりとりしたりするとき
は、前もっていつも憂鬱だ。

あなたはそのA社向けの資料を作成している。

ちよつとしたときにナルシズムが露出する。

同僚が、

「飲み物買ってきますけど、何か要りますか」

と声をかける。

あなたは、ハーとため息をつき、鼻でせせら笑い、

「要らない」

と冷淡な声で言う。

あなたはやがて耐えきれなくなり、こう発射する。

「あのさ、いま、神経使う作業しているの。見ていてわからない？」

わかるわけがない。

A社向け資料とB社向け資料、作成している姿はまったく同じだ。

A社向けのそれを作成するときは、前もって気分が憂鬱になるという
のは、あなた個人の心境であって、そんなものに他者が帯同できるわけ
がない。

しかしナルシストは、他者を発見していないので、自分が見えてい
るものは、他人にも同じように見えていると思っている。

自分に「13号」と見えていれば、他人にも「13号」と見えているは
ずなのだ。

「神経使う作業をしているとき、話しかけられたら迷惑だし、ミスにつ
ながるからやめてほしいのよね。あと、さっきわたし、ペットボトルで
紅茶飲んでいたじゃない。だから飲み物はきつと要らないだろうって、
想像つかない？」

あなたは、自分がペットボトルの紅茶を飲んでいたということを、ほ
かのすべての人も「知っているはずでしょ」と思っているのだ。

他者を発見していないというのはそういう状態だ。

もちろん、

「お前がペットボトルの紅茶飲んでいたところなんか、誰も注目してな
いわ」

と言われたら、そのことは理解できる。

理解はできるけれども違和感があるのだ。

理解はできるけれども違和感が勝つ。

いや、まあ、うん、言っていることはわかるよ。

が、

「いやいや、フツ、わかるでしょ……」

そう思えて、嘲笑と侮辱が発射される。

自分が神経を使う作業をしていること。A社向けの仕事は憂鬱でナイ
ーブだということ。さっき紅茶を飲んだのもう飲み物は要らないとい
うこと。

そんなこと、いちいち他人からはわからないでしょということは、あ
くまであなたの、平常時の認識でしかない。
ちよつとしたときにはもう認識が変わる。

「フツ、わかるでしょ笑」

その認識と、他人への侮辱にこそ、ときめきと快感がある。

ああ、しんどいなあ。またこうやって、我慢しないといけないのか。
わたしのやっていること、思っていることが、他者からはわからない

ということが、理解はできても、違和感がある。

けつきよくはその違和感が勝つので、問答を差し挟んで時間稼ぎをすることには意味がない。

神経を使う作業をしているとき、話しかけないでほしいし、飲み物を飲み終わったところに、飲み物要りますかなんて聞いてこないでほしい。

「そんな当たり前の要求さえ、わかってもらえないってことですか笑」ナルシシストはけつきよくそのように感想して、他人の愚劣ぶりを嘆く。

理解が勝つのは平常時のみ。

ちよつとしたときには違和感の側が完全勝利する。

ナルシシストは、自分のことが他人にはわからないということに違和感があり、自分のことが他人に重要に注目されていないということに、ずつと違和感があるのだ。

だから、「ちよつとしたとき」にはもう、

「ハー。ありえない」

となる。

あなたは「ちよつとしたとき」のことについて、いつもの結論として、

「ピンと来ない」

「しっくり来ない」

というふたつを言う。

ニヤニヤして、あなたはそれを言う。

追い詰められたときもそれを言う。

駅前で理解が勝っても、交差点を曲がるころには違和感が勝っている。やっぱり、「わたしの思っていることが、他人にわからない」ということには、軽蔑すべき違和感しか湧いてこない。

そんなあなたに、何の準備もなく、

「あなたがいまやっていることの主題は何」

と訊くと、あなたはとっさに答えられない。

あなたは、

「主題？ A社向けの資料を作っているんですけど。そういう仕事をしているんですけど」

としか答えられない。

A社向けの資料を作っているのはあなたただだ。

あなただけ、だ。

しかし、あなたは正味、自分のやっていることが「主題」だと思っている。

自分限定のそれを「主題」だと思っているので、その「主題」が他人からはわからないということに、あなたとしては違和感があるのだ。

あなたは、

「13号が、地図には府道30号と書かれている」

と思っている。

本来はそうではない。

「府道30号が、ローカルには13号と呼ばれている」

のだ。

主題としては、13号は「存在しない」というのが前提だ。

しかしナルシシストには、13号が「存在しない」というそのことが、どこまでも違和感でしかない。

あなたにはピンと来ないし、しっくり来ない。

鼻で笑い、

「いや、まったくピンと来ないですね」

と言う。

あなたは、13号が「わからない」人を嘲笑し、快感を得る。

快感と共に、自分をそのとき「わかっている人」とし、自分がいつまでも主題について「よくわからない」幼児でいるということの、ストレス

と奥深い恐怖から自分を守りつづけている。

創作において、意識を（ ）させない、（ ）

もさせない

平常時、ナルシズムというのは露出しにくい。

だから、平常時、自分の本質が幼稚で、六歳児でいどのままという、致命的な実情は、ありていに言って「バレない」。

ふつうの陽キャ、ふつうの絡みやすい奴、ふつうの社会人、というふうに、自分を偽装してゆける。

あるいは偽装ではなく、そのことまで含めてこそがふつうの社会人なのかもしれないけれども。

とはいえ、

本当に実物を問われたらバレる。

本当に実演を見られたらバレる。

本当に実作を手がけたらバレる。

だからこそ、そのようにするのがいい。

作品あるいは作品性と呼ぶうるものに、みずからを踏み出させるのがいい。

作品というものは、ほとんどの場合、他者に展示する・手渡すといったことを前提にする。

ナルシズムのまましていると、他者が発見されていないので、まずそ

の「他者」に展示する、「他者」に手渡すという時点で、当人の意識が混濁する。

だからほとんどの場合、人は、何かを「やってみた」ということに留め、ツイッター(X)やウェブのコメント欄などで「つぶやく」ということに留めるわけだ。

そこに留めておくなら、意識は混濁しないし、自分が六歳児ということもバレない。

「作品」として提出するとバレる。

あるいは、バレないためには、作品のふうに見せかけ、すべてを「思わせぶり」ということに留めるという方法もある。

色彩をほどこし、微妙な表情を浮かべ、何とも言えない BGM を添える。

すると、何もかもは思わせぶりになり、そうして思わせぶりということに留めておけば、すべてについてを、

「さて、どうでしょう」

とし、本質をくらすことができる。

「ま、センスの問題じゃない？」

さらには、もっと単純に、「価値」を押し出すこともできる。

人が、黄金で装飾されたロココ調のベッドで寝ているところを、高級なレンズで撮影すれば、人は映し出されているものの金銭的価値に反応し、注目する。

加えて、スケベな恰好をした女性を並べておくだけでもいい。

先輩の家に、何かしらの豪華なトロフィーが並んでいたら、それは作品ではないが、パツと目を惹かれる。

その中央に立ち、「これがオレなんだよね」と言われると、その「価値」によって、あたかも実物が成り立っているかのように錯覚される。

しかしこれらのことはすべてナルシストでも可能なことだ。

ナルシシストの女性を、半裸にし、ダイヤモンドとサファイアの装飾をつけさせ、サハラ砂漠に立たせ、高級なレンズで撮影すれば、そこに示される金銭的・経済的価値は、彼女がナルシシストだということに何ら関係がない。

近いうち、誰でも「世界とわたし」という写真集を、生成AIでワンタッチ作成できるという時代が来るだろう。

いま現在でも、ヒマ人がちよつと手を掛ければ作成可能だ。

けれども、馬鹿馬鹿しいことなので、本当にワンタッチの時代が来るまでは、そんなヒマな行為は流行まではしないだろう。

生成AIでワンタッチ出力されるきらびやかな「あなた」に比べて、あなたがあなたで出力しようとする「あなた」は、まるで貧相で、成り立っておらず、見るに堪えないものだ。

俳句のひとつだって、「作品」として他者に向けるということは、あなたにとって「よくわからない」ことだ。

575で構成し、季語を含ませるということは、常識的に知られているから、あなたにもわかる。

それをツイッター(X)等書きつづけていれば、たしかにそのうち十や二十の「いいね」はもらえるだろう。

けれども、あなたがその自作俳句を集めた冊子を発行して、それを誰かが買いに来る・その冊子が大切にされるといふのはかなり遠い道筋の話になるし、あなたがウェブサーバーを借りて、あなたの俳句のページを作ったとして、それをわざわざ読みに来る人といふのはまずないと見込まねばならない。

ツイッター(X)の場合に「いいね」がつくのは、単にツイートが他人のタイムラインに割り込むからにすぎない。

他人のアカウントのタイムラインを侵略する機能があるので、ふと目に触れて「いいね」をつけてもらえるだけだ。

おれがもし、自作俳句のウェブページを立ち上げ、それを「作品」として見てもらおうと考えるなら、

「まず、数が必要だから、365日ぶん俳句を詠み、それを初期の状態としよう」

と考える。

おれは何を考えているのか。

実作を問われたら、「これが実作です」と展示できるということ、それだけを考えている。

実物と言われたら「これです」、実演と言われたら「このようです」と、示せるということ、それだけを考えている。

作品および作品性について考えることの第一は何か。

それは、他者にとっては「要らない」ということだ。

それは当たり前のことであって、わざわざ冷淡な気分になるようなことではない。

おれの詠んだ俳句が誰かにとって「要る」ということはまずない。

もし、それが誰か(身内でない誰か)にとって「要る」ということになれば、それはすさまじいことだ。

それはよほどの魂を呼び込んでいるということになる。

おれが詠んだ俳句なんて、何の娯楽性もないのだから、他者にとっては「要らない」に決まっている。

それに比べて、たとえばパチンコには、派手な音とヴィジュアルがあり、それで個々のお金が増えたり減ったりするという生々しいスリルの娯楽性がある。

だから、世の中にパチンコを「要る」とする人は多い。

それほど、おれの俳句が「要る」とされることはまずない。

その当たり前のことの中で、例外中の例外になるのが、本当の意味で「作品」ということになる。

きれいな女の子をはべらせてお酒を飲み、胸元をチラチラ覗き込んで「やーだ」と言われてデヘへするということより、お前が唄う何かの節のほうが「要る」んだよというようなことは、宇宙の法則として「ない」というのが原則だ。

ただその原則にも例外があるということ。

仮に、おれが大金持ちだったとして、おれがあなたに五つ星ホテルのロイヤルスイート宿泊をオゴるとする。

そのことと比較して、おれの書いた短編小説のひとつのほうがあなたにとって「要らない」とされるなら、おれは即刻小説家を辞める。

あなたはそんなことを言わないはずだ。

五つ星のロイヤルスイートに泊まるより、おれの書いた短編小説のほうが、あなたにとってはなぜか「要る」だろう。

これはじつはおどろくべきことなのだ。

あなたは、おれに五つ星ホテルの宿泊をオゴられるより、一本の短編小説を書いてもらう・読ませてもらうことのほうを「要る」と感じている。

なぜ？

そんなことは、通常ありえない。

宇宙の法則としてありえない。

だから、宇宙の法則が曲がっていると言っている。

魂を呼び込んでいる。

それなら宇宙の法則も曲がっておかしくない。

魂が呼び込まれるということなら、それはたしかに、五つ星ホテルに泊まるというような無意味なことをしている場合ではないのだ。

実作・実物が問われるというのはそういうことだ。

五つ星ホテルのロイヤルスイートに無料で泊まれるという「現実」に對抗できる「実物」でなくてはならないということ。

あなたは、あなたの母親が、十万円をのおこづかいをくれるか、それとも習っている浪曲をひとつ唄ってくれるかという選択肢があったとき、いちおうは、「じゃあ浪曲のほうで」と、苦笑して言うかもしれない。

でもそれはあなたが身内だからであって、他者の場合はそうではない。十万円あげます、と言え、たくさんの人が寄ってきて、「ウソです、浪曲を唄ってさしあげます」と言え、「なあんだ」「詐欺師め」と言っているすべての人は去っていつてしまうだろう。

他者としては当たり前だ。

中には、ある種のやさしきで、そのおばさんの唄う浪曲を、数分ぐらい聴いてやろうとする人もいるだろうが、おれの場合、そういうやさしさをあげたいと縋（すが）るものではない。

おれの書き話しがつまらなければ、すべての人は即刻去るべきだ。

まあ、どうせおれの場合はそうならないしな。

おれはそうして、宇宙の法則が曲がるのが好きだ。

娯楽性はないのに「面白い」、認識も観測もできない魂の体験があるという一点で、何の「価値」もないこの白黒の、平板なテキストが読み切れようとしている。

「価値」としてはまったく「どうでもいい」もののはずが、ただならぬの

めり込んで読まれている。

身内でもなければ、知り合いでもない、赤の他人の、社会的身分さえ

担保されていない書き話しなのに。

認識はスッ飛んでいる。

そこに作品が「ある」のかどうかさえよくわからない。

作品とはそういうものだ。

自分が「他者」をどこまで捉えられているか、そして「他者」と共にどこまでのアプローチ方法を持っているか。

そのことは、ささやかでも「作品」ということで如実にあらわれてく

る。

「他者」を捉えられていないと、他者に展示する前提の「作品」ということに向き合った時点で、いきなり閉塞している混乱に陥る。

作品にアプローチするといつて、何の自覚もなしに、ナルシスティックなアプローチ方法が自分から出てくる。

たいてい、

「わっかんないんですけど」

「ぜんぜん、さっぱりわかりません」

という言い方が出てくる。

しかもその言い方は、どこことなく、強く威張っている。

「作品」が、さっぱりわからないということは本当はないのだ。

なぜなら、「ローマの休日」と言つて、そういう映画を知らないではないし、観たことがある。

古池や かわず飛び込む 水の音、というのを知っている。

たくさんさんの歌を聴き、何なら自分のプレイリストまで作成している。

ほとんどの人は、自分の読んできたマンガからおすすめの三作ピックアップすることができるといふ。

「作品」がさっぱりわからないということはない。

タスマニアの草原をうろちよろしているウォンバットなら、自分のプレイリストなんてものは作成していないので、作品というのが「よくわからない」というのもわかるが、あなたはタスマニアのウォンバットではない。

「他者」を発見していれば、必ず「主題」の有無を目撃しているはずで、「主題」を目撃しているならば、「作品」ということはまったくわからないではないはずだ。

ウソをついてはいけない。

あなたはこどものころ、一度や二度は、自作のマンガを描こうとして

みたり、自作の小説を書こうとしてみたりしたはずだ。

手帳に自作のポエムがあつたりしたはずだ。

それを、他者に展示するという前提にすると、意識がぐわーんと混濁するというだけだ。

あなたは、自分の「作品」ということに向き合おうとすると、それがとてもささやかなものであつたとしても、

「さっぱりわかりません」

と言つて、ピンチになる。

あなたは追い詰められるのだ。

何に追い詰められるのか。

他者に展示されるということにだ。

自分が茶碗を作り、自宅ですべてを使うというだけなら、それはただの趣味であつて、あなたは追い詰められない。

そうではなく、あなたがこれまでに受け取ってきた誰かの作品のように、自分の作品も展示され、誰かに受け取られるということになると、そのことに追い詰められるのだ。

作品といつて、何もわかりやすいそうした「作品」だけでなくよい。

作品性に及ぶものはすべてだ。

たとえば誰かが、あなたにとっても気分のよいあいさつをしてくれた。

あるいは誰かが、あなたにわかりやすい説明をして、教えてくれた先に進ませてくれた。

はたまた誰かが、あなたに気の利いたジョークをいい、あなたをバツと笑わせてくれた。

誰かが、魂を呼び込むという、実物・実演をあなたに示してくれたのだ。

あなたが六歳児なら、それらについて、「すごいなあ」と見上げるだけでいい。

でもこれを読んでいるあなたの実年齢は、おそらく六歳ではない。

あなたは、すでに六歳ではない自分が、くぐもって自分の社会生活だけを冷淡にこなし、

「誰にも迷惑かけていないですけど？」

と悪態をつくという、そのようなことでは、本当には何も成り立っていないのだということを、奥底ではわかっているのだ。

あなたがかつて見上げた「あの人」は、そんな歪んだ六歳児ではなかったのだから。

おれがいま話していることは、とてもわかりやすいと思うが、あなたはおそらくこれを「わかりやすい」とは体験せず、「追い詰められる」と体感する。

ナルシストにとっては、自分の見ているものだけが主題だからだ。

「追い詰められるんすよね」

そのことが主題になり、おれの書き話していることは主題にならない。だからこそ、自分が自分の作品を手がけることになったときは、それがどれだけさやかなものでも、閉塞した混乱に陥る。

「追い詰められた」とか「スカッとした」とか、「参考になった」とか「考えさせられた」とか、これまで自分の感想だけを主題にしてきたからだ。

たとえば、仮にアニメ映画「天空の城ラピュタ」が、とうぜんひとつの冒険譚として体験されていたら、「血沸き肉躍る冒険活劇」という作品への手がかりはゼロではないはずだ。

そこで、「胸がキューンとなった」という感想しか抱えてこなかった人は、いざ自分の作品ということになると、シャレにならない閉塞・混乱に陥る。

キューン、ナルシスティックな快感、ナルシスティックなときめき、それらから得られる強い「自負」。

それらはどうぜん、「他者」を前提にしていない。

(ナルシズムのものだから、他者は発見されてもいない)

だから、それらの快感・ときめき・自負をもとに、他者に展示する前提の作品を手がけようとすると、

「何をどうしたらいいか、さっぱりわからない」

となるのだ。

自分を、規模としてささやかなものでいいので、作品のほうへ踏み出させるのがいい。

そして、下手くそでもいいので、「他者」に通じる作品を示せ。

作品といって、時代に冠絶したきらびやかな才能を示せということではない。

まずは他者に、

「なるほどねえ」

と言わせればいいだけだ。

他人を侵略せず、言うことをきかせようとせず、よその何かをパクリもせず、「なるほどねえ」と言わせることは、それだけでなかなかむづかしい。

多くは、何かしらを主張して、

「ね、わかるでしょ？」

と、言うことをきかせ、支配・コントロールを仕掛けるといふことしかできないものだ。

他者に展示し、他者に手渡すという前提において、作品に踏み出すというのはそれだけで「いい」ことだ。

もちろん、そうは言っても、けっきょくテクニクを身につけた六歳児ということを脱せず、単にエッチな女の子のイラストを描いて終わりとか、世の中の嫌味に共感を呼ぶマンガやコメントを発して終わりとか、そういうこともよくある。

その場合は、それを自分の魂の作品として「よいか」と訊かれると、当

人が「いやです」と否定することになるだけだ。

自分で否定するならそれはとうぜん「作品」ではなかったのだろう。作品に踏み出すといって、第一の前提は、自分が他者にとって「要らない」ということに立つこと。そこに^^平然とVV立てるようになること。それだけで、自分のナルシズムに対する決定的なアンチテーゼになる。

ナルシズムにおいて、「わたし」は自分にとって最重要のものだ。けれども、自分にとってそう思っていることが、他者からはそうは思えていない。

当たり前だ。

そのことに平然と立ち、意識を混濁させず、意識を硬直もさせない。

冷淡にもならない。

冷淡とか、そういう……

おれはそこで、「あのなあ」と髪を掻きむしり、

「要らないおれの気魄を甘くみるんじゃねえぞ」

とうそぶくことにしよう。

意識の混濁？ 硬直？

まさか、このおれが、あなたにとって要るとか要らないとか、そんな寝言にかまけることがあると思うのか。

おれがここに示している金言は、作品・作品性に踏み出す勇者にのみ正しく共有されよう。

自分の作品に踏み出したとき、意識が混濁する人は、体内に自分のナルシスティック・アプローチが湧いてきて、それが作品レベル・他者レベルには通じないということにぶつかって行方不明になり、意識が混濁している。

自分の作品に踏み出したとき、意識が硬直する人は、自分のナルシスティック・アプローチを封じ込め、代替によそから既製のイメージや

価値を借用して来、「自分でない」そのアプローチを捉えようとする事で（批評のターゲットを自分から逸らそうとすることで）、意識が硬直している。

ナルシストを「他者」前提に向き合わせると、そんなものだ。

創作において、意識を混濁させない、硬直もさせない。

このことの、当たり前の手ごわさ、ささやかだがごまかしのきかないこの手ごわさに向き合わされると、ナルシストは裏側で、別の発想を思いつきはじめる。

そこに湧いてくる発想は、ナルシズムと作品性の相克において、ついにナルシストになりきるといふ者のパターンだ、と説明しておこう。ナルシストは、きゆうに思いつく。

「わかりました」

まるでついに自由になったというように。

「これをナルシズムというなら、わたしは、ナルシストのわたしを認めてほしいんです」

わたし、気づいた。

オレ、気づいたんだよね。

ナルシストのわたしを愛してよ。

それってそんなにいけないこと？

むしろ、リアルな愛、本当の愛って、そういうものだと思う。

自分のことをごまかして、それで愛されたなんて、けっきょく我慢して納得したふりをしただけの、「ウソ」じゃないですか？

本当の愛は違うと思います。絶対。

わたしわかるもん。

わたし、そのことから逃げたくない。

誰かさんと違って、わたし、逃げません笑。

あるがままのわたし。

本当に、ここから正直で素直なわたし。

それを愛してくれる人が現れるまで、わたし負けちゃダメなんです。あはは、こういうときめきを、わたしは長いこと忘れていた気がする。

わたしは、自分がどうなりたいか、本当に気づいちゃった。

理屈じゃないの。

理屈じゃ、ないんだよね。

これがさあ、あるがままのオレなんだから。

オレがオレのままにいること。それがやがて、正しい。

他者とかそういうのは、「何それ」としか思わない。

やがておれは、正しい。初めからね。

なぜかオレは、ずっとそのことだけは、知っているんだよなあ。

ごめんなさい、その「他者」っていうのは、たぶん、本当には価値のない残念な人たちのことだと思うの。

作品性というなら、実物というなら、いまこのときのわたしが、まさにわたしの実物で、いまのわたしは、何より作品性に満ちていると思う。

ニセモノじゃなく、これが本物のわたし。

どう思いましたか？ あはは、ビビらせちゃったかもしれませんね。

オレはそういう、自分をごまかしたニセモノにだけは、なりたくないんで。

ちゃんとやっている人しか、本当の男にはなれないと思いますよ？

簡単に言うと、このように、自分の作品に踏み出すいうことでコケてしまった人は、たいていこうした逆方向のことを思いつき、ナルシズムをこそ作品性だと言いつつ出す。

そこまで行き着くと、もう、何が正しいかどうかするべきだというようなことは、おれからは言えない。

おれは、自分が正しいと断定してやっているわけではないので、ナルシストになり尽くした——もう戻ってはこない——彼が、誤っている

と断定することもできない。

ただ、おれの側の勝手な言い方というなら、それは宇宙の法則として正しいのだと感じる。

おれにはそう見えるし、正直、そう目撃もしてきた。

ナルシストになり尽くす、というのが、引力のとおりで、宇宙の原理原則としては正しい結果ではなからうか。

だからこそ、おれは宇宙の法則を曲げたい。

宇宙の法則が曲がるのが好きだ。

宇宙の法則に、ただ従うのであれば、引力のとおり、われわれはみんなナルシストになり尽くすだろう。

あなたにとって「本気」とは、ナルシズムの

() のことだ

おれはもともと、この「ナルシズム」という題材で書き話しをすることに、前向きではなかった。

そのわりには、やけに詳しいだろう。

そう、おれはナルシズムに詳しいのだ。

それは、いまから三十年前、おれがまだ十代だったころに、さんざん向き合って研究させられたからだ。

おれがまだ十代だったころ、時代としては九十年代、おれは加藤諦三先生の本を複数読み、自分のナルシズムというものにずいぶん向き合

わされた。

それは忘れるようなことではないし、時間で薄まっていくようなことでもない。

おれがこの題材に前向きになれなかったのは、この題材についてはすでに、加藤諦三先生が言い尽くしているからだ。

何百冊も本が出ている。

いまさらおれが言い足すべきようなことは何一つないのだ。

しかし一方で、時代の局面は、まさにこのナルシズムということに、巨大なツケがやってきたというところに来ている。

もはや、ナルシズムを取り扱わないわけにはいかない、という状況だ。

おれとしては率直に、

「九十年代に逆戻りかよ」

という、憮然とした思いがある。

そのとおり、まったく、九十年代に逆戻りだ。

冗談でもなく、いまこのときの主題は、

「いまさらミステルのイノセントワールドでも聴くのか？」

というところにある。

おれは、その時代逆行に肯定的になれなかったので、けっこう無理やりに、そしてきつときわめて正当なこととして、これをナルシズムと「作品」の読本とした。

ナルシズムについては加藤諦三先生の著書を読めばいいのだ。

ただ、それと「作品」ということの重なりを言うのなら、いくらかおれにも語り手としての出番がありうるだろうということ。

加藤諦三先生は、「魂を呼び込む」などという、わけのわからないことは言わない。

おれが今回書き話したものは、もちろん加藤諦三先生から古く教えら

れてのことではあるが、すべてその後におれが直接体験してきたことにもとづいてのものだ。

加藤諦三先生に教わってはいるが、聞きかじりや丸パクリはしていない。

すべておれの話だ。

ちよつと昔話をしておこう。

おれが加藤諦三先生の本を読み、ナルシズムとの向き合いに、ひどい格闘をしていたころ、時代のせいもあり、おれに影響されて、同じように加藤諦三先生の本を読む奴が、知人のうちに複数現れた。

ある男が述懐したのは、加藤先生の本を指差し、

「この中に、おれのことを書いてある」

ということだった。

彼はショックを受けていた。

加藤先生の本のナルシズムについての指摘は、ことごとく、彼の幼稚な心理と精神にあてはまったのだそうだった。

それからのこと、彼の様子は、まるで体内に「ナルシズム」という語がずっと反響を繰り返しているように見えるほどだった。

その後彼はどうなっただろうか。

おれがその後に見撃したのは、彼が、ナルシズムの克服には「向かえなかった」という事実だった。

彼は、ナルシズムの克服には向かえず、数年後には残念ながらもわたしの友人ではないものになっていつてしまった。

わたしはそのときのことを覚えてる。

「ナルシズムを理解し、ナルシズムを問題として捉えたからといって、ナルシズムの克服に向かうことになるとは限らないんだ」

おれはつくづくそう思い知らされた。

おれはさいわいなことに、同時期に、そうしてナルシズムに向き合

って、ナルシズムを克服するほうへ進んでゆくことができた。

もし、加藤諦三先生に面談することがあるならば、おれは堂々と

「加藤先生のおかげで、現在のわたしがあります」

とお礼と報告をするつもりだ。

わざわざそんなことをしようと、おれが企図しないのは、加藤先生のところにはどうせそうした人がすでにワンサカ詰め寄せているだろうからだ。

それならおれは、いくら何でも、加藤先生から教わった者として、まともな話のひとつでも展開したほうが有益だろうと、思う次第なのだった。

おれの知人は、ナルシズムを克服するほうへ向かうことはできなかった。おれはさいわい、ナルシズムを克服するほうへ向かうことができた。

その差分はなんだったのか。

もちろんこんなことは、どこまでいっても当人次第だ。

当人が選択していることにすぎない。

途中で隕石が降ってきて吹っ飛んだとでもいうならともかく、そうではないかぎり、けっきょく自分が選んでいる。

おれはナルシズムの克服を選んだ。

ナルシズムを理解して、ナルシズムに苦しみ、ナルシズムに苦しむボクを愛してもらおうとする、というようなことは選ばなかった。

いまこうして話しかぎりは、それはただそれだけのとうぜんのことだが、当時のおれとしては、そのことは悲壮なほどの決断だった。

ナルシズムのボクを愛してもらおうとすることは、選ばない、というのは。

おれはどのようにナルシズムを克服してきたのか。

加藤先生に、届くわけではないレポートをしよう。

おれはさまざまな形で、自分の実作、実演、実物、ということに向かった。

ナルシズムについてどうすればよいのかは、そんなにはっきりわかっていたわけではない。

ただ、さまざまな形で、物事を作品としてまともなものにしようとした。

すべてを作品としてまともなものにするためにはどうすればいいか。そのことに向かって突っ込んでいった。

いろんな形で突っ込んでいったが、もちろんそんなことをすべては書いていられない。

無数にあるし、いちいちが膨大な話だ。

それをぜんぶ書けと言われたら、おれはもう、

「おれが本サイトやブログで書いてきたすべてがそれだ、それらをすべて読めよ」

と言うしかない。

作品をまともなものにするためには、身も蓋もない、若いおれはもう「かなぐり捨てる」しかなかった。

この「かなぐり捨てる」ということの中に、ナルシズムも含まれていたらしい。

それはそうだろう、かなぐり捨ててなくてはならない第一のものは、きつとそのナルシズムだったろうから。

作品ということになれば、誰もおれの言うことをきかない。

当たり前だ。

おれの小説を「面白がれ」と言うのか。「感動しろ」と言うのか。言うことをきかせるなんてこと、できるわけがない。

指揮者になって棒を振り、「唄え」と言っても、声なんか出ない。言うことをきかせるなんてことはできない。

手品をやって、客に「びっくりしろ」というのか。

言うことをきかせるなどという、そんな発想は愚かではない。

女の子をデートに誘って、「付き合え」「好い顔をしろ」「おれを好きになれ」というのか。

言うことをきかせることに興味はなくなり、むしろ人が言うことをきかないということに、おれはよろこびを見つけはじめた。

他者の発見だった。

他者を発見し、おれはかなぐり捨てる。

かなぐり捨てると、人に「通じる」ということが起こった。

おれはそのときの歓喜を、いまでもはっきり覚えていてる。

おれはいまもずっとその歓喜の中にいるのだから。

まったく手の届きようなない、赤の他人のうるわしい女性が、かなぐり捨てたおれにはパツと、花の咲いたような笑顔を見せてくれた。

本当に通じるんだ、と、おれは奇蹟を目の当たりにしたと思った。

地べたを這っていたおれに、とてつもなく深く清潔な感動が与えられた。

指揮台に立って指揮棒を振っていると、超能力かよ、みたいなことも起こってくる。

Nくんが唄い出しを間違えそうになるところを、おれは指揮台からパツと差し止めたのだ。

「あつぶねえ」

舞台上の全員が苦笑して思った。

しかし、おれはなぜ、Nくんが間違えて唄い出し「そう」になるところがわかったのだろう。

ブレイヤーは五十人以上並んでいて、おれはそこにNくんが立っているなんてことは把握していないのだ。

ただその瞬間、

(オイ違うぞ！)

と、とっさに手を出して差し止めた。

すると、息を吸ったところでギリギリ止まった、Nくんがそこにいた。何かが通じている。

それが何なのかなんて考えていられない。

ただかなぐり捨てると、本当に何かが通じている。

何が起こっているのかを研究するような余地は、当時のおれにはなかった。

そのまま突き進むしかなかった。

余裕をこいてやれていたようなことではまったくなかったから。

何の素地もなかったおれが、まあ無理やりにでもよくやったものだ。

無理やり駆け抜けて、演奏会が終わった翌日には、もうおれの身体から、その超能力は漏出を始めていた。

そのことは、身体で感覚でなぜか直接わかった。

「本当に、無理やり、出来もしないことをやっていたんだな」

そうしみじみ思われた。

そのときから二十五年かけて、おれは当時のことも含め、「おれが体験していることは何なのか」を突き止めていった。

この報告はその四半世紀の研究結果ということになる。

あのとき何をしていたか、いまでも何をしているのか。

魂を呼び込んでいるのだ。

おれが何かをしているわけではない。

呼び込まれた魂の現象があるだけだ。

おれに功績は一ミリもない。

漠然としたことではなく、魂魄、という事象をおれは体験している。

そのことを研究していくことになったのだが、そのことの奥行きが、まさかこんなにあるとは思わなかった。

当時のおれは、「かなぐり捨てて」までするしかなかった。

現在のおれは、もう余計なものを持っていないので、気魄を地べたに這わせて受け皿にする、ということ、呼び込むべきを呼び込めるようになった。

現在、二〇二五年の九月になって、われわれはナルシズムということに言及しないわけにはいかないという状況になっている。

三十年分のツケがやってきたのだ。

ほとんどの人は加藤諦三先生の本なんか読まなかったろうし、読んだ人も、先ほど言ったように、ナルシズムの克服に向かうというわけではなかった。

そしてナルシズムという問題を取り扱うとき、おれは、たしかな経験にもとづき、次のように言いうると思う。

「かなぐり捨てないと、作品は『まとも』にはならないよ」

おれが体験してきたことをそのままに、そう言えるだろう。

小手先でちよいちよいしたって、何ほどのものにもならない。

かなぐり捨てるといって、何をかなぐり捨てるか。

第一に、ナルシズムをかなぐり捨てないかぎり、作品および作品性というのは、「まとも」にならないだろう。

作品のためにそうしろ、と言いつつもはおれにはない。

作品なんて一般人の人からは縁遠いものだ。

そんな縁遠いもののために、「かなぐり捨てて」などということ、一般人の人には想像しにくいことだろう。

そうではなく、おれが言っているのは、むしろささやかな作品でいいから、縁を近くして、あなたらしくやってみたらいいということだ。

かなぐり捨ててまでしなくていい。

あなたがあなたらしく、ささやかな作品をやればいい。
するとそこには、何が現れるか。

「かなぐり捨てていない」

ということが現れるだろう。

実作や実演というのはそういうものだ。

作品といって、無理をせず立ち回れば、短編小説であろうが陶芸であろうが、「いちおう」「そこそこ」のものは創れるだろう。

それがかまわないし、むしろそうしたものにこそ現れているのだ。

その短編小説は、凡庸な文体で、ふつうの内容だろう。

その陶芸作品も、凡庸な造形で、ふつうのものだろう。

知人に率直に論評させるとどうなるか。

「まあ、ふつうですね」

率直に論評すればそうなるだろう。

このとおり、先に述べたとおりだ。

ん？

ここでおれの言っていることが先に読み取れた人は、とても構造の把握力が高い人だ。

先に述べたとおりだ。

あなたは、ふつうの自分を許しにくいし、ふつうの自分を愛しにくいだろうということだ。

自分の作品を、

「まあ、ふつうですね」

と評された。

あなたは落胆する。

なぜ落胆するのか。

なぜ「ふつう」なのに落胆するのか。

ナルシズムがあるのだ。

あなたには、小説執筆の経験もないし、陶芸に人生を費やしたわけでもないのだが、それでもあなたは「特別」なのだから、その作品が「ふつ

う」と言われると落胆する。

あなたは、短編小説の第二作を書き、陶芸では、次の造形に挑戦したとする。

その後は、第三、第四、とやっていったとする。

それが、十も二十も、とつづけられることはまずない。

あなたのところが折れる。

精神が持たない。

何にあなたのところは折れるのか。

毎回の落胆にところが折れる。

毎回、「ふつう」「凡庸」「わざとらしい」しか出て来ないことにところが折れる。

ナルシズムがあり、あなたは自分を「特別」と思っているので、さつさと作品として「特別」な何かが出て来てくれないと、ところが折れるのだ。

そこであなたは、一念発起して、小説の執筆に向かう「方法」じたいを模索し、取り組みを本格化することにした。

どのような「方法」がありうるだろうか。

よくあるのは、自分の好きな音楽をガンガン聴いて、イメージとテンションを高めてから執筆に向かう、あるいは構想を膨らませる、という方法だ。

「こころを活発な状態にしないと、創作なんかできるわけないから」

あなたが作品に向かおうとするときの手がかり。

よくよく見ると、あなたはけっつきよく、胸が「キューン」とするということ、そのことしか手がかりに持っていないということになる。

自分を「キューン」とさせて、その感情の快感から、作品への「気持ち」を高めていこうとする。

あなたは気持ちを高め、思い切った作品をあらわそうと、真剣に造作

と執筆に向かう。

その場合、執筆がどうなるかという例について考えていこう。

そのときあなたは、「自分の昂る気持ちのままに書いた文章こそが、読み手のところに流れ込んでいく」というイメージで、その執筆に没頭するようになる。

そのことには、はつきりとした快感がある。

そして、翌朝、あるいは三日後に、原稿を読み直すと、その原稿に見つかるものは、

「何の魂も呼び込まない文章」だ。

これは何を「発射」した代物なのか。

借りてきたイメージに耽溺し、文体を気取らせ、感情的なまま読み手に侵入しようとしているだろうけれど、それらの思いきりのすべてが逆に陳腐さを際立たせ、幼稚さを爆裂させているというような文章だ。

あなたはその、自分の書いた感情的なだけの文章を、恥ずかしく思い、原稿をボツにする。

そのことを何度か繰り返すと、

「こんなふうに、感情的に書いたってダメなんだ」

ということを理解する。

だからあなたは、独りよがりな気持ちを昂ぶらせず、あくまで読み手にとって読みやすいように書くんだ、とこころがけて筆を進めていく。

そうするとどうなるか。

こんどは、しょせんその書き物が「冷淡だ」という問題にぶつかってくる。

聞こえて来るものがない、迫ってくるものがない。

いちおう読めるが、読み物として「ザコ」すぎる。

あなたはいちおう読み手のことを考えているが、あなたにとって読み

手というのは、

「ね、読んでみてどうだった？」

というような存在だ。

あるいは「いいね」を押してくれたり、コメント欄に肯定的な寸評を書いてくれるどこかの人のことだ。

あなたは他者を発見していない。

他者を発見していないので、読み手も発見していない。

それでは、気魄を読み手ともども受け皿たる作品に為さしめるなんてことはできない。

それでけつきよく、あなたのやることは、小説に向けてであれ読み手に向けてであれ、「自分の気持ちをぶっ込む」ということでしかなくなってしまう。

自分が「キューン」となるということを手がかりに、けつきよく「わたしの気持ちをぶちまけてわからせる」という作品を手がけるしかない。

あなたが若くておっぱいのデカイ女性でもないかぎり、あなたの小説を心待ちにしてくれる人なんて出て来ないだろうし、あなたの小説をその手にギュッと握りしめて震えてくれる人なんて出て来ないだろう。

作品をやってはみても、人から何というほどの反応はもらえない。

それはしょうがないことだ。

あなたはそれについて、

「まだ実力がないからしょうがない。それは我慢する」

と引き受ける。

我慢？

本書、ナルシズムと作品の読本は、あなたに何を教えているか。

あなたには、作品に向かうアプローチ方法がすでにある、ということをお教えている。

あなたがごく一般的な人なら、あなたにとって「作品」なんてものは、

ずいぶん縁遠いものだろう。

だからあなたは、「作品」などというものについて、「アプローチ方法を持つていないですよ」と思っている。

そうではないのだ。

あなたはすでに、「作品」というものに向けての、アプローチ方法を持っている。

やってみればわかる。

あなたが、ちよつとでも本気で「作品」をやってみようとしたとき、あなたは何ひとつ教わらなくても、「胸をキューンとさせるもののほうへ向かっていく」というアプローチをする。

何も教えなくても勝手にあなたはそうする。

作品へのアプローチ方法は、「あつてしまう」のだ。

そのアプローチ方法こそ、ナルシズムの快感原則なのだ。

そして本書は同時に、次のことも教えている。

あなたは自分自身について、どこまでも、

「わたしはナルシストなのかなあ、それとも、そうではないのかなあ」ということを疑問に思っている。

そのことを自分ではつきりさせておきたいだろう。

そのためには、ちよこつとだけ「本気」で、何かしらの作品・表現に向かってみたらいい。

ちよこつとだけでいい。

あなたがピアノを弾いたりバイオリンを弾いたりするとしたら、あなたはその演奏表現を、どうやって「本気」でするだろうか。

そりゃあ、数々のレッスンの先生が言ってきたとおりにする。

「もっと感情を込めて！」

レッスンの先生が「魂を呼び込め」とは言わなかっただろう。感情を込めるということ。それをちよこつとだけ本気でする。

するようになるか。

胸がキューンとなってくるに決まっている。

ちょこつとでも「本気」でやろうとすると、ナルシシティックな方法が出て来る。

あなたにとって「本気」とは、「ナルシシズムの解放」なのだ。

あなたは「本気」になって、世界に自分のナルシシズムをぶっ放す。

そのときあなたは、これまでの自分の違和感が消えた、ときめきを覚える。

「本気」といって、それは「気」なのだから、気魄のことだ。

あなたはその「気」を、世界にぶっ込み、世界を変える、と思っている。

世界を受け皿に、自分の気持ちをぶっ込むと思っている。

そのことを本気で考えたとキューンとする。

よほどの経験と訓練の果てにいないかぎり、あなたはナルシシストなのだ。

「本気」といって、「気魄を受け皿にする」「そこに魂が呼び込まれる」なんて、まったくやり方がわからないだろう。

当たり前だ。

胸がキューンとするほうに向かっていくしかない。

そのやり方しかわからないはずだ。

そしてそのキューンのやり方（快感原則）はなぜかわかってしまうはずだ。

人は誰でも、幼児のころ、ナルシシズムの中を過ごしてきているからだ。

幼児のころから、ナルシシズムの方法は知っていて、一方、そうではない「本気」のやり方など、ほとんどの人は知らない。知りようがない。

あなたは「本気」で取り組んだそれを、「ふつう」と評されると落胆す

る。

あなたは自分のことを「割とふつうですけど」なんて思っていない。

あなたは本当は自分のことを「特別な何か」の人と思っている。

だから、あなたが本気で取り組んだことは、誰かの胸にキューンと刺さってほしいし、その作品と表現については、評者に「特別な何かがありますよね」と震え声で言われるようでありたいと、あなたは望んでいる。

おれの場合はどうだったかつて？

おれの場合は、だから、かなぐり捨てていたから、それどころじゃなかった。

胸に刺さるとか、評者がどうこうとか、そんなこと一ミリも考える余裕はなかった。

自分の気魄を、地べた這わせていって受け皿とし、そこに魂を呼び込む。

そして人の中枢に通じる現象が起こるとして、その現象の功績はおれにはない。

すべて、その呼び込まれた魂が体験されるだけだ。

そういう方法と現象があると、おれは唱えるのだが、仮にあなたがこのことを知っていったとしても、あなたは途中で疑義を覚えて立ち止まるだろう。

「自分の功績じゃないのだったら、意味なくないですか？」

おれが冗談じゃなく、百回訊かれてきたことだ。

あなたの望みは何か。

あなたの望みは、あなたの「本気」が、人に刺さり、世界に刺さる、というようなことだ。

あなたの望みは、「ナルシシストのわたしを愛してほしい」ということにある。

ナルシシストのわたしを愛させたい。

ナルシシストのわたしのまま認めてほしい。

ナルシシストのわたしをこそ許してほしい。

ナルシシズムを超越して、魂を呼び込むなどということは、あなたの望みではないのだ。

「だって、自分の功績じゃないのだとすると、やっていてさびしくないですか？」

^^人にとって、作品に向き合うということは、己のナルシシズムに向き合うということなのだ^^。

そして同時に、己の作品を「まとも」なものにするというアプローチは、己のナルシシズムを克服してゆくというアプローチに重なるのである。

あなたがいま読んでいるものは、ナルシシズムと作品の読本だ。

ナルシシズムを克服してゆくアプローチは次のとおりだった。

- ①「が」の発見／自分を特別だと思っている
- ②「我慢」の発見／快感原則と我慢激怒の往復
- ③「他者」の発見／他人の決めることは他人が決める
- ④「冷淡問題」の発見／ザコの振る舞いに逃避するべからず
- ⑤「愛」の発見／魂を呼び込め

他者を発見せよ。他者を発見しないかぎり、自分が特別という誤認からは逃れられない。

自分が特別という誤認にいううちは、ありもしない我慢が積み重なる。

他者、そもそも他者とは、「言うことをきかない存在」というのが定義だ。

他者とは何か。それは単純なことだ。他人の決めることは他人が決める

るというだけのことだ。

するとここで、「しょせん他人ですもんね」という安っぽい冷淡ぶりが見えて来る。

それは、「他人」という存在を前にして怯えて引っ込もうとしているだけのザコの挙動だ。

魂を呼び込め。

他者の中枢へ直接通じる現象があるなら、他者を侵略して支配するなどという発想も行為も必要なくなる。

このようなことに本当に取り組むと、ほとんどの人はたちまち精神的なパニックを起こすということも、わたしはよくよく知っている。

とはいえ、それは感情が未分化だから起こっていることだ。

感情が未分化だと、感情に振り回され、不明の感情に振り回されるから、それはパニックの様相になる。

パニックの当事者はそのとき、自分こそが誰よりも「こころある」と思っているものだけれど、それも単純に誤りだ。

心理的成長・感情の分化を得ていった人が「こころある」人になるのであって、未分化の感情に振り回される人が「こころある」人なのではない。

こころある人は感情に振り回されない。

ちよこつとでも本気で作品に向き合うと、しだいに、ひとつのことに気づき始める。

自分の持っていた「自負」が、その「作品」という営為に対しては、まったく何の役にも立たないのではないかということだ。

胸に「キューン」と来る、あのときめきさえ覚えていた、自我の中央とさえ言いたくなるほどの自負。

あれがまさか、わたしの秘めたる「自信」ではなかったのか。わたしは、ナルシシズムを克服したかどうかについて、「克服しました」

という報告を受けつけるつもりはない。

克服できていません、という話を受けつけるつもりもないし、「どうなんでしょうね」というあいまいに濁した話も受けつけるつもりがない。

おれは、おれ自身がそうしてきたように、実作・実演・実物をもってのみ、ナルシズム克服の如何を看取る。

三十年前、知人の体内には「ナルシズム」という語が深く反響さえしているように見えたが、だからといってどうなのだ。

そうではない、おれはおれの体外に「作品」を響かせることに向かったからこそ、ナルシズムの克服へと進めたのだと思う。

作品レベルで、実作レベルで、実演レベルで、ナルシズムが出現しない人というのは、現実的にはきわめて少ない。

あなたがそのきわめて少数の例外に当たるという可能性も、ないではないが、何もそのような無理のある仮定にわざわざ立たなくてもいいのではないか。

あなたがよほど自分のことを特別だと思っているのであれば、話はわかるけれど。

あなたの作品を、誰かが「ふつう」と評したら、あなたは落胆する。

けれども、いまのあなたでは想像がつかないかもしれない話、おれはいまここに示している自分の書き物について、正直に言えば「ふつう」に書いているつもりでいる。

特別な何かを現わそうとはしていない。

おれは「ふつう」だ。

おれは「ふつう」で、ここに示している文章はどちらかというと、乱雑できつたねえけれども、だらしないおれだから、まあいいじゃん、と思っ

ている。

おれはこの、ていどの低いおれを許し、愛しているのだ。

が。

なぜ「これでいい」のかというと、呼び込むべきものを呼び込めているからだ。

呼び込むべきものを呼び込めているのなら、おれの文章なんて「ふつう」でいいし、それ以下のヘッタクソでもかまわない。

ナルシズムを克服すると言ったって、そんなもの、自分の実作と、実演と、実物、それをみずから突きつけながら進むのでなかったら。

克服なんてうそっぱちにしかならなかっただろう。

かなぐり捨てて駆け抜けようとしていた日々がなつかしい。

恐ろしい日々だったけれど。

あのころの自分に後れを取らないようでありたい。

さいわい、あの日々を思い出しても、おれはキューンとなるわけではない。

じゃあきつとあのとときのつづきを生きられているのだろう。

そうして連続性があるのも、主題と作品性の特徴だ。

「ナルシズムと作品の読本／了」